
東方異世界

メディラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方異世界

【Nコード】

N9211J

【作者名】

メデイラス

【あらすじ】

主役は蓬萊山輝夜とトルネコです。でもオムニバスみたいなかんじ。

邂逅

太陽がじりじりと照り付ける砂漠に、ふらふらと覚束ない足取りでさまよう者がいた。腰までかかる黒髪は太陽の熱にさらされて熱を持ち、綺麗な髪に手をのぼす人がいれば驚きでのけてしまいそうである。彼女はこの砂漠を、水も持たずに数時間歩き続けていた。肌は汗で濡れて、いつ脱水症状に陥ってもおかしくないだろう。

「うあつ」

砂漠の砂に足をとられて転ぶ。いつもなら他愛のない事で済ませられるが、何分体力が殆ど残っていないのは明らかで、もはや立ち上がるほどの力もない。事実、彼女は何度も立ち上がろうとしているが、いずれも失敗している。このまま砂漠で物言わぬ死体となってしまうだろう。何者かが通りかからなければ。

「っ……え……」

とうとう立ち上がれぬまま、彼女は意識を手放した。

そしてこちらは、砂漠を馬車で横断している商人が一人。夜営のためのテント、長持ちする食料、水――。無謀な先程の女性とは正反対に、十分すぎる備えをしている。そして行程も極めて順調で、あと二日ほどで砂漠を渡りきることができそうだった。そんな中、彼の目に先程の女性が目にうつる。

「こんな砂漠の真ん中で行き倒れ？」

彼は非情ではなく、人としての温情を持ち合わせていた。彼女の手前で馬車を止め、馬車の中に担ぎ込む。

「凄い熱だ、水は……飲めないか。よし、無理矢理にでも」

幸運な事に、彼女は死を免れた。

「……ん」

数時間後、意識を取り戻す女性。まず目に入るのは馬車の天井。重い頭を上げて起き上がると砂漠を走る馬と、平均的な男性。よりはかなり太めな男が目に入る。

「……どうやら助かったのかしら」

状況の確認はひとまず置いておき、まずは身の安全を確認して胸を撫で下ろす。そして馬車の中を見渡すと、食料、水や何に使うかわからない棒や布のようなものがある。そして、袋に入った大量の武器、防具、金貨などが目につく。

「……？」

小さい物音に気がついたのか、馬に乗っていた男がこちらを一瞥する。そして起き上がっている彼女を確認すると馬を止め、彼女へ語りかけてきた。

「よかった、どうやらなんともないみたいです、安心しましたよ」

「あなたが私を助けてくれたのね、ありがとう礼を言うわ。今は何も持っていないけど、後で必ずお礼をしますから」

「そんな、旅は道連れ世は情けと言うぐらいですから、そこまで恩に感じる必要はありません。砂漠の真ん中に倒れていたんですから、何か事情もあったんだろうと推定はできますから」

女性の礼に、気にする事はないと笑って済ませる男。そう簡単にできる態度ではない。

「それより、砂漠を越えるにはあと二日はかかります。今は大丈夫とはいえまた体調を崩さないとは限らないので、休んでいたほうがいいですよ」

「ありがとう——言葉に甘えるとして、助けてもらった人の名前を聞かないなんて礼儀に反するわ。お名前を聞かせてくれない？」

彼女の問いに、男は懷から名刺を取り出し彼女に渡す。

「私は……この全てが入り交じった世界で、最高の武器商人を目指して旅をしているトルネコといいます」

「これはご丁寧……。貴方が自己紹介したんだから、私も言わな

いとね……私は蓬萊山輝夜、よろしくお願いします」

新世界（前書き）

単語元ネタ

イオナズン・世界樹 ドラゴンクエストシリーズ
スペルブック トルネコの大冒険だが仕様が違う
スペルカード・幻想郷 東方Project
エンドレス・フロンティア 無限のフロンティア
エンポリウム ザ・サード

新世界

「トルネコさん、入り交じった世界って言ったけど、ここがどんな所か教えてくれない？まだここに来たばかりで、ろくにこの世界の事を知らないの」

「知らない……という事は、新しくこの世界の仲間入りをした世界の人、ということですか」

トルネコは合点がいった、と頷く。

「いいでしょう。長くなりますが、少し私の話にお付き合いください」

トルネコがこの世界にたどり着いたのは今から数ヶ月程前。妻ネネと息子のポポロと団欒を過ごし、就寝した矢先の出来事だった。滅多に起きることのない地震の後、何か浮いた感覚がして、揺れがおさまる。危険がない事を確認してから窓から外を見ると――そこにはいままで暮らしていた光景とは違う、一面の草原が広がっていた。あたりに民家はなく、トルネコ一家の家だけがそこに移動してきたことになる。

「私の場合は家とネネとポポロが一緒になってこの世界へ来ました。しかし他にも私と同じようにこの世界にやってきた人は、村ごと、城ごと、はたまた一人で……様々なケースがあるようです」

この世界へやってきたトルネコがまずした事は、回りに同じ人間が住んでいるか確かめる事。しばらく草原を進めば程なく、人間が住んでいる集落を見つける事ができた。そこでここは何処なのか問うと、「新しくこの世界の仲間入りをした世界の人間」というワードを聞いたのである。

「ここは何が要因かはわかりませんが、複数、それも百や二百では足りない程の世界が融合した世界のようなようです。この世界に付けられ

たもつとも古い呼称がエンドレス・フロンティアというものだそうです」

トルネコは最初、自らの境遇を上手く把握出来なかったが、それでも日々を暮らすには糧が必要だ。幸い、トルネコの暮らしていた世界の単価はゴールド……金貨そのものだ。そのものにはなんの価値もない紙幣の類いではない。それにトルネコの家には彼の商売道具である武器や防具もいくらか貯蔵されていた。トルネコ一家は持ち前のアクティブさを生かし、必要な物以外は持たずに旅に出て都会へとたどり着き、商売を経て新しく家と商店を購入することが出来たのである。

「この世界は多くの文明と変わらず貨幣文化が浸透しています。ただし物々交換も行われていますし、貨幣はそのものに価値があるものでなければいけません。事実この世界に飛ばされて路上暮らし同然となった人も多いようですな」

商いをする中で、トルネコは人間と呼ばれている存在でも、この世界では純粋な人間と、獣などと混血である、いわゆる亜人と呼ばれる種族が存在する事に気がつく。全身が獣のように毛むくじらであったりとか、背中に立派な翼を持ち、空を飛ぶものがいたり等。「私のような商人は、相手の種族を見て態度を決めるようでは信用を無くしてしまいますからそのような事はありませんが、ひどい所では殺し合いにまでなる程の差別がある場所もあるようですね」

「それは……酷いわね」

「その通りですよ。この世界にいる以上、互いが出合わない事などほとんどないというのに」

「本当ね。で、トルネコさんは今行商の途中、といったところかしら」

「ええ、昔の私の世界では武器屋トルネコと言えば知らない人間はいないといってよいほどだったんですが、今の世界では知らない人のほうが多い。ですから名前を売るために家族を置いて行商をしているわけです」

「家族が心配じゃないの？」

輝夜が問い掛けると、トルネコは苦笑して答える。

「言っではなんですが、私達はどこへ居ても心で繋がっているんですよ。それに私がいないくらいでへこたれるような妻や息子じゃありません。……まあ、淋しいことは淋しいですが」

「信頼しあってるのね」

（私も信じていいのかしら、永琳、鈴仙、てゐ……私はどうやっても死なないから、あなたたちさえ生きていてくれれば、いつか）

輝夜は永遠亭の家族達に思いを馳せる。今は遠く離れていても、いつかまた巡り遭える——そう信じ、輝夜は気分を一新させた。

「私は、竹林でいつものように妹紅と戦っていたら、空に大きな亀裂が走って……気がついたら、砂漠に倒れていたわ」

「偶然私が通り掛かってよかったですね。もし私がいなければそのまま砂漠の塵となっていたところですよ」

「そうね。死ぬほど暑くてもうダメかと思ったわ」

「所で輝夜さんはなんの身寄りもないご様子。そこでどうですか。私の行商に同行すると言うのは」

「私にとっては願ってもない事だけど、いいの？ 迷惑じゃない？」

「いいんですよ。ちょうど手伝いが欲しかったところですから」

「私が居れば手伝いを雇わないだけお得、ってところかしら？」

「ははは、そういうことです」

「ふふっ、抜目がないのね」

輝夜から思わず笑みが零れる。トルネコが言っていること全てが嘘だと言うつもりはないが、そこには確かな暖かみがある。このよくな人のいい商人とならば、一緒に旅をして得をすることはあれど、損をすることはないだろう。それに損をしても別にいいか、と思わせる人柄だった。

「それにこんな綺麗なお嬢さんがお手伝いとあれば目の保養にもなります」

「うふふ、お上手ねえ……」

他愛もない話をしながら、商人と姫の旅が始まった。

二人の出会いから二日がたち、砂漠の横断まであと一歩というところ、馬車を狙う影が現れる。

突如として馬車の後方に爆発が起きたのだ。

「きゃっ！いったい何が起きたの？」

「ふーむ……これはおそらく、砂漠の盗賊団の仕業でしような。最近モンスターを用いた強盗が多いと前の町で聞いてますから。まあ、だから私単独で砂漠を横断していたんですが」

「ずいぶん冷静なのね……大丈夫なの？」

「昔とったきねづかと言いますか、まあ大丈夫でしょう。輝夜さんは馬車の中でじっとしててください」 トルネコは馬から降り、馬車の回りを見渡す。見た限りでは後の方向から馬に乗り曲刀を持ったいかにもといった盗賊が10数人と、そのさらに後方にバギーに乗り火器類を所持した盗賊が二人。

「ふむ……スペルブック一枚でかたが付きそうだな」

トルネコは背中の道具箱から巻物を一枚取り出し、羽ペンで「イオナズン」と書き込む。この巻物はスペルブックといい、普通の巻物とは違う効果を持つ。自分が一度覚えた魔法なら忘れてしまっても、その魔法の名前を書き込んで唱えるだけで効果が得られるというものだ。イオナズンとは広範囲に大爆発を引き起こす魔法で、並みの人間なら一発受けただけで動けなくなる程度の威力を持つ。

「狙いを付けて……イオナズン」

たった一言、それだけで盗賊の中心部に大爆発が引き起こされた。か弱い商人を軽く捻るつもりだった盗賊たちは、たった一発の魔法で吹き飛ばされた。バギーもはや走ることは不可能というぐらいに破壊されているし、馬たちもピクリとも動かない。今の一撃で死んだ盗賊もいるだろうが、失神しただけの人も死の運命は免れないだろう。

「これであらかた——」

片付いただろう、とトルネコは馬に戻ろうとするが、盗賊たちが倒れている周辺の砂がうねうねと盛り上がっている事に気がつく。

——シャアアアアア——！！

砂漠に咆哮とも言い難い音が響く。この音を、トルネコは聞いたことがあった。トルネコがもといた世界にいたモンスター、サンドマスターの声である。

「厄介な敵だな」

サンドマスターは、言わば砂漠に棲息する大ミミズのような存在。ミミズが地中に住むように、サンドマスターは砂漠の砂の中で棲息し、通り掛かった獲物を喰らう、獰猛な肉食のモンスターだ。そのもっとも厄介な特徴は、獲物を喰らう寸前まで砂の中から出てこない事。サンドマスターは砂の中から獲物の体温を感じ取り、正確に肉を喰らう。姿が見えない故、狙いが付けられないのだ。

トルネコは精神を研ぎ澄ませ、敵の襲来に備えるが——数分経っても、姿どころか鳴き声すら聞こえない。あの威力の魔法を見て、怖じけづき逃げたのだろう。トルネコがそう結論づけ、馬車に戻ろうとした時、それが間違いであったことに気がついた。

馬車の下に砂が盛り上がっていたのである。

「しまった！輝夜さん、逃げ——」

——シャアアアアア——！！

——サンドマスターが馬車の床を貫いた。

「あぐっ！？」

輝夜にトルネコの声が聞こえると同時に、輝夜首筋にサンドマスターの鋭い牙が食い込む。馬車の中に血が弾けた。

「やって……くれるじゃないっ！」

輝夜がサンドマスターの体を引っつかみ、馬車の外に投げ捨てる——シャアッ！？

サンドマスターの鳴き声に動揺が走る。当然だろう。首筋にいきなり噛み付かれれば、まともな判断などできまい。ましてや、自らの肉ごと自分を引きはがすなどとは予想はできまい。

「はっ！残念だったわね……死ぬ程の痛みなんて、妹紅との決闘で何度も経験してんのよ！」

輝夜の掌に、弾幕を張るために使うエネルギーが集まる。

「ここは幻想郷じゃない……スペルカードルールもない……！だからあなたを殺しても問題ないでしょ？」

サンドマスターは動揺のため、事態の把握が遅れた。そしてその遅れは、命を失う事を意味していた。

輝夜の掌から、エネルギーが放たれ——サンドマスターは、かけら一つ残さず消滅した。

「はぁ、はぁ……」

「輝夜さん、だい——」

少し遅れてトルネコが馬車の中を覗くと、そこには首から血を流す輝夜と飛び散った血が床や壁に染みた光景が広がっていた。

「大変だ！いますぐ手当を」

トルネコは秘蔵の袋から、瓶詰めの雫を取り出した。世界樹の雫と呼ばれる、傷を完全回復させる貴重な露だ。しかし輝夜はその手を止める。

「だ、大丈夫よ……すぐ治るわ」

「何言ってるんですか！？そんな酷い傷が、自然に治るわけないでしょう！」

「大丈夫よ！だって私は……普通じゃないんだから……ほら、見てよ」

輝夜は首筋をトルネコに見せる。あれだけ吹き出していた血は止まり、引きちぎった肉も再生していく。

「私は蓬莱の薬を飲んだ蓬莱人。私の体は一生老いることはないし、死に至る事もない。不老不死なのよ。まあ、痛みは感じるけどね」

言い終わる頃には、傷は完全に再生しきっていた。

「驚いた？死にたくても死ねない体なのよ、私は」

「……………流石の私も、これは驚きました。いままで体が再生する生き物自体に会ったことはありませんが、不老不死は始めてです」

「人を珍獣みたいに言うのね。まあ、その通りなんだけど……………それにしても、まかせてって言った割にこのていたらくなんて、情けないわね」

「はは、すみません。こちらを狙われる事までは思い至らなくて……………服が血で汚れてしまいましたね、町へ着いたら新しい服を買い直すか」

トルネコの申し出に、輝夜はきよんとする。

「こんな化け物みたいな現象を見て、まだ私を手伝いとして使おうなんて、変わり者ね、あなた」

「私は商人ですから、偏見は持たないようにしているんですよ」

「ふふっ、本当に面白い人」

「光栄です。……………さて、なんともないようなら、旅を続けてもいいですか？」

「勿論。早く町を見てみたいしね。聞いてなかったけど、町の名前はなんていうの？」

トルネコは前の町で購入した地図を見て、輝夜に告げる。

「ええと……………地図によれば、機械が発展した町、エンポリウムとの事ですね。私の世界にはなかった戦車や、銃などが盛んだ、と聞いています。この町では武器や防具はあまり売れないかもしれませんね」

進化と言う名の魔物

サンドマスターとの戦闘から数時間ほどたったころ、二人の目に金属でできた建物が入ってくる。科学が発展した町、エンポリウムである。目に付く場所に自然はなく、住居も全て頑丈な素材で作られている。栄えた通りにも食物の類いはなく、機械のジャンク品や燃料、弾薬ばかりである。

彼らは機械の仕組みを知っているわけではない。ましてや、作る事など不可能だろう。ただ、これが弾薬として使えるもの「だろう」とたかをくくって売っているのである。勿論、その中には不良品や役に立たない物もある。しかし、それは買ってしまった方に責任があるというシステムの為罪に問われる事はない。個人的な報復の可能性はあるかもしれないが。

機械による文明を築いているこの町だが、個人が持てる機械のレベルは限られている。また、生産・加工も度が過ぎれば罰せられるという決まりである。「テクノス・タブー」と呼ばれる法は、この町の支配階級であるザ・サードと言われる者たちによって執行される。なんでもこの世界の過去に、人間たちが過ぎた力、すなわち機械を使い世界を滅ぼしてしまった事が原因らしい。ザ・サードが生まれた原因でもあるし、二人が通って来た砂漠も元々はエンポリウムがあった世界の一部だったとの事。その法に触れれば厳しく対処され、一家皆殺しのケースもあったそうだ。

とはいえ、この町で暮らすには機械が必須である。近しい人間がそのようなみせしめに合っても、それを捨てることはできない。最近では執行も減っているという。まあ、減っているそのものの原因は、とあるなんでも屋が執行する者を破壊したりしたから、という噂もあるが。

そんな機械だらけの町である。世界が混じった影響で若干薄れてはいたが、二人の乗った馬車はどうしようもなく目立っていた。「

なんか皆がこっちを見てるわね」

「このあたりの移動手段は機械の車や空を飛ぶ乗り物ぐらいしかないようですからね。生き物が動力の乗り物が珍しいんでしょう」

「ふーん、そういうものなのね……で、これからどうするの？」

「まずは服の手配から始めましょう。手伝いの服が血まみれではお客も怪しみます」

首筋を破られたため、首から下の布、つまりところ全体が血でにじんでいる。このまま外を歩けば通報されかねない。傷は完全に治ってしまっているわけだし、自分から出た血という言い訳も使えない。殺人コースまっしぐらである。

数分服飾店を探すと、幸いにもすぐ見つけることが出来た。流石にその服のまま外に出るわけにはいけないので、首から下に布を巻き付けて店の中に入る。

「いらっしやーい」

店員の挨拶を聞き流し、輝夜とトルネコは服を探す作業に入る。

「むー……」

しかし店の品揃えははつきり言って良くなく、輝夜の気に入る……どころか、サイズが合いそうな服すらなかった。

「これは困りましたね」

「こうなったら死ぬ気で洗い落とすかなさそうね」

血の染み付いた服を真っさらに同然にするのは骨が折れそうだが、着れる服すらないのならばそれもやむなし。トルネコは店員に、洗剤の売っている店を尋ねる。

「洗剤？ふーん、それなら家で使ってる洗剤を譲ってやろうかい」

別の店に客を譲るのはしゃく、という事なのだろうか洗剤を売ってやる、という話になった。衛生等に不安がないわけではないが、トルネコが輝夜に確認した所それでいい、と言った為取引は成立した。

「しかしあんたら、旅人のように見えるがそんな大量の洗剤を何に使うんだい？」

「ふふ……内緒よ」

「ふーん？まあ客の素性なんて気にしてたらここで商売は出来ないからね。さ、持って行きな」洗剤を受け取り、店員の挨拶を背にそのまま店を出て馬車へ戻る二人。

「私は服を洗わなきゃいけないから、今日は手伝いをできそうにないわ」

輝夜は残念そうに話した。

「まあ、仕方ありませんね。目的も果たした事ですから、馬車を郊外に止めておきましょう」

馬車で町の中に入って来たのは、輝夜の事がバレるリスクを最小限にするためのものである。それが解決した今では、小回りのきかない馬車は邪魔でしかない。トルネコは来た道に戻り、町の外、それも人気の無い所に馬車を止めておく。

「まあここなら危険は無いでしょう。人通りも少ないようです。洗濯には飲み水を使ってください」

「ありがとうございます」

「お安い御用ですよ、それぐらいは……では、私は商いへ行って来ます」

トルネコはものの数秒商品を適当に選別し袋に入れ、町へ再び入っていった。

「しかし、洗うとは言ったものの……」

輝夜は血の染みた服を摘んで、うんざりしたように呟いた。

「やっぱりやめとけばよかったかしら」

「火乃香、君に頼みたい事がある」

エンポリウムの支配階級であるザ・サードきつての行動派である浄眼機は、戦車を修理に出していた刀使い、火乃香に依頼をしていた。

「自分の所の部隊使ってやればいいーじゃん、B・Bも空いてるんだろ？」

「まだこの世界の事もよくわかっていない。出来るだけ部隊は空けておきたい——それに、旅先で聞いた情報を私に聞かせてくれるだけでいいんだ」

「……どんなのだよ」

「二つある。まず一つめは、黄金の腕輪のありか」

火乃香は浄眼機の話聞いて首を傾げる。

「黄金の腕輪？……そんなもの、どこにでもあるんじゃないの？」

「確かに、黄金で作られただけの腕輪ならどこにでもあるだろう。

これは世界の融合現象が確認されてから入ってきた——言い伝えのような話だが、確かに真実のようだ」

あらゆる生物が、それを施す事により進化を遂げる。自然の摂理から外れた外法。

「その力で世界を滅ぼしかけた、と聞いている。その際に使われた黄金の腕輪が偽物だった、ということも」

「その腕輪を使われないよう、監視下に置きたいってこと？」

「そうだ。今はまだ実害がないが、もし完全なもので施されれば、間違いない世界危機だ。旅先で情報を得て、可能ならば持つてきてくれると助かる」

「一応、考えとく」

「そうか。では二つ目だ。火乃香は鋭い殻に包まれた獣の話を聞いたことがあるか？」

「へ？ うーん……聞いたことないけど」

「その獣に滅ぼされた世界が、この世界に融合していると情報を掴んだ」

その獣は遙か太古の時代に世界に飛来し、胎動を続けていたのだという。いわば星に寄生する生き物と言った所だろうか。

「その世界での呼び名はラヴォス。古い言葉で大きな火という意味を持つらしい。その獣が今でも生きているかを調べてほしい」

「どっちもまだ憶測の段階で、部隊も動かせないって事か……。イクスなら何か知ってるかな？」

「彼にもそれとなく聞いておいてほしい。今は情報を集めなければ、動くことも出来ないからな」

「わかった、受けるよ」

最初は気乗りしなかった火乃香だったが、流石に世界の危機とあっては個人の考えを持ち込む隙もない。二つ返事で受けると伝える。「苦勞をかけたくはないのだが……信用できる人間が火乃香以外にいないのでな。幸運を祈る」

「調べるだけだし、まさか傷を負うようなヘマはしないって。話はそれだけ？」

「ああ、ではな」

浄眼機は話を終えると、そのまま中央府へ帰っていった。

「やはり、売れ行きは芳しくないですねえ」

トルネコが商いを始めてから数時間経つが、やはりというかほとんど売れていない。そもそも立ち止まって見てくれる客自体が少ないのだ。トルネコの知る所ではないのだが、実はこの町には既に光線の類で使える剣、いわゆるレーザーブレードが存在していたりする。純粹な金属で作られた刀剣の類は、ニーズが無いのである。今まで売れたものもそのような長剣ではなく、暗器や投擲の用途に使いやすいナイフ系のものだった。

「これではいくら続けてもいい結果は出そうにないですね……畳みますか」

トルネコが見切りを付けて店を畳もうとすると、突然頭にフードを被った男性がトルネコに話し掛けてくる。

「おい、店主」

「む？おっと、お客様ですか？」

「ああ、そうだ。聞きたい事がある。商品の中に黄金の腕輪はある

か？」

——その言葉に、トルネコの瞳が鋭くなる。

「黄金の腕輪……ですか。失礼ですが、どのような事に使うつもりです？」

「……妹の就職祝いにプレゼントするつもりだ。あるのかないのか、どっちだ？」

男は焦れたように聞いてくる。トルネコは顔は笑いながらも、警戒は緩めぬように袋から黄金の腕輪を取り出す。

「これはお値打ちものですよ」

「それで、いくらなんだ？」

「そうですね……100万枚程の金貨があれば、同じ価値になります」

「んなっ……貴様、客を舐めてるのか!？」

金貨も純粋ではないとは言え金である。腕輪等の加工に手間がかかるとしても、100万枚もの金貨と黄金の腕輪1つでは普通に考えれば価値は釣り合わない。トルネコもそんなミスを犯すほど臆抜けていない。

——わざと、吹っ掛けているのだ。普通の人間には手が出ない程の値段で。

「出せないのであれば商談は無かった事にしましょう。さあ、店じまいをするのでどいていただけますか」

「くっ……わかった。また出直す」

男は悔しそうな表情をしながら立ち去った。トルネコはその男が見えなくなってから店じまいを始め、数分で袋に商品を納め終る。

「さて……帰りますか」

トルネコは——何故か元来た道の逆方向に歩いていった。それも外に出る道ではない、路地裏のほうに。騒がしい大通りとは違って、このあたりは人気もなく、静かである。ここで人が死んでいても、しばらく気付かれまいであろう。「……そろそろ、出て来てもいいですよ」

「まさか、気付かれていたとはな」

トルネコの言葉に、路地裏に隠れていた、先程の客が前に出て来る。

「こちらでも聞きたい事があるんです……何故、私がこの腕輪を持っていると知っているのですか？」

この客は、自分が黄金の腕輪を持っている事を知っている――。トルネコは確信していた。

「お前の袋の中から、俺の探している力とよく似た気配を感じた。それが理由だ。しかし、その考えに行き着いたのはどうしてなんだ？ 商人としての観察眼か？」

「まずは、あなたの気配ですね。隠してはいますが、あなたから漂う気配は明らかに普通の人間のものではない」

武器を扱う商人は死の商人とも呼ばれる。そのような立場なら、物騒な人間とも取引の機会もあるだろう。それに殺気をだだ漏れにしているモンスター相手にも何度も渡り合っている。そういった部分が敏感でなければ、この業界に身を置き続ける事など不可能に近い。

「二つ目があなたの理由。私が聞いた時にあなたは答えるのに一瞬ですが窮した。そして出て来たのが妹へのプレゼント……。女性に渡すものならば、普通は指輪ですよ」

これは単純に女性が喜びそうな物に対する考え。余程の成金趣味でもなければ腕にはめて自己主張をする腕輪より、指輪をプレゼントしようと考えてだろう。もっと言えば指輪よりもネックレスのほうが、身内にプレゼントする貴金属なら自然だ。

「そして最後に、わざわざ私の所に来た事です。旅の商人、しかも武器を表に出している人に対して、装飾品を売っているかどうか確認するのは不自然ですよ」

「成る程、私の行動は何一つ理に叶っていない、ということか」

「それで……どうするつもりですか？」

「決まっている。運がなかったと思って諦めるのだな」

男は懷からナイフを取り出し構える。普通に買えるなら普通に買うつもりだったのだろうが、買えないならば奪う、という事だろう。「そこまでして欲しい理由……やはり進化の秘法絡みですか」

トルネコは背負っていたそろばんを構える。商人にとって強い味方となる武器、正義のそろばんである。

「ほう、進化の秘法の事を知っているのか。ならば殺すのに躊躇する必要はなさそうだな」

男がトルネコに飛び掛かったその時だった。

「待ちな、この町で殺しはご法度だよ」
「っ!？」

突然現れた三人目の声に、勢いよく飛び掛かろうとした男の動きが思わず止まる。こんな路地裏に入って来るのはどんな人間かと振り返ると、頭に鉢巻きを巻いた少女ではないか。

「ふん、誰かと思えば色気の無い女か。死にたくなければここから去るのだな」

「この町であたしを知らないって——よそ者だね。残念だけど、あたしの目の前で人は殺させない」

「ちっ、素直に去っていればいいものを。待っている、こいつを殺した後、すぐに貴様を殺してやる」

埒があかないと言わんばかりに男は再びトルネコに飛び掛かった。それが間違いであると気付く事もないまま。

「破ッ!」

少女の口から気合が走った。

——たったそれだけで、男の態勢が崩れ、気すらも失って、地べたに這いつくばってしまった。

「ふう……その人、大丈夫?」

「えっ……ああ、大丈夫です。ありがとうございます」

トルネコは自分がこの少女に助けられたと気付くのにたいした時間ばかりなかった。これぐらいなら自分でも倒せただろうが助けられた事には変わりはない。素直に礼を言う。

「たまにおかしな奴も居るからね、この町には……所であんたも見ない顔だね」

「はは……私は旅の商人です。偶然ここに寄って商売をしたんですが、売れませんで。店を畳んだ所です」

「旅の商人か——ちょうどいいかも。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「助けていただいた訳ですから、私の知る事ならなんでも。近くの酒場にでも入りますか」

トルネコと少女は近くの酒場に入り、腰を落ち着け、互いに名を告げる。

「私はトルネコといいます……さて、何についてご所望ですか？」

「あたしは火乃香。よろしく。知りたい事は、黄金の腕輪ってものの話を何処かで聞いたことない？」

火乃香の口から出た言葉に、トルネコは思わず啞然となった。

「それは……知っていますが、どのような理由でお探しに？」

しかし、先程の男ほどの怪しさも感じられないため、取り敢えず探りを入れる。

「理由は……依頼かな。あまり深くは話せない。守秘義務があるから。少なくとも悪用しようとかではない……と思う」

頭から信用できる話ではない。しかし嘘だと断定する材料もない。

（——少し危険ですが）

トルネコは袋の中から、黄金の腕輪を取り出した。

火乃香はその腕輪を見た瞬間、思わず立ち上がってしまった。

（なんだこれ……腕輪に、気が流れてる）

それも暗く澱んだ気。瘴気と言い換えてもいいかもしれない。

「……この腕輪にまつわる話をご存知ですか？」

「えっ……もしかして、進化の話？」

「知っているのですか。結論から言えば、この腕輪は偽物です」

「偽物？これで!？」

普通の人は気付かないが、そういったものに敏感な火乃香はこの腕輪が怪しさを内包している事がわかる。それも、これだけでもかなり危険なレベルだという事も。

「私はこの腕輪を使って作られた生物を見ました。正直言って、まだ信じられません。奴を倒すことができたのを」

体を切り落としてもさらに強靱となって再生する。腹から出るはずのない顔が生える。そしてその精神は人間にたいしての憎しみのみ。

「私は悪用されないために、倒した時に私が責任を持って管理すると仲間に誓ったのです」

「憎しみしかない獣……か」

（あたしがいままで出会ったのは皆何かを抱えていたけど……そんなものは何も無い、破壊する事だけを考える魔物に――）

「そんなわけですから、偽物といえども渡すわけには参りません」

「うん、ありかさえ判っていれば依頼の条件はオッケーだから。それに悪い事に使われないなら、いいさ」

火乃香はトルネコに礼を言う。この後、火乃香はラヴオスについても聞いたが、トルネコはそれについて情報を持っていなかったの
で割愛させていただく。

トルネコは火乃香と若干談笑した後、馬車に戻って来ていた。

「よかった。血はほとんど落ちたみたいですね」

輝夜が念入りに洗った甲斐もあり、服に染み付いた血は目立たない程に落ちていた。これならば今度からは町に普通に入れそうである。

「タイミングがいいわね、ちょうど乾いたところだったのよ。で、どうだった？」

「いや、やはりダメでしたよ。わざわざ剣や槍を使おうとする人は、

この町にはいないようです」

「そっか。明日はどうするの？」

「食料や飲み水を買って込んで、もう次の町に行ったほうがいいでしょうね」

あの様子では、何日粘ってもいい成果は上げられないだろう。

「仕方ないわね。手伝いは次の機会か」

輝夜は残念そうに呟いた。

「さて……今日も遅くなりましたし、食事にしますか」

「さんせーい」

トルネコは基本的に宿には泊まらない。野宿の道具を買っておけば宿代も浮くし、食費も浮かせられるからだ。

「そうと決まればさっさと準備しましょう」

夜はこうして更けていった。

——憎い。人間が憎い。全てを根絶やしにする。

魔族の王デスピサロはロザリーを人間に殺されてから、それだけを考え生き、秘法を自らで試し、異形の魔物となった。

しかしそれは天空の神が放った勇者達により、未然に食い止められた。彼は腕輪も失い、そのまま朽ち果てる——はずであった。

しかし彼の憎しみは、その運命さえも捩曲げようとしている。

あらゆる時代、あらゆる世界で争いの火種となる感情、そしてその力を増幅させるモノ。

オディオは新世界で、新たな宿主を見つけてしまったのだ。

「失敗したじゃと……?」

「申し訳ありません、女王様。次は必ず――」

「ふん、もうよい。貴様に託した妾が馬鹿であったわ」

妙齢の女王が吐き捨てる。女王が話しているのは、トルネコから腕輪を強奪しようとした男だった。

「お待ちください、女王……ぐわあああ!」

女王に近付こうとした男に、爆発が直撃し、吹っ飛ぶ。壁まで吹き飛ばされた男はそのまま、ピクリとも動かなくなった。

「ふん……貴様が探している間に、黄金の腕輪は既に見つかったのじゃ。のう、エビルプリストよ」

「それも、完全なものがな」

女王に言われ姿を表したのは、一見すると人間の神官。しかしその正体は、ピサロの部下であったエビルプリストだった。

「進化の秘法は完成し、既に私にその力を施した。だから、これはもう用済みだ。くれてやる」

「ふふ……これでさらにラヴォス様の力は完全になる……この力で世界の全てをラヴォス様のものにするのじゃ!」

狂気の笑みを浮かべた古代の魔法王国の女王――ジールは、進化の秘法をラヴォスに施そうとしていた。

最悪のシナリオが、知らぬ所でゆっくりと、だが着々と進んでいた。

進化と言う名の魔物（後書き）

ラヴオス クロノトリガー

進化の秘法 ドラゴンクエスト

オディオ ライブアライブ

神々の邂逅（前書き）

今回輝夜とトルネコはいません

神々の邂逅

かつて、親友と愛した人に裏切られた勇者がいた。彼は真実を知った後に人の愚かさに気付き、深く人を憎んだ。その憎しみは彼を黒く歪ませ、一つの国を滅亡させる。

そしてその力はさらに高まる。空間を歪ませ、違う時の勇者を呼び寄せ、人の愚かさを説き、滅ぼそうと企んだ。――人に、打ち碎かれる事となったが。

そして彼は死の間際、人の温かみに触れ、消えた。世界は魔王から解放されたのだ。

――しかし、彼に休みの時が訪れる事はなかった。まずは、何も感じないはずの自分が、自分を認識しているという矛盾から始まる。そして次は、無くなったはずの手足が動く。そして――これまた消えたはずの瞳が――開く。

「どういう……事だ……？」

音を発するはずがないのに、喋ることができた。自分に何が起きたかもわからずに、ただ呆然としていると。

「気がついたか」

彼の目の前に、美しい女性が一人現れた。不思議なもので、ここには自分とその女性しかいないように感じられる。

「私はお前の強烈な思念に呼ばれた」

その女性はかつての世界では死神とも呼ばれた、勇猛な者の死後に現れる戦の神。

「問おう。お前の名はなんと言う」

「私は――オルステッドだ。人間に倒され、消滅したと思っていた」勇者のまま魔王となった者、オルステッド。異国の地ルクレチアにおいて、謀略、勘違い、そして自分の意志の末に……ルクレチアを滅ぼした男。

「オルステッドか。私はお前の強烈な悲しみと後悔の念に引かれて

来た」

「悲しみと……後悔だと？」

「そうだ。死の間際——アキラと言ったか。その者の言葉を聞いて、自らの過ちを少なからず悟ったように私には感じられた」

異なる時空の憎しみの象徴と同化しながらも、最終的には負けてしまった後に浴びせられた、超能力を持つ少年アキラの言葉。それにより既に憎しみだけで生きていたオルステッドに、人間らしい感情が戻っていたのだ。

「私は、お前に二つの道を示すことができる。一つは、何もかも忘れ死後の世界に行くこと」

「……もう一つは？」

「私とともに行くことだ。その場合、私がいいと言わない限り、心の休まる日は来ないだろう」

戦乙女としての指名は、勇者の魂を選定し、神界の戦力とすること。その場合でも不死身になる事はなく、魂が滅せられれば本当の死を迎える事になる。

戦力になったもの達はエインフェリアと呼ばれ、神々の闘争や不死者達との戦い、その他雑用に至るまで——様々な用途に使われる。「この世界は様々な混沌が混じりあっている。不死者の鼓動も、くらべものにならない程増えた」

だが、既にオルステッドの心は決まっていた。

「ウラヌスが許してくれるとは思わないが……償いをするのもいいだろう」

「……確かに聞き届けた。私は戦乙女レナス。歓迎、するわ」

ロキとの戦いを経て、創造神への変貌を遂げたレナスは、昔の彼女ならば滅多に見せることのなかった笑顔を浮かべ、オルステッドを迎え入れた。

はじめりは、神界に封印したはずの聖剣グラン・センチュリオが再びこの地表に降臨したことからだった。

復讐の道具として、戦場の負の念を吸収してきた血塗られた魔剣。王女はその剣を封印し——代わりに、聖なる杖を天使から授かった。しかし、この剣は戻って来た。いくつもの災いを連れて。

そして彼女は再び剣を握る。災いから自分を、そして愛する民を護るために。それが王女、ユグドラの選んだ道だった。

長き戦争が終わり、王国は徐々に復興してきていた。ユグドラが武力ではなく、話し合いをもって平和の道を歩みつつある時、彼女の側近にして騎士団長でもあるデュランが、血相を変えユグドラの元に駆けてきた。その様子に、ユグドラにも緊張が走る。

「申し上げます！北部の森林に、正体不明の怪物が多数出現！王都に向かい行進を続けております！」

「なんですって！？今王都に入られたら、大変なことになってしまわ……すぐに、騎士団を出動させて！」

「了解！すぐに出勤させます！」

デュランは命令を受け転進。騎士団の指揮に向かう。ユグドラ自身も合戦の準備のため自室へ駆ける。

「怪物と言うからには、おとぎ話の中で出て来るような凶暴なモノでしょう——もし、力の無い民が遭遇してしまえば」

ユグドラの脳裏に、屍の山が浮かぶ。その映像を振り払うように頭を振り、あらためて自室へ。

息を切らせながら自室の扉を開けたとき、彼女をさらなる異変が襲った。

「な、なんで……」

彼女に恐慌が襲う。当然だろう。別れをつげたはずのモノが、床に突き刺さっていたのだから。

それは、彼女のかつての決意を無下にするものであり、宿命とも言えるものだった。

「グラン・センチュリオ……」

ふらふらと近づき、柄を握った瞬間。

「――あうっ!？」

ユグドラを猛烈な悪寒が襲った。それは今まで扱っていた時には感じなかった、負の感情。今になってそれを感じたのは、ユグドラが聖なる杖に慣れ、浄化されていたからという理由ではない。純粹に、剣に宿る負の力が何倍にもなっていただけのこと。

「こんな……比べものにならない……。王国や帝国の感情を吸った時でも、こんな力は無かったのに」

事態を把握しきっていないユグドラに、さらなる異変が襲う。

世界全体が、大きく揺れているような、かつ落ちているような感覚に包まれたのである。ユグドラは身動きひとつ取れず、柄を掴んで踏ん張る事しか出来なかった。

「はぁ、はぁ」

そして、揺れが完全におさまった頃、ユグドラは今度こそ悶絶する事になる。

「あああああ!？」

びくびく、とユグドラの身体が痙攣する。今までも計り知れない力があつたのに、それを遥かに凌駕した力が、剣に宿るのを感じたのだ。

ユグドラの知る所では無いが、今の揺れは世界の融合現象によるものである。聖剣の力の増幅はその予兆だったのだ。今この剣には、あらゆる戦場の力が宿っている事になる。

「はっ……はっ……ん」

その力にも慣れ、落ち着くとユグドラは剣を床から抜き、天にかげる。その彼女の瞳は、少し濁っているように見えた。

そして彼女は、悪魔のような考えを浮かべる。

(この力なら……簡単に民を護ることができるかもしれない)

茨の道であることはわかっていた。だが、彼女の一面である、絶
対的な力による統治を望む心が、それを黒く蝕んだ。

（相手は怪物……気にする必要なんて、ない）

でも、怪物以外が立ち塞がったら？

（敵の事なんて、気にする必要はない）

禁断の思考が、彼女を黒く染めあげた。

「あれから、この世界を見回ってみました——幻想郷のかけらさ
え、見つからないとは」

道端の石に座る女性が一人ごちる。背中には黒々しい翼が左右に
一枚ずつ。数日にわたり飛び続け、疲れているようだ。

彼女は、幻想郷において妖怪の山で暮らしていた妖怪のうちの
一人、射命丸文。天狗として千年以上を生きている。

「それほどまでにここが広いということなのか……それとも、幻想
郷はこの世界から弾かれた？」

いつもなら幻想郷に起きる異変を少なからず面白がり、それを記
事になっているが流石に今はそれを楽しんでいられる余裕は無い。

「いっそ、ここで暮らす決心をするべきか……」

まだ飛べる程疲れは癒えていないので、地に足を付けて歩く。今
歩いているのは、割と自然も豊かな土地。この光景を見ると、
幻想郷に固執するのはやめて、ここで暮らすのもいいかもしれない
と思えた。

しばらく歩くと、少し先に集落のようなものが見えて来た。集落
のすぐ側には、樹齢が数万はあろうかと思わせる巨大な樹が立っ
ている。

「思えば空から見ると、現地の人と話したことなかったな」
射命丸は集落に立ち寄る事にした。

射命丸が集落に入ってみると、そこには大きな樹の他に、いくつもの小さな木が生えている事に気が付く。その木の回りには、妖精が群れ、とても楽しそうに遊んでいる。

「しかしこの妖精は、幻想郷と違って小さいですね」

懐に入れても困らなそうな程小さい。その光景を納めておきたかったのか、射命丸はカメラで撮影をする。

数枚撮った後満足したのか、カメラを懐にしまう。そしてそのまま集落の奥へ。

「……あら？」

しばらく進むと、射命丸に気が付くものが居た。緑色の頭髪で、素朴な服で身を包んでいる。ゆっくりとした足取りで射命丸に近づく。

「外からいらっしゃったんですか？」 「はい、ちょっと旅をしていて、休む場所を探していたんです」

「そうですか……私の家でよければ、お貸しできますよ」

彼女は笑みを浮かべ、射命丸に告げた。これは渡りに船と、射命丸は申し出に乗っかる事にする。

「それでは村をご案内しますね」

「そこまでしていただけるとは……助かります」

好意を受け取り、案内をしてもらう射命丸。クリスタルが採れるという洞窟やウンディーネの泉など、幻想郷とはまた違う自然の美しさに、少しずつ魅せられていく。

案内が、集落の広場に差し掛かったとき、緑髪の彼女に後ろから声がかけられた。

「フィアちゃん、何してるの？」

緑髪の女性――フィアは、後ろを振り返る。フィアに声をかけたのは、黄色い髪をした、これまた女性。フィアと比べて、見た目が幼く見える。

「ルウリ……今、この人に村を案内してるのよ」

「ふーん、外から来たの？ えーと……」

「……射命丸文です。」

「えーっと……文ちゃんでもいい？」

「いいですよ、言われ慣れてますから」

「ごめんなさい、射命丸さん」

「いえいえ、これぐらいはお安い御用です」

「それで文ちゃん、外から来たの？」

「はい、歩いていたら、大きな樹が見えたので……それに知られてここまで」

射命丸は、頭上天高く育った樹を見上げた。

「この世界樹は、エレンディアの象徴であり、誇りなんです」

「これだけの樹なら、誇ってもいいでしょうね」

しばしの時間、全員で樹を見上げる。

（これだけの年月、ここにいたんだ——何かが宿っていても、不思議じゃないですね）

これより樹齡が短いであろう西行妖でさえあの力だ。この樹には、もっと凄まじい力が込められているのだろう、と射命丸は考えた。

「フィアちゃん、そろそろ暗くなってきたよ」 沈黙を破ったのは

ルウリだった。言われた通り、当たりは次第に暗くなってきていた。

「そうみたいね……射命丸さん」

「わかってます。あまり遅くまで外で連れ回すのも迷惑ですから」

「文ちゃん、家に泊まるの？」

「そうさせていただくつもりです」

三人は談笑しながら、フィアとルウリの住む家へ向かう。

（しばらくはここを拠点にするのも、いいかもしれませんね）

幻想郷が全てを受け入れるのならば、その住人もそれをよしとしなければ。 エレンディアに、さわやかな風が一迅、ふいた。

天にも届く塔の先には、神の住む天空の城がある。おとぎ話と同レベルのものであったが、とある世界に伝説として伝わるものである。

そしてその城を治めるは神竜マスタードラゴン。世界から信仰を集める、聖なる主神である。

この城も融合の例外ではなく、混沌に巻き込まれた結果、ある程度の者なら直接来る事も出来るようになっていく。今この城で、人知れず神々の話し合いが開かれる事になっていた。

天空の城の城主であるマスタードラゴンを中心に、コンタクトの取れた者達で行われる事になっている。秩序の神であるコスモス、太陽神エロール、創造神レナス。いずれも高い位を持つものである。そしてあと二柱、参加する事になっていた。それはつい最近、この城に建物ごと移動するという荒業をやった者達である。

「ここに来てからと言うものの、何もすることがありません」

天空の城のすぐ横にある神社で、緑髪の巫女は一人ごちた。彼女は東風谷早苗。彼女自身は人間だが、神の力を借りて奇跡を起こす現人神である。

「退治する妖怪もない、信仰を広めようとしても、竜の神の信仰で何の意味もありません」

毎日常に神社の中の掃き掃除をすると、後は全て暇な時間になってしまう。外でも歩いてみようか、と思っても雲に建物が乗ってるのでその上しか歩けない。それに、雲の上を歩くのは落ちそうで怖い。

ならば飛び回ってみようかと思っても、地理を知らないで迷子になるかもしれない。八方塞がりという奴だった。仕方がないので

畳の上でゴロゴロする始末。

いつもなら一緒にいる神がいるのでもう少し退屈せずにすむのだが、今はマスタードラゴンに呼ばれていた。

「……神奈子様と諏訪子様は、今どんな話をしているんでしょうか」寝転がりながらそんな事を考えていたら……ついには、まだ朝だというのに睡眠に入ってしまう早苗であった。

「全員、揃ったようだな」

竜の神、マスタードラゴンが口を開く。ここはマスタードラゴンが座する玉座の間。彼が呼んだ神は、既に全てが集まっていた。

「細かい事はいい。我々をここに呼んだ理由はなんだ？」

レナスが議論を急かす。彼女自身、自分で動く事が性に合っているようなので、このような席は慣れぬのかもしれない。

次に口を開いたのはコスモスであった。

「呼ばれた理由はわかっています……この世界に満ちる、混沌についてでしょう？」

「そうだ。異なる世界が融合する——起こった原因は後回しにして、結論から言おう——死者が、甦っていると」 エインフェリアも傍目から見れば生き返っているように見えるが、この場合はそんなレベルではなく、確かに死んだものが肉体つきで甦っている、ということだ。

「私の方にもデスから連絡がありました。人間だけではなく、サルーインやシェラハ等、滅された神も例外ではないようです」

次に口を開いたのは太陽神エロール。下の世界にいる時のように吟遊詩人の姿をしている。彼から放たれた言葉は、衝撃的なものであった。

かつて世界を危機に陥れた邪神サルーインと、その姉シェラハが現世に甦ったというのである。

「実は私も、完全なる死を迎えたものの一人です。かつて私と、混

沌の神であるカオスは闘争の末、ともに滅びました。……しかし、今私が生きているという事は、カオスも同じように甦っているでしょう」

そして秩序の神コスモスが口を開く。彼女は特定の世界から戦士達を招き、代理で戦わせていた。聞こえは悪いが、神々の闘争では普通のことである。

最終的に神々は滅び、闘争は終わったのだが、今また生き返っているのはいったいどういう事なのだろう。

皆の言葉を聞き、レナスが口を開く。

「冥界や天界、そして現世……それらは普通、交わる事のないよう、明確に区切られている。それを越える事が出来るのは、力のある者や役割を与えられた者だけ」

それは当然の理である。五体満足で健康そのもの人が、死の世界を歩いているのは確実におかしいし、死んだ人が自由に現世へ来る事が出来るのも、死という概念そのものを壊している。魂だけならまだしも、肉体つきなら尚更だ。

「しかし今は融合現象によって世界が不安定になっている。こうしている今も、世界が吸収されていると考えていいだろう。結果、世界を区切る線は不安定になり、生死の概念が曖昧になっている」

「……つまり、あれだね。どうにかして世界を不安定にしている原因を突き止めるしか無い、と」

レナスの言葉に挟んで来たのは、天空の城に守矢神社を転移させてきた張本人である八坂神奈子。隣には洩矢諏訪子もいる。

「そういう事になるな。とはいえ、それが一番難しい事は目に見えている」

現状、その手掛かりは皆無である。比較的自由に動けるレナスでさえ、何も掴めていないのだ。

「時間をかける程世界は広がる。手数は多いほうがいいだろうな？」
マスタードラゴンが意味深に言った。

「……皆の力を借りる、という事だね」

かつて世界が崩壊の危機を迎えた時、それを救ったのは彼ら神ではなかった。

そう、地を這って生きている人間である。

「私たち神は信仰の力を得る事はできるけど、生まれもった力を超えた事はできない。化け物を倒すのはいつだって人間だ、って言うしね」

「真相にたどり着いた時、闇の眷属が邪魔をしないと限らない。戦力は整えておくべきか」

「私も、かつての英雄達に掛け合ってみます」

今まさに、戦いの火ぶたがきって落とされたのだ。これは、世界の平和の為の戦いである。

聖劍

「いらっしゃいませー！」

少女の声が町に響いた。活発さを感じさせる声で、実際に聞いたものは好感が持てるだろう。

トルネコと輝夜はエンポリウムを出発した後、一週間ほどかけて次の町へ到着していた。それほど栄えているわけでもないこの町は、名をウエンデル。町の北にはこの町の賢者が住む大聖堂があるという。

この町に着いた二人がまずした事は、この町の下見と、商いである。この町にも武器屋があるようだが鉄製のもので、高級品や純粋に良い武器は出回っていない。最高の環境とも言えた。

露天商をしていてなにか言われても金を握らせればまあ、問題ないだろうとトルネコは判断し、今まさに商いが始まったところである。

「張り切ってますね、輝夜さん」

「当たり前よ、手伝いとして同行してるのに、全然役割を果たせてなかったんだから」

輝夜が幻想郷にいた頃は、その身分や素姓の関係上たまに外に出ても人が付き、人がいない時は決闘ぐらいであった。元々彼女は活発な人なのである。

「綺麗な嬢ちゃんだねえ」

町行く中年の女性も、その容姿と元気な様子に好感を隠し切れないううだ。輝夜も笑顔で会釈をする。

これで客寄せの効果は最大限に発揮された。後は買ってもらうだけ。近付いてきてからは、トルネコの仕事だ。

「この剣には破邪の護りがかけられていて――」

集まり始めた客にセールスを始める。トルネコの取り扱う武器は剣や槍、はては石まで、多種多様かつ、自身の目利きで仕入れたも

のである。品もよくトルネコの話術も巧みとあれば売れぬ理由はない。

中に持ち込んだ品物は飛ぶように売れていき、残り数点を残すのみとなった時、腰に剣を下げた赤い髪の男が近付いてきた。

「性が出ますね」

「おかげさまで、飛ぶように売れています。しかし――」

トルネコは腰に下げられた剣を見て言った。

「お客様の持っているような業物は、流石に取り扱っていませんよ」
男は、腰の剣に触れ答える。

「見ただけで、この剣を業物だ？」

「はい。大層な業物はいくつか見えています……その剣が放つ輝きはそれと同等です。よろしければ私に見せていただけませんか？」

トルネコの問いに、男は剣を渡すことで答える。

トルネコは剣を鞘から抜き、じっくりと眺め、感嘆する。

「これは……」

トルネコが刃に軽く指を押し付けると、紙を切るようにトルネコの肌が斬れ、血が滲む。

「切れ味もさることながら、この剣には、なにか不思議な力を感じますね。何か、暖かみと言うか……」

トルネコは鞘に剣をおさめ、男に返す。「今まで様々な武器を見てきましたが、それに匹敵するのは天空の剣やロトの剣程しかありませんね……何か銘はあるんですか？」

トルネコが男に尋ねると、少し考えた後に答えた。

「これは聖剣エクスカリバー。ジェマの選ばれた騎士にのみ与えられる剣」

「エクスカリバー……ですか。それを見られただけでも、この町に來た甲斐がありました」

「じゃあ……僕はこれで」

男は露店から離れていった。

「トルネコさん、嬉しそうね」

輝夜が茶化す。事実、嬉しいのだろう。

「はは、年甲斐もなく興奮してしまいました」

だからこそ、武器屋トルネコである。その後少し残った剣も問題なく掃け、わずか数時間で完売となった。

「お疲れ様でした、輝夜さん」

「トルネコの口が上手いから、あまり疲れなかったわよ」

「いえいえ、始めてで数時間立ちっぱなしでは疲れるのが当たり前です。時間も早いですが、どこかの酒場にでも入りますか？」

「酒！？行く！」

輝夜——というか幻想郷の住人は酒に目が無い。何かあれば宴会をする始末で、果ては常に酒を呑んでるような飲んだくれもいる。

「早く行きましょう！」

「急がなくても酒は逃げませんよ……」

町を下見したので、酒場があることはわかっている。数時間前に覗いた時には客がもう入っていたので、開店はしているのだろう。二人は酒場へ入っていった。

「お！さっきの嬢ちゃんじゃないか」

酒場のおかみは、先程輝夜と会った中年の女性だった。

「おかみさん、お酒頂戴！」

「あいよ、ちょっと待ってな、今とっておきを出してやるからさ」
おかみは酒が貯蔵されていると思われる奥に入っていた。それを確かめると、輝夜は近くの席に座る。「嬢ちゃん、中にいたが、声がここまで聞こえてきたぜ」

「どうだ、俺達と一緒に飲まねえか？」

酒場の中のちょっと出来上がった客たちの申し出を受け入れ、そのまま即席で宴会のようになってしまう。

「輝夜さん、うわばみだったんですね」

トルネコも酒を飲まない方ではないが、輝夜はそれに数倍早いペ

ースで飲んでいく。相当出来上がってもきているようだ。二人同時に潰れるという問題があるため、トルネコは少し自重する事にした。

「もう飲めない」

宴会も終わり、夜がふけていく頃、輝夜は潰れ、トルネコに背負われていた。

「これは、ベッドに寝かしたほうがいいかもしれませんね……」

それに、今から寝る準備をする手間もある。今日はこの町の宿屋に泊まる事にしようと、トルネコは宿屋の扉を開いた。

「……ん？こんな夜遅くに客かい」

「すみません、空き部屋はありますか？」

トルネコが聞くと、店主は宿帳をめくって確認を始める。当たり前の事だが空き部屋がなければ TENT をはらなければならない。わざわざ宿屋に来たのだから、それは避けたかった。

「ふーむ、一つしかないがいいかい？」

「はい、それで大丈夫です」

「はいよ、じゃあ名前書いてね」

どうやら杞憂であったようだ。トルネコは宿帳に二人分の名前を書き、鍵を受け取ると輝夜を寝かす為部屋に向かった。

「これでよし、と」

輝夜をベッドに寝かせると、トルネコは踵を返し、店主のところまで歩いていく。

「すみません、いいですか」

「ん、なんだね」

「馬車があるんですが、前まで持ってきていいですかね？」

トルネコが聞くと、店主があからさまに嫌そうな表情をする。こ

のままでは町の外に放置する事にも成り兼ねない。

「何とかお願いしますよ」

トルネコはテーブルの上に、これみよがしに金貨を十枚ほど積んだ。

店主はそれを見た途端につこり微笑んで

「ご自由に、お客様」

と、言ったのだった。

「あー、頭痛いわ」

「薬飲みますか？」

「あー、もらっとく」

瞬く間に朝になると、輝夜が案の定二日酔いを引き起こしていた。髪もくしゃくしゃのまま、寝ぼけ眼で薬を飲む。

「私は支度をしますから、輝夜さんはしばらく休んでいて下さい」

トルネコは、消耗した食料などを買い込む為に宿屋を出た。

昨日知り合いになった人達に挨拶をしながら買物をしていると、酒場のおかみさんが話しかけてきた。

「やあ、もうここを出るのかい？」

トルネコは出るつもりだ、と答えるとおかみさんは残念そうに言った。

「そうかい、もうちょっと居て貰いたかったんだけどねー」

と、一瞬口ごもる。どうやら、何かを思い出しているようだ。

「そうだ！つい最近、ここに来た旅人に話を聞いたんだけどね」

おかみさんが言う事には、ほんの数日前にここに立ち寄った旅人が、ここに入る前に不気味な城を見たという。この町は世界と融合してからかなり経っているのだが、町の人間達はその城についてまったく心当たりがなかったそうだ。

「それでさ、うちの人が辺りを見回ったんだけど、そんな城なんてどこにもなかったんだよ」

その旅人が嘘を付いている可能性もあるが、わざわざそんな事を言う必要も無い。単なる噂レベルの話だったのだが、つい最近外に薬草を取りに行った町人も、その城を見たというのである。

「わざわざそんな下らない嘘を擁護するような真似はしないだろうし、もしかしたら本当に何かあるのかも」

「ほう……気に止めておきます」

「ごめんね、こんなくだらない事で呼び止めちゃって」それからもう少し談笑した後、おかみさんと別れ、再び買い込みを開始するトルネコだった。

「次にこの町に来る時もぜひ家の宿屋でお願いします！」

馬の手入れを終え、店主のにやけ顔を見送り二人は町を出る。次に向かう町は決めていないが、地図を見ながら適当に決めることだろう。

「うー、まだ頭がガンガンする……」

流石に薬を飲んだだけで二日酔いは治らず、頭痛に悩まされる輝夜。今回の件は彼女の自業自得だから仕方ないが。

「しばらくはゆっくり走らせますよ」

馬上のトルネコが輝夜に告げる。元々急ぎの旅ではないので、今日一日はゆったりと進む事にしたようだ。

「ありがと……あくやっぱり痛い」

輝夜はごろんと寝転がり、外をぼんやりと眺める。この馬車は馬が走る逆側にも入口が付いている。その入口は常に開かれているので、輝夜は後側を見ている事になるわけだ。

「――あれ？霧？」

輝夜が後を眺めていると、白い霧が空気中に散っている事に気が付いた。

「トルネコ？霧が出てるけど大丈夫なの？」

霧は視界を奪う。その調子で馬を走らせていては、きわめて危険である。

輝夜の問いに、トルネコは怪訝に答えた。

「霧ですか？ 私には霧なんて見えませんが」

トルネコの言った通りで、トルネコの進行方向には霧はかかっていない。それどころか霧らしきものも、トルネコは見えていなかった。

——まっすぐ進んで来たというのに。

「……なんかおかしいわ。トルネコ、馬を止めて」

「何をそんなに気にしてるのかわかりませんが、とりあえずわかりました」

トルネコは輝夜の言った通りに馬を止める。そして輝夜は後を見ろ、とトルネコに告げる。トルネコは前の入口を開けて後を覗く。

「何ですか？ まさか盗賊でも——」

トルネコの目に、先程は見当たらなかった霧がはっきりと映る。

「私が言ったこと、わかった？」

「状況がよく飲み込めませんが、何かよくない事が起こっているようですね」

「ちょっと様子見てくるわ。トルネコは前を見てて」

「……気を付けてくださいよ」

輝夜は馬車から降り、霧に向かって歩いていく。その途中回りの様子をうかがうが、霧が出ているのは後側のみ。いよいよもって異常な状況といえるだろう。

輝夜が霧の近くまで歩いていき、様子見で手を掲げてみると

「くっ!？」

輝夜の手に、微量の電気が走る。どうやら帯電しているようだ。

しかも人が思わず飛びのくぐらいの。馬にここを走らせるのは不可能と考えられた。

ただそうすると、何故ここに入ってこれたのかわからない。馬もトルネコにも反応は一切なかった。これではまるで、通り過ぎた直後に霧が出来たようではないか。

「……進め、ってことなんでしょうね」

輝夜は来た道に戻り、トルネコに報告をする。すると、トルネコ

に何か心当たりがあるようだ。

「先程の町で聞いた話ですが、それより前にこんな話を聞きました」

ウエンデルでは不気味な城を見た、という話だけだったが、トルネコはそれより前に、同じように城を見たという話を聞いていた。

しかもその人は実際に城の中に入った事があるという。何でも町と一体となった城だったそうで、人一人見当たらなかったと言う。ここはゴーストタウンか、と家の中に入ると、そこには魔物の闊歩する遺跡のような場所に繋がっていたらしい。

「面白いのが、隣町に向かって直線で進んでいたのに城に着いた、と言う点ですね」

町から隣町に行くのに片道一時間かかり、間に何も建物がない直線があるとする。一時間で着く速度で、邪魔が入らなければ直線を走っているだけで隣町に着くはずだ。

しかし城に入った人の場合はそうではなく、二時間経っても町に着かないどころか、進行上ありえない城を見付けている。

「つまり、城が移動している……って事？」

「そうなるでしょう。それも、この話はここから遠く、少なくとも一月はかかるぐらい離れた場所で聞いた話です」「私たちもそれと同じ状況、って事か」

「このままここでやり過ぎしておきたい所ですが――」

霧に異変が起こっていた。

「こっちに近付いて来てるわね」

霧である以上空气中を移動するのは当然だが、狙い済ましたようにこちらに近付いてきている。ゆっくりとそして確実に。

「すぐに出発しましょう。速度も今のままかわかりませんから」

輝夜は馬車に駆け乗ると入口を閉め切る。

「完全に閉めたわよ！」

「わかりました！少し揺れますが、我慢してください！」

トルネコは鞭を叩き、馬を疾らせた。

(この二人なら……きつと)

何かの意志に、道を誘導されているとも気付かずに。

霧から逃げはじめてから一時間。霧は視界から完全に姿を消していた。

「何とかありましたか……」

トルネコが一息付き、馬を撫でてやる。流石に馬にとっても重労働だ。しばらく無理はさせられないだろう。

「……近付いてもこないみたいね」

輝夜が布をめくり後を見渡しても、霧が近づいてくる様子もない。その代わりに、変わった事があった。

「……寒いわね」

「それはそうでしょう、外に出てみてください」

言われて輝夜が外に出ると、まず感じたのは地を踏む感覚の違和感。見てみると白いものが混じっている。

「……雪？」

「ええ。こっちを見てみて下さい。中々壮観ですよ」

輝夜が振り返ると、そこには雪に包まれた山道が。

「どうやら雪の山に来てしまったようですよ」「走って逃げた先にはこの山か」

山が目の前にあつては馬を走らせることもできない。雪が積もっていれば尚更だ。

「馬車はここに置いて、登ってみるしかないのかしら」

「霧の動きも止まっていますし、辺りを探索してみましようか」

二人は登山を決意した。

襲って来た熊を撃退しつつ登山していると、視界の端に小屋が見えてくる。人がいないか確かめるため、二人が小屋の扉を叩く。

「誰かいませんかー」

声をかけつつノックするも、反応はない。

「開けてみましょうよ」

輝夜が扉に手をかけ、押したり引いたりして扉を開けようと試みるも、どうやら凍り付いているらしく、うんともすんとも言わない。

「こんなじゃ人は住めないわね」

「薪がそのままですから、少し前までは人が住んでいたのかもしれないね」

「うーん……あと少しで頂上みたいだし、もう少し登りましょうか」
頂上に何かあるかもしれないと思った二人はさらに歩を進め、頂上にたどり着く。そこからは、城のようなものとおどろおどろしい山が見えた。

「あの城——話に聞いた奴かしら」

「ここから見てわかるほど荒廃してますね。もう長い間手入れされてないんでしょう、不気味だったと言われるのもわかる気がします」

輝夜が他に何かないかと見回すと、崖のすぐそばにぽつんと墓が立てられていた。普通に考えれば何の変哲もないものだが、何か気になる。

「……血が付いてる？」

輝夜が墓に近付くと、墓に渴ききった血がこびり付いている事に気が付く。それにより何か文字が書かれているようなのだが、まったく読めない。

「血を取るのも無理そうね……あら？」

墓の下に目を落とすと、白い雪の中に銀色に光るものが埋まっている事に気が付く。

「墓荒らしみたいで嫌だけど……」

輝夜が軽く雪をどかしてみると、銀色に光っていたのは刃であった事がわかる。慎重に持ち、雪から掘り出す。

「輝夜さん、何かあったんですか？」

「ええ、剣が埋まってたみたい」

雪に埋まっていたのは剣であった。雪の中、水分に曝されていたのに錆びている場所もない。

「ふむ、これは……昨日のものほどではありませんが、いい剣ですね。この墓はこの剣を使っていた戦士のものかもしれませんが」

「でもなんで墓の下じゃなくて前に埋まってるのかしらね」

「そこまでは……。しかし、この剣を持って行きたい所ですが……まあ、置いていったほうがいいですよね」

トルネコは若干残念そうに、剣を元の場所に戻す。

だが次の瞬間、予想だにしない事態が起こった。

（――待て）

ここには二人以外に誰もいないのに、二人以外の声が響き渡ったのだ。

「何？頭の中に響いて」

（落ち着け――私は、その剣を使った人間だ。ハッシュと言う）

この声の主は自らをハッシュと名乗った。昔この剣を使った者、つまりこの墓の下に埋まっているはずの人間である。

「信じられない話ですが……」

（信じようが信じまいが構わん。今から言う事には何も関係ないかな）

「何か押し付けるつもり？」

（頼めるものが他にいないのだ）

ハッシュは強引に説明を始めた。何でも、この剣をある人物に届けてほしいらしい。

（名はオルステッドという）

「この広大な世界で、人探しですか」

（お前らには力を感じる。旅のついででいいから、探してくれ。私の声が聞こえたのは、他にいなかったのだ）

ハッシュの話では、この墓にたどり着き剣を見つけた人間はいた

らしいが、自分の声を聞き取った人間はいなかったらしい。

「随分虫のいい話ね」

一方的な押し付けのため、当然二人はいい気分がしなかった。しかしハッシュはそれでも懇願し続け、とうとうトルネコが折れた。
(すまない……では頼んだぞ)

言質を取った瞬間、ハッシュの声は瞬く間になくなった。

「トルネコ、良かったの？」

「まあ、見付からなければ剣を手元に置けますからね」

探せと言われたが探さないで剣を取ってしまったでもいいか、とも考えていた。

「むこうから押し付けたんだし、見つからなくても文句はないわよね。……はあ、何だか疲れたわ。結構時間も経ったみたいだし、馬車に戻りましょう」

二人が馬車に戻ると、山を登る前にあった霧は全て晴れていた。ここまで来ると、二人もあの霧が作弄的なものではないかという考えに至った。

しかし、それを言ってももう仕方ない。怒りも浮かばず、そこまでするか若干呆れてしまった。

それから二人は、馬をゆっくり走らせながら山を離れていった。

場所を移し、ウエンデルの大聖堂。赤い髪の男が老齢の男性と会話をしていた。何か焦っている様子だ。

「デューク、それは本当か？」

「はい、昨日の晩、エレナの声が聞こえました。マナの樹が危ない

——と」 赤い髪の男——デューク。彼は、マナの樹が悪に染まらぬよう護る騎士である。エクスカリバーはそれが認められた時に授かった聖剣だ。

「そうか……イルージアがどこにあるのかわかるのか？」

「勿論です——では、行ってきます」

デュークは駆けて行った。

神将器、そして希望へ（前書き）

まーた二人出ねー。すまんこつてす。

神将器、そして希望へ

草原を駆ける一頭の馬がいた。その馬を操るのは女性。長い髪を括り、ポニーテールにしている。見た目から受ける印象は活発そう、といったところか。彼女の名はリンデイス。もっぱらリンと呼ばれる。紆余曲折の末小国をおさめる立場となったが、遊牧民として暮らした過去が忘れられず、サカの草原に帰っていた。

今は一人でこの世界を旅している途中だった。草原から草原を歩き、気ままな旅であった。

サカの噂を聞くまでは。

遊牧民であるリンだが、町や村に寄ることはままある。食料などを草原で直接調達できる場所がない時もあるからだ。

事の起りは町に寄った際の出来事だった。買い物をしている時、町行く人が噂していた「サカの部族が次々と滅ぼされている」という話を聞いたのだ。

リンもこれだけで直行する程愚かではない。その話を受けて町の中で聞き込みをした結果、神将器を奪おうとする他の国家の人が攻めている、という確固たる情報を掴んだ。

神将器とは、かつて竜族との戦争を集結させたという英雄達が用いていた武器である。その武器には特殊な力が込められており、竜だけではなく平時の戦いにおいても絶大な力を発揮するそうだ。

神将器は八神将と呼ばれた英雄が一つずつ持ち、全部で八つ存在している。

まずは『業火の理』フォルブレイズ。理魔法の一種で、大賢者アトスが使用していた。

二つ目が『黙示の闇』アポカリプス。闇魔法の一種で、謎多き者ブラミモンドが使用していた。

三つ目が『烈火の剣』デュランダル。かなりの大剣だが、それを扱った勇者ローランは小柄であったという。

四つ目は『天雷の斧』アルマーズ。この斧を用いた者は戦いの中で死ぬ定めを負うという。事実、この斧の持ち主である狂戦士テュルバンも戦いの中で死んだ。

五つ目が『至高の光』アーリアル。光魔法の一種で、聖女エリミィヌが使用した。彼女は後に信仰の対象として後世に名を残し、八神将の中でもっとも名前を聞く機会の多い人物だ。

六つ目が『氷雪の槍』マルテ。バリガンが用いた槍である。彼の騎士としての教えは後世に伝えられ、騎士を志す者ならば必ず聞くことになる人物だ。

七つ目は『エッケザックス』英雄ハルトムートが用いた槍とも剣ともつかぬような業物である。ハルトムートは竜との戦争を集結させた張本人であり、『究極の剣』封印の剣とともに後世に伝わる。

そして最後が『疾風の弓』ミウルグレだ。神騎兵ハノンが用いた弓である。

それぞれの武器は八神将の出身地に安置されていると言われている。つまりミウルグレは、サカの地に今でも保管されているわけだ。リンも、事実は定かではないがミウルグレがサカに伝わっているという話を聞いた事があった。

神将器は強大な力を持つ。そのため各地で嚴重に保管され、一部の者しか保管場所を知らないという。そしてその者達は何があろうともありかを吐く事はないだろう。

例え、一族が皆殺しになってもだ。

リンはミウルグレの事も心配だったが、何より危惧していたのはサカに残してきた最愛の夫と娘のことであった。

戦いに狩り出される事もあるだろう。もしかしたら、既に死んでいるかも知れない。見たこともない弓の事よりも何よりそれが一番の気掛かりであった。

しかしそれを嘲笑うかのように、進路に数十匹の魔物が現れる。

「こんな時に……！」

リンは馬を操りつつ馬上から弓で魔物達を狙い撃つ。彼女のもつ

とも得意とするのは馬から降り、剣を用いた戦闘なのだが弓も使用する。さらに遊牧民として馬上での戦いも習熟した。

今回はわざわざ馬から降りている時間がない、ということで馬から狙撃し、ある程度減らしたら馬を疾らせ離脱するつもりでいた。

魔物達は弓で狙撃された事に気が付き、いきり立って攻撃を始めた。

魔物達は落ちていた石を一斉に投げ始める。弓で応戦しているとはいえ、魔物は未だ十を越える。

リンは馬を操り、かつ上手く体を捌きつつ弓で狙いを付けるが、避ける事に意識を集中せざるをえないため、定まらない。

馬を降りれば馬が集中攻撃されるだろう。ここは一旦離脱して、回り込んで避けていくのが一番時間がかからないかもしれない。自分から仕掛けた事を多少後悔しながら、リンはその作戦で行く事にした。

まずは魔物達から離れるため、大きく後方に駆ける。そしてある程度横方向に移動してから、一気に駆け抜ける。

「へっ、かかりやがったぜ」

だが、それは罠であった。魔物達の横を通らせる為の、である。

いや――

「魔物が、喋っ……」

魔物という知能を持たない外見自体が、油断の為の罠。

リンの下に、魔法陣が浮かび上がり、爆発した。

「ああっ！」

フレイボム、と呼ばれる道具である。地面に埋め、踏んだものにダメージを与える、いわゆる地雷だ。

そしてリンはそれにまんまと嵌められ、吹っ飛ばされる。直撃ではなかったためリンは軽傷だが、馬は足が焼け、重傷だ。

魔物――いや、この辺りを中心に活動する盗賊達は、魔物に似せて作った着ぐるみを脱ぎ、リンに近付いてくる。

盗賊の内訳は斧を使う戦士が6人、剣士が5人、闇魔道士が一人。そのうち近付いてきたのは闇魔道士以外の11人だった。

「おいおい、こんな簡単に引っ掛かるなんて拍子抜けだぜ」

言い終わると同時に、全員が笑い出した。嫌悪感の残る嫌な笑いである。

(く……見え透いた罠に)

少し考えれば予想はできたことだった。彼女も旅をする以上、盗賊や蛮族に遭遇することも少なくない。そのたびにリンは、昔一緒に旅をした軍師の教えを思い出して策を切り抜けた。

それならば何故、こうも簡単に敵の策に引っ掛かってしまったのか。それはひとえに、焦躁がもたらすものであった。

伴侶と我が子を思うあまり、思考が働かない。それは人として当然だが、そういう時にこそ冷静にいかねばならないのだ。

ともあれ、策を看破する事は出来なかった。馬という移動手段も失ってしまった。だが、リンはまだ生きている。このまま終わらせる気は毛頭なかった。

「……見くびられたものね」

リンが吹っ飛ばされたまま動かなかったからなのか盗賊達はほとんど警戒せずに近付いてきていた。そしてその隙を見逃す程リンは甘くない。

素早く立ち上がり、剣を抜く。数十年前から共に歩んできた名剣、マーニ・カティである

「んな、気絶してたんじゃない」

急に立ち上がったリンに思わず言葉が漏れる盗賊だったが、最後まで言い終わる事はなかった。

その前に、リンが斬ったからだ。太刀筋は迷いなく盗賊の胸を斬り抜き、血が噴き出す。心臓付近を断っており、死は免れないだろう。

老いてなお、剣の腕は衰えるどころか磨かれていた。

派手に噴き上がった血に動揺したのか、盗賊達の動きが一瞬止ま

る。そしてそれは死を意味した。

リンの動きは容赦なく、距離を一瞬で詰めると一人、二人と一撃で屠り、瞬く間に斧の戦士は全滅していた。

「盗賊に遠慮なんてしない」

盗賊に部族を全滅させられた過去から、リンは盗賊の類を激しく憎んでいた。だからこそここまで遠慮がないとも言えるが。

戦士を殺した間に、剣士5人が臨戦態勢を整える。盗賊達も腕が悪いわけではないが、リンと比べるにはあまりにも劣っていた。

それをわかっているのだろう、剣士は5人まとめて襲ってくるつもりのような。それでも、勝利には程遠い。

リンは自分から斬りかかり、数巡の剣劇ののちまず一人を斬り捨てる。そして返す刃で二人。一瞬にして二人を殺され、盗賊に焦りが見えてきた。ここまで来れば、勝利は間違いないだろうと思われた。

だが、リンは一つだけ見落としている事があった。否、無視していたというべきか。盗賊は剣士3人だけではない。闇魔道士も存在していたのだ。

当然の事だが、盗賊とは言え一味は仲間である。だから前衛が前で敵と交戦中魔道士は普通なら巻き添えを恐れて魔法を使わない。使うとしても味方を退かせるだろう。

——その常識的な考え自体が、見落としたのだ。

「——ルナ」

闇魔道士はリンと味方の戦士を狙い、魔法を発動させた。

「なっ……仲間がいるのに……きゃあああっ!!」

『ぐわあああっ!!』

魔法は直撃した。闇魔法は狙いが付けにくい事を代償として、強大な威力を持ち、拠点防御や奇襲の際に真価を発揮する。理魔法や光魔法の方が一般的で使いやすいため、あまり使役する人がいないのが現状だが、その利点を上手く使える人間には重宝するだろう。例えば、足を止めて戦っている敵を味方もろともに撃つだとか。

良心があるなら、普通はやらないが――

「言うのが遅れたな、俺が盗賊団の長だ」

この場の闇魔道士は、血も涙もなかった。

「く……う……」

「ん？まだ息があるのか」

男は倒れているリンの頭を踏み付ける。魔法の直撃で剣士は息の根を止められたが、リンはかろうじて意識を保っていた。保っているだけで、動けないが。

「雇った仲間みんな殺されちゃったからな。仕返しはしてやらねーとなあ？」

下衆た笑いを浮かべる。盗賊が、見た目麗しい女に報復する手段と言えば一つしかなかるう。もはや事に及ぶまでは秒読みと言えた。「やめ……なさい……」

動かぬ体で精一杯抵抗するリンだが、多少うざったいぐらいで抵抗はほとんどできていなかった。

「うるせーな」

だがその僅かな抵抗でさえ盗賊をいらつかせるのに充分だったよう、で、そこそこ力の入った蹴りがリンの脇腹に叩き込まれる。

「くっっ！」

まともに攻撃をくらい、悶絶しておとなしくなってしまった。

「素直にやられてりゃいいんだよ」

盗賊の手が、リンの衣服にかかろうとした時。

突然、馬のいななきが響いた。

「ああん？何だ」

興が削がれた盗賊が辺りを見回すと、馬に乗った一人の男が目に入った。ウェスタンハットにポンチョと、さながら西部劇のような出で立ちである。腰のあたりには、ホルスターに銃も格納されている。

「けっ……見せもんじゃねーんだ。とっとと余所に行きな」

見た目が荒々しい奴から人を助けるといふのは勇気と力が必要だ。

盗賊に襲われているのを係わり合いになりたくないと逃げ出すのも、それはそれで賢明なことである。

だが、この男は賢明ではないようだ。一向にいなくなる気配がない。

「んだ、てめえ……やるってのか？」

業を煮やした盗賊は男に対して威嚇するも、効果が無いようだ。いや、むしろ逆効果か。

「……消えろ」

男は、腰のホルスターから目にも留まらぬ早さで銃を抜き――「がっ！あ！」

引き金をひいて二連射。胸に命中したようだ。

「な、何を……しやが……った」

その言葉を口にしたあと倒れ込み、そのまま動かなくなった。

この盗賊は、剣と魔法で支配される世界の住人だった。すなわち、男の腰の得物の事について詳しく知らなかったのだ。せいぜい変な形の鉄の棒とくらいしか考えていなかった。

ともあれ、リンに訪れようとしていた不幸は、男の手により未然に解決されることとなった。

「……大丈夫か」

男は袋から草を取り出し、リンに食べさせた。なおり草と呼ばれるもので、少しの傷ならたちどころに治す力を持つ。

「あ……う」

それでも、まともに喋るまでに数分かった。そして喋れるようになったリンはすぐに男へ懇願した。

「行ってほしいところがあるの！」

あれから数時間。急いだ甲斐もあってか、リンの夫と娘が住む土地までたどり着く事ができた。

道の途中、リンは男に名前を聞いていた。彼の名前はサンダウン・

キッドと言うらしい。彼はひどく無口で、名前を聞くのさえ時間がかかった。

「サンダウン……ちょっとここで待ってて」

不躰な願いとはわかっていても馬のないリンにとっては死活問題である。せめて自分の問題に巻き込まぬようにと置いていく事にした。

リンの目に入って来たのは、目を覆いたくなる光景であった。

「あ、ああ……」

一面が死の色に包まれていた。住居は焼け焦げ、野ざらしにされたままの大量の死体――。

「そ……んな」

リンは力無くへたりこんでしまった。死後大分経っているのか、死臭が蔓延している。中には焼けた死体もあり、誰の死体なのかも予想ができない。

しかしリンは渾身の力を振り絞って立ち上がる。生存者がいるかもしれないからだ。

光景に目を背けながら歩いていると、真新しい墓が視界に入った。それは、まだこの辺りに墓を作った人間がいるという証明に他ならない。

少し希望を取り戻しながらさらに歩くと一画に、戦いの痕跡がない住居があった。

「……生存者かしら」

リンが一つの住居に近づき、恐る恐る中を覗いてみる。しかし、今は誰もいない。留守にしているのか、それともここだけ運よく難を逃れたのかは解らないが。

「中に入っているわけにもいかないわね」

リンは近くに隠れ、様子を見る事にした。

「八雲紫を探せないか、だと？」

こちらは天空城。八坂神奈子は、マスタードラゴンに頼み事をしていた。それは、幻想郷のスキマ妖怪、八雲紫を探し出す事であった。

世界の驚異を取り除くため、まずは手数を集めようとなった時、神奈子はまず八雲紫を探す事を考えた。紫は境界を操り、遠く離れた場所に移動したりする力を持っている。今回の用途にはぴったりというわけだ。

しかし神奈子には紫が何処にいるか検討がつかなかった。取り敢えず自分で探しつつ、マスタードラゴンにも探させようというわけである。

「利点はわかった。ならば、いい人物がいるぞ」

利点などをかいつまんで話すと、マスタードラゴン是人探しにいい人物を紹介するという。ちょうど、いる場所もわかっているようだ。

「場所は歌と踊りの都モンバーバラ。そこによく当たる占い師ミネアという者がいる。彼女に頼めば、おおよその場所がわかるだろう」
占い師ミネア。かつてデスピサロを打倒した勇者達の一人で、トルネコとももちろん知り合いである。彼女の占いはよく当たると評判だ。

「占いて……あてになるのかい？」

神奈子が訝しがる。占いと言われても、現代のインチキ占いを多く見ているからだ。そんなものに頼るのは憚られる。

しかしマスタードラゴンはまったく意に介していないようだ。

「私が保証しよう。ミネアは魔力を持っている」

「まあ、竜神様が言うなら従うよ」

「そうか……ちょうど私も導かれし者の所在を掴んだところだ。今行くなら送ろう」

「じゃあ、お願いしようか」

少しずつ、事態が動き出していた。

リンが見張りを始めてから数時間、辺りはすっかり夜になっていた。そして今まさにリンの前に人が現れていた。

回りには一見人がいないと言うのに、病的なまでに警戒している姿は、ここで行われた事を如実に表しているようだ。

そしてその姿は、リンが捜し求めていた姿であった。

「ああ……ラス！」

「その声……まさか、リンか！」

それは最愛の夫ラス。サカの傭兵として雇われていた折、その立場を投げうって同胞であるリンの為に尽力した遊牧騎兵である。

「ラス、スーはどうしたの？」

リンは一人娘であるスーについて尋ねるが、ラスの表情は浮かないものであった。

「……戦いの折、はぐれてしまった。シンが付いているから大丈夫だとは思うが……」

「……そう」

リンは目に見えて落ち込んでしまう。ラスが無事だっただけに、娘の安否が知れぬのは不安感を煽る。

その様子を見ながらも、ラスはリンに驚愕の話を持ち掛ける。

「……リン。渡すものがある」

ラスは住居の中から二つ、武器を取り出した。

「……ソール・カティに、弓？」

一つはかつて大賢者アトスより譲り受けた剣、ソール・カティである。世界を越えてやってきた古の火竜の打倒に活躍した。

そしてこの弓は——ここが滅ぼされる一つの原因となったものだ。そう、この弓こそ。

「神将器ミュルグレだ。話せば長くなるが……」

ミュルグレを保管していた場所に、大量の魔物が現れた事。複雑

に張られた封印が破られ、聖域に踏み込まれたこと。命からがら持ち出した人が、この集落にたどり着いたこと。

そして、この集落も魔物たちに滅ぼされたこと。ラスが弓を譲り受け、今まで守り抜いてきたこと。

「魔物たちは神将器を集めているようだ。風の噂で、マルテは既に敵の手に落ちたと聞いている」

「これを私に渡してどうするの？」

「俺には使えなかった。だがリンなら使えるかもしれない」

「……貰っておくわ」

「それでリン、どうするつもりだ？」

「スーを探すつもりよ。まずは同胞を吊ってやらないと……」

「いや、それは俺がやろう」

リンの申し出を断り、ラスが告げる。

「でも、ラス」

二の句をつこうとしたリンを、ラスは抱擁する。

「終わったらすぐ行く。だからリンは先に行ってくれ」

ミルグレを同じ場所に置いておかない、という狙いもあった。

しかし同時に、妻に危険を背負わせるという葛藤もある。リンはそれをわかった上で決心する。

「……わかったわ」

多くは語らない。今はただ、再会を誓う二人であった。

「ここがモンバーバラだ。ここまでの道は覚えたか？」

マスタードラゴンが告げると、神奈子は頷く。

「ならばよい。占ってもらった後戻るときに、ミネアとその姉マーニヤを連れて来てくれ。ではな」

「はいよ、まかしときな」

神奈子は空を飛ぶマスタードラゴンから飛び降りると、モンバーバラから少し離れた山地に降り立ち、歩いて町へ向かう。

「しかし、本当にわかるのかね」

自分で納得したとはいえ、やはり納得がいかない。

思考もまとまらぬまま、神奈子はマスタードラゴンに聞いていた、モンバーバラ中心に建っている劇場に着いた。

夜の闇の中に、照明の光がきらめいて素直に綺麗だと思った。

「入場料は10ゴールドです」

マスタードラゴンに借りた金を払い、劇場の中に入る。折角だから見物でもしようと会場内へ。

神奈子が見たのは、マーニャではない他の踊り子の踊る姿だったが、下着のように肌の隠れる面積の少ない衣装で、扇情的に踊る姿は人気もやむなしか、と思わせる色気であった。ただ客は圧倒的に男が多く、神奈子は非常に浮いた存在だった。

神奈子は会場を出て脇道をそれ、奥の方の様子を伺う。座長らしき男性と、一人の女性が会話しているようだ。

「……？」

神奈子は女性が着ている服にくぎづけになった。頭には青いナースキヤップみたいなものを被り、上の服は左半分が青く、右半分が赤い。対して下の服は左半分は赤く、右半分が青い。凄まじく奇天烈な見た目で、一回見たら忘れ難い。

「って、永遠亭の永琳じゃないか」

天空城に転移してきてから今に至るまで幻想郷の住人に会っていなかったが、まさか違う目的で訪れた町でいきなり当たりを引くとは。

「ともあれこれで、話がしやすくなった」

知り合いがいるなら、わざわざ占い師だけを狙って話を通す必要もなくなる。見た感じでは談笑しているように見えたので、会話もしやすくなるだろう。

神奈子は気安く入っていく事にした。

「ちょっといいかい？」

「誰だ！」

「誰……って、ええ!？」

いきなり現れた神奈子に警戒心をあらわにする座長と、いきなり顔見知りが見れたことに啞然とする永琳。

「あなた、妖怪の山の……八坂神奈子？」

「まさかこんなところで知り合いに会うとは思ってなかったけどね」

「おや……永琳殿の知り合いでしたか」

永琳の様子を見て警戒を解く。どうやらかなり信用されているようだ。

「ああ。占い師ミネアって言うのは何処にいるんだい？ちょっと用があるんだ」

さっさと話を進めてしまおうと、神奈子は本題を切り出す。

「ミネア……ですか。今はちょうど控室にいますよ」

「ああ、わかった。後……その医者、こっちに来な」

場所を聞いた後、神奈子は永琳を連れ端の方へ。

「八雲紫を探す。ご執心の姫様にも、会えるかもしれないよ？」

永琳にひそひそと告げると、明らかに反応した。

「私と一緒に来るなら、その人に一言言っておきな……じゃ」

神奈子は伝えたい事だけ伝え、目的を果たすため控室に向かった。残された永琳は、と言うと。

「……姫様……」

胸にそっと手を当て、目をつぶった。

「占い師のミネアって言うのはいるかい？」

神奈子は突然控室に踏み入るとそう言った。突然のことで、部屋の中の人は呆気にとられているようだ。

「あ、あの……私、ですが」

恐る恐る一人の女性が名乗り出た。劇場に所属しているにしては落ち着いた服装である。

神奈子はそっと近付き、耳元で囁く。

マスタードラゴンが、呼んでいると。

「——えっ!？」

「わかったかい？ちょっと外に出ようか」

驚いているミネアを無理矢理控室の外に出し、まずはマスタードラゴンの招集について話した。

「……マスタードラゴン様が？」

「世界に地獄の帝王以上の危機が迫っている、と言えはわかんと言ったよ」

「あれ以上ですか!？」

ミネアは衝撃を受けたようだ。しかし神奈子はお構いなしに会話を続ける。

「姉共々力を借りたい、って言ってたね。もちろん嫌なら拒否していいとも言っていた。朝まで待つから、姉にも話を通しておいでくれないかね」

「……はい、わかりました」

ミネアは思い詰めたような表情で頷いた。これで、マスタードラゴンに言われた用は済んだわけである。

「ここからは、私の用なだけど——」

そして神奈子は、八雲紫について話しだした。

次の日の朝。神奈子はメンバーバラの宿屋で一夜を過ごしていた。
(——しかし)

神奈子は、昨日の占いの結果について思い出していた。

まず見えたのが、黒よりもさらに黒い、暗黒。そして赤くうごめく球体に、生物が七匹生えたような姿。強大な魔力を持つ、四人の魔族。

話では、その化物と同じ空間でなにかをしているらしく、そこから動けないとの事。そしてそこにたどり着くには、暗黒空間に干渉できる者が必要だということだ。

そしてそこに繋がる場所は一つしかなく、ここから遠い場所のある城のみが唯一そこに繋がる門であること。

（――八雲紫が常に力を使っているとしたら、確実に空間に歪みが出る）

八雲紫探しは、大きく前進した。少なくとも、異空間にいるということと、入るためには鍵が必要、という事がわかっただけで充分だ。おまけに場所のだいたいの見当も付いていると来た。

（空間を歪めるために力を使っているとすれば、そこには紫にとって大事なものがある、と考えるのが妥当か）

紫が大事なもの――すなわち自分の世界、幻想郷。そして今世界は融合し、幻想郷は数ある世界の一部となった。

この事の意味する事を、八坂神奈子はだいたい見当がついていた。「……とすれば、後は探すだけか」

八坂神奈子が宿を出る準備をしていると、扉のノック音が部屋に響いた。

「入っていいよ」

「失礼します」

扉を開き入って来たのは、ミネアともう一人、知らない女性だった。おそらく姉であるマーニヤだろう。

「決心は付いたかい」

「はい……私達は、マスタードラゴン様の招集に従います」

二人はマスタードラゴンの呼びかけに応え、天空城に来るという。「じゃあ、私は町の外で待ってるから仕度をしてきな」

神奈子は解答を聞いた後、宿屋を後にした。

神奈子が町の外に出ると、既に一人立っている者がいた。

「……輝夜姫は後回しだよ？」

待っていた者……八意永琳はそれでも、と頷いた。

「サンダウン、一晩待っていてくれたのね」

リンはサンダウンを待たせていた場所に來ていた。ほんの口約束だったというのに、彼は律儀に待っていたのだ。

腰に二本の剣と、布に包んだミュルグレを携えるリンの姿は、英雄驍に出てくるような勇ましい姿だ。

「とりあえず近くの町までおねがい」

リンの旅は、今始まったばかりである。

英雄

アルマーズを使った時から、覚悟はしていた。戦いの中で死ぬ。かつての自分はそれを受け入れていたはずだ。いや、打ち破るとすら考えていたかもしれない。

しかし現実是这样だ。昔助けたベルンの王子に敗北し、娘の安全もわからないまま死んだ。

——ならば、何故、自分がまるで生きているかのような思考をしているのだろうか。かつての狂戦士のように魂の存在となったのか。どちらにしろ思考だけで、自ら動く事はできない。堂々巡りとなるだけだった。

「ふむ、どんな人間かと思えば」

思考の中に何者かの声が割り込んできた。声からして女らしい。

「大方戦争に負け殺された、といったところか」

理由をピタリと当てる女性。彼女はなぜここにいるのだろうか。

「私はレナス。勇者の魂を選定する存在だ」

彼が死んだ世界はレナスが活動していた世界ではない。そのため何の事なのかまったくわからなかった。

「生前の功績により、我々神の兵となるに相応しいかが決まる。お前は性格がよかったとは言えないが、武勇に対しては申し分ないのでな」

戦乙女ヴァルキリーの伝説が浸透している世界ならその言い分でも納得できるだろうが、彼の印象は何を身勝手なことを……としか思えなかった。

「世界が違うのだから仕方ない事だが、本来私達神に選定されるのは栄誉な事なのだぞ？」

それは人間が神に敵わない、という考えが根底にあることが前提だが。絶対王政と似たようなものだろうか。

「無条件で従え、と言う程私は傲慢ではない。このまま死を望むの

ならば、安らかに逝けるよう道は示そう。だが」

一拍置く。

「――娘の事が心配ではないのか？」

男は息を飲んだ。

「人同士の戦いに介入することはできない。だが、お前の娘が今どうしているか伝える事はできるぞ」

無事だけでも確認したいと告げると、レナスは頷き、念じる。すると、男の頭の中に何かが流れ込んできた。

それは街道を、三人の女性が歩いているビジョンであった。髪の色は青、緑、紫。全員がローブのようなものを纏っている。

その三人は、魔道士が経験を積み、指輪を用いる事により格を上げた賢者という職業に全員が就いていた。

「逃げ出した後、二人の賢者に保護されたようだな。今のところ、戦いとは無縁の場所にいる。これから先はわからないが」

男は自分の娘の安全を確認した事で肩の荷が降りる気分だった。自分が先頭に立った甲斐があったというものである。

やがて映像は途切れた。

「願いは叶えたぞ。今度は私の願いを聞いてもらおう」

願ってしまった以上仕方がないと、レナスの話を受け入れることにした。

「勘違いしているようだが、私に使われる以上、勝手に死ぬ事は許さんぞ」

厳しい言い草なのか、はたまた心配が故の言い草なのか――どちらかはわからないが、言う程傲慢でもないようだ。

「……名は何と言う？」

男は神なのだから、それぐらいわからないのかとレナスに聞いてみると、レナスは無然とした表情をする。どうも本人から名前を聞きたいようだ。

「私が選定したことで、既に口を動かし話すことができる筈だが」
レナスに促され、男は口を開く。

「……ヘクトルだ」

「ヘクトルか。何処かで聞いたような響きだが……まあいいだろう」
レナスは満足そうに笑う。

「ヘクトル。お前を選定した理由は並外れた武勇以外にもある。神将器についての話が聞きたい」

レナスは世界を旅する傍ら、神将器についての伝承を耳にするに至る。最初はよくある英雄驍として聞き流すつもりであったのだが……

レナスは人として世界を旅するうちに、神将器を狙う不死者が存在している事に気がつく。それも無軌道ではなく、確固たる目的があって探しているようなのだ。

世界を安定する、という目的を忘れたわけではない。しかし、世界を乱しているものを看過するわけにはいかない。現に、彼らに攻め込まれ滅亡した部族もいるようだ。

ならば先に神将器を手に入れば、全て揃えようとしているならば必ずレナスの元にも来る筈である。そう考え、使い、かつ封印したヘクトルを選定したのである。

レナスは、ヘクトルに今語った理由を話すと、快く案内を承諾した。

そして善は急げと、アルマーズ目指して飛行を開始した。

雪山を出た輝夜とトルネコはあのまま旅を続け、何の問題もなくあの世界を出ていた。あれ以降、あの霧も出ていなければ、別世界に迷い込む事もない。

「え？ 次の町では商いをしないって？」

輝夜が不思議そうに問い掛けた。ちなみにウェンデルで商いをしてから、いくつかの町で商いをし、その都度輝夜も手伝いをし、かなり板についてきている。

それだけにいきなり商いをしないというのは、彼女にとって衝撃

的だった。

「ええ、実は次の町には行った事があるんです」

トルネコが今向かっているのは、かつては帝国と呼ばれ、武力によって大陸を統一したと言われるアバロンという国だ。

しかし今は帝政を廃止し、共和制となっている。珍しいのは、何かのクーデターが起きて覆されたのではなく、皇帝自身から崩したのだそうだ。

自分から権力を手放すというのは、考える以上の決心が必要である。ましてや皇帝ともなれば、逆らう者はいない程の権力だ。当時の皇帝の考えを聞いてみたいものである。

「繁盛した甲斐もあって商品が少なくなってきたまして。それにアバロンは武器の質が高いんです」

かつて帝国としてアバロンは、皇帝の命令により様々な事が行われた。新しい武器や防具の開発、術を研究する施設、大学、新市街の建設などである。

術研究所は今機能していないのだが、他の施設は今も活動している。武器についてもその頃の技術が受け継がれているというわけだ。

「店を出しても物は売れないってわけね」

「ええ。ですからこの店で大量に買い付けようと思ってます」

商人は売買を生業とし、売るものがなければ自分で仕入れるものだ。それは自分でどこから拾ってくるのもいいし、他の町で同じように商人が売っているものを買って、利益が出るように他の場所で売るといいうのもいいだろう。

「そう……じゃあ今回仕事はなしね」

輝夜は少し残念そうに言った。仕事に対して結構ノリノリらしい。だが、その態度はすぐに崩れた。

「じゃあ私は適当に散策しよつと」

「そうですね、それがいいでしょう」

この世界に来てから休暇らしい休暇を取っていない輝夜。それが

一日空いたとなれば、楽しまなければ損である。まあ仕事をしていてもトルネコの商才あつてすぐ終わってしまったのでだいたい酒を喰らっていたのだが。

「とは言つても……」

アバロンにたどり着き、トルネコはさっさと買い付けに出してしまった。先程言った通り、町の散策をしているわけなのだが。

娯楽施設がまったく見当たらない。輝夜は新市街の町並みを見て楽しめるわけでも、大学の見学をして楽しめるわけでもなかった。暇を潰せる場所が一つしかない。

「酒飲もうかしら」

そう、酒場だ。酒場ならたいいていの町にあるし、酒場で酒を飲んでいだけで時を忘れてどんちゃん騒ぎができる。

問題は、次の日に毎度頭痛に悩まされるぐらい。給金がわりとして、トルネコにいくらか金をもらっているため、いつでも飲めるのだが。

「まあ、中に入ってから考えよつと」

深く考えない事にした輝夜は酒場の扉を開き、喜び勇んでテーブルについた。

神将器探しをしているレナスは、ヘクトルの案内のもとアルマーズを封印したという場所へ来ていた。

辺りは昔城が建っていたそうだが、今は見る影もなく崩れ風化が始まっているようだ。

「見たところ廃墟のようだが、本当にこんな場所にあるのか？」

「ああ。みすばらしい場所になら、逆に近づかないだろうと思った」
一種のカモフラージュ、という奴だった。こういう場所を荒らす盗賊も存在するが、その程度の存在なら封印も解くことはできない。

実際いくつかこの宝にたどり着いた盗賊もいるのだが、謎を説き明かすことはできなかった。

盗賊が腹いせにここに宝がありそうな事を言い触らす可能性もあるが、盗賊がそれを話すということは宝を取れなかったという事が示される。たちまち能無し扱いされるだろう。そのため噂がたつことはあっても、誰も本気にはしていなかった。

ヘクトルが門の封印を解くと、開いた門から埃の臭いがあたりに広がる。

「ふむ、数十年は経っているようだな」

「親父が死んですぐだからな。もうそれぐらいは経ってるか」

奥に進むと、薄暗い光景の中に祭壇のようなものが見えてきた。

祭壇にヘクトルが近付くと、まばゆい光を放ちはじめた。

レナスが目を覆いながら見ていると、光を放っているのが一つの斧であることに気がつく。

「ほう、これは……」

レナスが感じた限りでは、どうやら神将器という伝承、眉唾ではないらしい。目の前にある斧からは、神が使う武器に勝るとも劣らない風格がある。

所持するだけではなく、戦闘に使ってもいいかもしれない。

「後でエーテルコーティングを施しておくか」

レナスはアルマーズを携えそう言った。

「そうですか、ソアラさんはずっと魔法の研究をしていると」

「まだ失敗したりするんだけどね……」

エレンディアに滞在している射命丸文は、暇を持て余すあまり町の住民に取材を敢行していた。今日の取材は魔法ギルドのソアラ氏である。

幻想郷で誇大広告を書くインチキ記者として有名な射命丸であるが、このあたりはあまりに平和すぎて騒ぎ立てることもない。せい

ぜい、異種族と連絡が取れなくなったとかちよつと魔物が増えてきたとかの噂だけである。

「ソアラさん、今日はありがとうございます」

「研究の合間でちょうど暇だったしね」

そうこうしているうちに射命丸の取材が終了したようだ。魔法は幻想郷にも存在しているが、やはり進化の体系が変わっていて多少は興味深い。

「今日もいい天気ですねえ……」

魔法ギルドはクリスタル採掘場の奥に併設されている。洞窟内にもちろん照明はあるが、外の日の光と比べるとやはり暗く、外に出ると若干眩しいのである。

「そういえばそろそろお昼かー」

いい感じに空腹状態になってきた。厄介になっている家のファイアが作る料理は絶品なのだ。酒は出ないが。

「戻りましょうか」

「あれ、誰もいない？」

射命丸が二人の家に帰ってくると、いつもなら食事の準備をしているファイアと手伝いをしているルウリがいない。

「むむむ……何か用事があるんですかね」

とりあえず座って待つことにしたのだが、数十分どころか数時間経っても気配すらしない。

「そういえば……」

異種族と連絡が取れなくなった時、二人は早急の調査を希望していたが、町長は許可を出さず、憤っているのを見た。

「まさか、勝手に!？」

射命丸は思わず立ち上がる。何故なら、異種族の住む場所には以前から魔物が観測されており、近付かない人が多いと聞いたからだ。そんな場所に二人だけで行ったとなれば、命を失う危険すらある。

二人とともに生活する中で、情が移ってきていた。

気が付いた時には家を出て、空を飛んでいた。

「一大事ですよこれは……！」

射命丸が空を滑空していると、エレンディアから少し離れた場所で二人を発見した。しかし問題はそれからであった。

「よかった、無事だったんですね」

射命丸が空から降り立つ。

「あ、射命丸さん」

そう答えるフィアの声には元気がない。疲れている理由を探ろうとすると、背中に誰かが背負われている。童顔だが男のようだ。

ルウリは男が持っていた荷物を見せてくれる。その中には、どこを握ればいいのかわからない剣が目を引く。

「フィアちゃんが薬草を積むって言ったから外に行っただけだね」
薬草を積むために外に出たら、行き倒れを見付けてここまでやっとの思いで背負ってきたという。

「お疲れでしょう、私が変わります」

見かねた射命丸はフィアから男を奪って背負う。射命丸は見た目は少女だが実は千年単位を生きる妖怪。身体能力も高い。

「ありがとうございます」

「居候ですからこれぐらいは当然です」

とはいえ、人一人分の重量は持てない重さではないにしてもやはり重かった。しかし、射命丸はまったく別の事を考えていた。

――起きたら取材しよう、と。

街道を歩く三人の女性達。そう、彼女らは先程ヘクトルが見たビジョンで見せられたものたちである。

彼女らは職業こそ賢者と同じであるものの、本来ならば面識のない三人。ひとえに世界が融合したせいで出会ったと言える。

まずは真ん中を歩く緑髪の女性。彼女は黒い牙として使われてい

た魔道士ニノ。年齢は三十を越えるが、それを感じさせない童顔が特徴である。

彼女は数十年にわたり旅を続けている。目的は最愛の人の消息を探すため。可哀相だと思いつつも、その人との間にできた二人の子供は孤児院に預けた。

次にニノの左側を歩く紫色の髪の女性。三人の中でもっとも体格が小さい彼女はルーテ。周りからの評価はただ一つ、変人である。

彼女に才があり、類い稀なる魔法の素質があることは紛れも無い事実だが、事あるごとに自らを天才と言うものだから周りに若干呆れられている。

そして向かって右側、青い髪の女性。彼女はリリーナ。ヘクトルが気にかける、娘である。

彼女はいわゆるお嬢様で、精練潔白であり、誰に対しても優しい。魔法に素質を持つも、技術がまだ追いついていない状況だ。

彼女らはリキアのエリウッド侯の城に向かっていると途中であった。リリーナがヘクトルに向かえと言われた場所である。

エリウッドと言えばヘクトル、そしてリンとともに戦い活躍した人である。今は病気を患い影響力が無くなりつつあるが、息子のロイが立派に成長し頭角を現している。

そしてリリーナはロイと幼なじみであり、後々は縁談も噂される。頼るにはこれ以上ないところなのだ。

現在リキアとベルンの戦争が勃発している。リリーナが逃れる事になったのも、ベルン国によって攻め滅ぼされたのが原因だ。

リキアもベルンにやられっぱなしではなく、反戦の狼煙が上げられていたのだが、融合現象により今は一時的に休戦状態となっている。

が、リキアの治安は非常に悪い。何故ならば政の不安を突くように、盗賊や蛮族が活動しているからだ。現在はそれらの対処に追われている。実際この三人も襲われている。

話を戻す。三人はあと少しでエリウッド侯の城にたどり着くところ

ろであつた。しかし城が見えて来た時、三人は驚愕することとなった。

——城から煙があがっていたのである。

「お嬢さんよく飲むね」

酒場に入った輝夜はやはりと言うか、出来上がっていた。店主も綺麗な女性が酒を飲んでる姿を見るのが嬉しいのか、笑みが浮かんでいる。

「だって酒飲むぐらいしかやることないんだもの」

「そんなに綺麗なんだから、いくらでも告白する人がいるだろうに」などと世間話をしていると、やがて日が傾いてくる。昼間に入つたので、だいたい5時間は飲み続けているわけだ。

「だいぶ遅い時間になってきたな」

と話すのは右端に座る男。輝夜が入ってくる前からそこに座っていた。輝夜が見たところ、あまり酒も飲んでいないようだった。

「そうですね。今日はよく飲む人がいたので時間が早く過ぎました」

「あら、私のおかげね」

「いや、ははは……」

談笑が続く酒場だが、その和を崩す轟音があたりに響きわたった。突然の事に一瞬時が止まり、次に聞こえたのは悲鳴だった。

最初に反応したの端に座っていた男だった。音もなく立ち上がり扉から外を伺う。

——すぐそばの家が、崩れ落ちていた。そしてすぐそばに怪物が浮いている。

「あれは……!」

男が驚愕する。何を驚いているのかわからずに輝夜も覗くと、右手に剣、左手に女性の顔を持った、人間あらざる姿の怪物が宙に浮いていた。

「あいつがやったの?」

ほろ酔い気分だったのが完全に吹き飛んでしまった。

「ああ。あいつはクジンシー。怪物だ。この国の皇帝が倒したはずだが――」

クジンシー。アバロンの皇族を二人死にいたらしめた。時の皇帝レオンが死と引き換えに攻撃の謎を説き明かし、やっどのおもいで打倒したと言われる。

「本体は倒したはず――なのに何故復活する？」

男は誰にも聞こえぬような声でつぶやく。

クジンシーは過去、皇帝によって二回打倒されている。一回目はレオンから皇帝を継いだジェラルルにより倒され、二回目は最後の皇帝によって倒された。何故復活したのか、それは後日明かされた皇帝の手記によって判明した。

しかしそれを説明するには、クジンシーをはじめ全員で七人の、七英雄と呼ばれるものたちの解説をしなければなるまい。

かつてこんな伝承があった。世界の危機を救い、どこかへと姿を消した七英雄、と。そしてそれは紛れも無い事実である。

その話が語り継がれなくなったころ、怪物が発生し、またも世界の危機が訪れた。そして伝承は思い出され、七英雄の到来を待つようになる。そして人々の望み通りに帰還した。

しかし、帰ってきた彼らは人々に害を及ぼすようになっていたのだ。ヤウダのワグナス、ステップのボクオーン、ナゼール海峡のダインタグとスービエ、サラマットのロックブーケ、砂漠のノエル、ソーモンのクジンシー。世界はこのまま終末へ向かうのか、と思われていたところに、立ち上がる者がいた。

それが代々のアバロン皇帝である。各国を統一する傍ら七英雄を倒し、残り二人となった頃、クジンシーが復活する。

皇帝はそれを倒した後、彼らには秘密があると確信し、調べた結果わかったのが、本体の存在である。

彼らは大氷原の洞窟に本体を隠し、外に出ている体を倒されても本体が無事な限り復活する。クジンシーが復活したからくりはこれ

であった。

そして激闘の末、七英雄の本体を完全に滅し、争いに終止符を討ったのだ。

つまり今後二度と、七英雄が復活することはないはずなのである。本体を倒したのだから。その情報の真否は、七英雄と同じ種族からの情報なので間違っていない。

ならば何故、ここに復活しているのか。理由は簡単である。神達が話していた、甦りによるものだ。本体から何から全てが再び世界に降臨したということである。

しかしそれは神のみぞ知る。この酒場にいるような一介の人間が知る由もなかった。

「このままじゃ酒が飲めないじゃない。ちょっと黙らせましょう」
不純な理由で輝夜が追い払おうとすると、男が慌てて止めた。

「待つんだ。奴は魂を吸う魔法、ソウルステイルを使う。何の対策もなければ死に行くようなものだ」

「……大丈夫よ、なんとかなるわ」

「何を言ってる。どうにかなるわけないだろう。君はここでじっとしている」

男はそう言って輝夜を酒場の椅子に座らせると、自分は何故か酒場の外に出てしまった。

「何よあいつ、人を止めといて自分は出ていくなんて」

輝夜は少しいらつくものの、所詮他人の事。すぐにどうでもよくなった。なんかあの男がどうにかするらしいし。

「はは……あの人はいろいろあって、アバロンの治安を守る自警団の団長なんです」

店主は奥歯にものが挟まったように言った。どうも、何かを隠しているようなのだが。

「ふーん、そうなの」

もはや輝夜にとってはどうでもいい事だった。

「これで出て来るだろう」

クジンシーは一つの家を壊してから、破壊活動を止めていた。実は人間を殺しに来たわけではなく、人一人を誘い出すための陽動なのだ。そしてそれは完璧に機能した。

「何故貴様がここにいる」

そこに現れたのは先程輝夜を止めた男性。酒を飲んでいた時の穏やかな表情は消え、視線だけで人を殺せるような厳しい目付きをしている。

「いろいろあってな。また会えて嬉しいぞ、皇帝」

この男を皇帝と呼ぶクジンシー。誘い出したかった人物とは、どうやらこの男のようだ。

「私を呼び出してどうするつもりだ？」

「簡単な事。皇帝、お前も奴らと同じく復讐の対象だ」

奴ら、とは古代人の事だ。古代人は七英雄に世界を救ってもらっておきながら、異世界に追放するという愚挙を犯した。そして恨みを買い、復讐の為に異世界から舞い戻り、消息を調べていた。

そのような存在と皇帝と彼らは、完全に同一の目で見られている。理由は簡単、復讐の邪魔をしたことと、殺したことだ。

「貴様らが害を及ぼしたから殺したまでだ」

それに対し、皇帝も七英雄に恨みがある。統一の邪魔をし、何度も抹殺しようとしたことや、何より代々受け継いだ記憶に息子と自分を殺された、と焼き付いている。

「アバロンを出ていってもらおうか」

クジンシーと皇帝の戦いが今再び、幕を開ける。

しかし、皇帝は人としての道を大きく踏み外していた。

「さっさと消えてもらおう……龍脈」

皇帝は強力な術法を自らにかけ、大地の龍脈の力を引き出し、自らを強化する技だ。

「まあ待て皇帝」

「聞く耳は持たん！」

クジンシーの問い掛けを無視し、目にも留まらぬ速さで踏み込み、拳骨の嵐を浴びせる。体術の最高峰で、千手観音と言う技だ。たまらず吹き飛ばされるクジンシー。

「とっとと死ね」

「ふん……まあいい。いくらでも復活できるのだからな」

クジンシーは跡形もなく消え去った。なんとも手応えのない終わり方だ。撃退した本人の皇帝も浮かない顔をしている。

実は、七英雄が単体でいくらかかってこようが皇帝を倒すことはできないのだ。何故ならば、全ての技術を身に付けた皇帝は最強の存在だったからである。

問題は本体である。攻撃もさることながら一番の問題は、七英雄の本体がどこにあるか全くわからないからである。

それに対して強くない、という感想は皇帝にのみ当て嵌まる。ただの民であれば、クジンシーの剣で斬られただけで死ぬだろう。

「自分から動くべき……だな」

皇帝は酒場に戻らず、墓場に向かって歩き出した。

「輝夜さん、大丈夫ですか!？」

トルネコが血相を変えた状態で酒場に顔を出す。その姿を輝夜がほうけた目で眺める。

「酒飲んでたから大丈夫」

「そうですか……よかった」

トルネコは胸をなでおろす。やはり死なないものとわかっていても、心配になるようだ。

武器屋で買っては馬車に運び込んでという作業をしていたトルネコだが、クジンシーが襲来した時は馬車に入ってやり過ごしていた。

「普通に外を歩いてるって事は、外の魔物は倒されたのかしら」
それならあの男もなかなかの使い手だ、と輝夜は思った。

「外はもう活気を取り戻してました」

「ふーん」

輝夜は酒をあおり、男の事を思い浮かべる。少しは興味が出て来たようだが、やはり酒には勝てず、結局は酒を飲むのであった。

「久しぶりだな、キャット」

「これはこれは、元皇帝さんじゃない」

皇帝は墓場の地下にあるアバロンの闇の組織に来ていた。彼は自警団を運営する傍ら、ここのシェイシーフとも連携していた。

ちなみに、術研究所も表向きは閉まっているが、傭兵や魔術師がたむろする裏の酒場となっている。

「調べてほしい事がある」

「七英雄の本体のことだね？」

「もう調べていたのか？」

「まあね。実はアバロン以外に七英雄が現れたらしいって情報もあつてさ」

キャットは皇帝に説明する。

「アバロンが七英雄に襲われて、噂は真実になった。あとは探していかないかね」

「あてはあるのか？」

皇帝が問い掛けるとキャットは頷いた。なんとだいたいの場所のあたりが付いているというのだ。

「ここから遠い町のポドールイに、数千年生きたと言われる吸血鬼から話を聞いたんだ」

その吸血鬼はレオニードといった。彼の話すことには、四魔貴族という強大な存在の幻影と戦った際、アビスゲートの奥に似たような者を見たという。

「アビスゲート？なんだそれは」

「この世界と異世界を繋ぐ扉みたいなもんなんだって。そして理由

はわからないけど、その異世界は何故かこちらと融合することなく分離しているんだって」

アビスゲートの奥の世界は魔物が多く生息しているが、だからといって世界同士が融合しないわけではない。

「アビスゲートは全部で五つあって、そのうち四つはすでに封印されてて、残りは一つなんだけど、世界融合で位置がズレて、探しているんだけど、まだ見つかってない」

ということはアビスゲートを封印してしまえば、七英雄を封印できる、ということなのだが。

皇帝は七英雄本体との戦いを思い出していた。

「……奴らは、アビスゲートとアストラルゲートという力を用いていたな」

「元皇帝さんも覚えてた？そう、七英雄達はアビスゲートを人為的に作り出すことが出来る。ただ封印するだけじゃ、なんの意味もないって事」

「ならばアビスゲートを実際を通り、七英雄達を倒すしかないのか」

「そうなんだけど……アビスゲートは、私達人間じゃ通れないらしいんだ。それに最後のアビスゲートの位置もわかってないんだ」

現在はアビスゲートの位置を必死で探っているらしい。

「人間では通れない……ということは、打つ手はないのか？」

人間離れた強さであっても人間。神になることはできない。ならば、手を出すことは出来ないのか。

しかしキャットはそれを否定する。

「アビスゲートの力を制御する事ができる人間がいるらしいんだ。その人に協力してもらえば、打倒はできるはずだよ」

「ということは、人捜しからだな」

当座の方針が決まる。

「元皇帝さんはどうするの？」

「私はしばらくここを守る。進展があったら教えてくれ」

自分にできることをする。皇帝はその力で敵を倒し、シテイシー

フは情報を集める。帝政が消えても、このシステムは機能していた。
「私もアバロンが無茶苦茶にされるのは嫌だからね……すぐ知らせるよ」

「頼むぞ」

皇帝はシェイシーフの隠れ家から出ていった。

英雄（後書き）

皇帝の名前は付けてないです。ジエラールも考えたけどね

唄われる者

「どこだ、どこに逃げた！」

「探せ！王国が汚れる盗賊団など皆殺しだ！」

ブロンキア帝国との戦争を終え、復興を辿るはずのファンタジア王国は、刻一刻と滅びの道をたどっていた。

希代の賢王として期待されていたユグドラだが、今はその頃の面影はなく、王国に仇成すものを蹴散らす覇王と化していた。

ブロンキア帝国の民は虐殺され、王国民であっても相応しくないと判断されれば浄化と証し殺害される。この世の地獄であった。

そして今、ユグドラは過去との決別を決定的なものにしようとしている。

かつてユグドラとともに戦い、帝国とともに打倒したミラノ率いる盗賊団に、王国の手が延びていたのである。ユグドラの命令内容は、ミラノは捕らえ、他は好きに。というものだ。

盗賊団は王国軍の襲撃を受け、散り散りとなって敗走。今は互いに連絡も取れない。そして頭領であるミラノは今、王国の騎士に追い詰められていた。

「くそっ、なんでこんなことになっちゃった」

ミラノが呟く。帝国を打倒して、これから先は平和な世界をあいづが作る筈だったのに、どこで踏み外したのか。

しかしミラノは、ユグドラが正気を失ったと聞いてもなお、その話を信じきれないでいた。ともに戦った中で、ユグドラの性格はよくわかっていいる。

常に共存の道を探り、敵であっても非常に成り切れない優しさを持っていた。それが邪魔なものを皆殺しにするようになるなどどうやって信じられよう。

「確かめないとな……」

ミラノは懷から、グラヴィティカオスのカードを取り出した。

「こんなところでやられるわけにはいかねーんだ！」

カードの力を解放する。帝国との戦いで存分に鍛えられたその力は、並の騎士では到底耐えられないものだった。死ぬまではいかないが、一瞬で意識を奪われ昏倒する。

「ぐっ……」

だがミラノもその場にへたり込んでしまった。実は先程から幾度となく襲われ、そのたびに力を借りていたのだ。何度も強力な力を、しかも連続で解き放った時の負担は計り知れない。

ミラノはすでに、肩で息をしなければならぬほど疲れきっていた。

しかし、彼の状況を嘲笑うように、追っ手が途切れることはない。ミラノを探す王国兵の声が近付いてきているのだ。

このままでは力を使うこともできなくなり、結局は捕らえられてしまうだろう。ユグドラに会える、という点は考慮すべきだろうが、納得がいくわけもない。

「いたぞー！ミラノだ！」

「くそっ……」

まだ立ち上がることさえ出来ていないのに、次々と王国軍が現れ、あっという間に囲まれてしまった。

「てこずらせてくれたな、さあ来てもらうぞ！」

「がはっ！」

騎士の槍で背中が叩かれる。疲れも何もない状況でさえ叩かれれば行動出来なくなる痛みが走るというのに、今は疲弊しきっている。もはや、身動き一つできなかった。

「おい、そっちを持って。運ぶぞ」

「てこずらせやがって」

王国軍とはとても思えない言葉を聞きながらミラノの意識は途切れてしまった。

「散々掻き回したあげく失神か、とんでもない奴だな」

王国軍がミラノを好き勝手に罵倒したり、殴ったり蹴ったりする。

「おい殺すなよ。ユグドラ様に殺されたくなかったらな」

彼らの会話からも今のユグドラの恐ろしさが伝わってくる。意に沿わなければ王国兵でさえ殺されるという証左だ。

しばらくは何事もなくミラノを運んでいた王国軍だったが、一人の乱入者が現れる。

「ミラノ殿っ！」

現れたのは、ユグドラの乱心により王国軍を抜け、以後各地を転々としていた騎士、デュランであった。

デュランはミラノの捕縛命令が出されたと聞き、王国に舞い戻っていた。そして今ミラノが捕らえられたのを確認し奪還するために突撃したわけである。

単機、かつ類い稀なる武勇を持つデュランの勢いは著しく、王国軍は一時総崩れとなった。広がる動揺をデュランは見逃さない。

「はああっ！」

ミラノを抱える騎士をひと突きし、一瞬で絶命させると、ミラノを奪い、離脱する。鮮やかな手並みだった。

こうして捕らえかけられたミラノはすんでのところでデュランに助けられ、難を逃れたのである。

「ミラノを捕り逃した……？」

王国軍の報告に、ユグドラは激怒した。聖剣を握り、報告した騎士に剣を振り下ろす。体を両断された騎士は、恐怖の表情を浮かべたまま絶命した。

「使えない奴……それでも王国の騎士？」

それだけでは飽きたりず、その場の騎士を何人か殺害する。

「ユグドラ様……どうか怒りをお納めください！」

側近の一人が諫めると、ようやく怒りがおさまったのか、玉座に戻る。

「……全軍に通達。なんとしてもミラノを捕らえなさい」

「――はっ」

ユグドラは再びミラノの探索および捕縛を命令する。その表情に垣間見えるのはもはや妄執だけであった。

行き倒れていた男を家に連れて来てから数日。目覚めぬ男を尻目に、エレンディアでは事態が動いていた。

アーク族と呼ばれる種族がある。蝙蝠のような羽を持ち、腕力が強く、鎌を得物とする種族だ。

アーク族の住む場所の一つである魔城ラクリマは、エレンディアからは離れているが、ギルドの奥にある魔法陣から行く事ができる。互いに連絡を取り合っていた関係なのだが、実はこここのところラクリマとの連絡が取れない状況が続いていた。それを受け、調査隊を送るかどうか議論されていたのだが。

つい先程、危険度が高いとのことで調査隊を送らないことが決まっていた。

それに反発したのがフィアとルウリの二人であった。二人は何度か説得を試みたものの、決定が覆されることはなかったのである。

それからだ、二人の行動が変わったのは。と射命丸は考えた。

その決定が下される前、もっと言えば他種族と音信不通になる前はもっと笑顔が多かったし、楽しそうだった。まあそれは、心配の裏返しなのだろうが。

そんな事もあって、射命丸は行き倒れていた男を一人で看ていた。一見女のように見えるのは、小柄なのと童顔だからであろう。少なくとも知り合いではなかった。

何もすることもなく、何となくテーブルのパンを頬張っていると、随分前に出掛けた二人がようやく帰って来た。

「あ、文ちゃんパン食べてる」

「……おかえりなさい、二人とも」

ひらひらと手を振る射命丸。帰って来た二人の表情はやはりどこ

か浮かない。

「どうでしたかフィアさん。説得はできましたか？」

期待せずに聞いた射命丸。その問い掛けに対する答えはノー、であった。しかし今回は何か事情が違いそうである。

「もう諦めたほうが」

「諦めるなんてできません。それに、許可をもらって来たんですから」

「許可？なんのです？」

調査隊派遣の件——いや、それは否定された。ならば何の許可だろうか——射命丸は考える。

そして射命丸に嫌な予感が走る。

「まさか……反対です！」

詳しい事は聞いていないが、おそらくそうだろうと確信して異を唱える。

射命丸が考えたのは、調査隊を派遣してくれと言っても受け入れられないのなら——

私達に行かせてほしい、という願いであった。そして射命丸の考えはほぼ正解だった。

「ごめんなさい射命丸さん、でも私は決めたんです」

射命丸の言葉にも耳を貸さない。ここまで射命丸が反対する理由とは何なのか。実はいままで暮らす中で、二人に戦闘能力がある事を射命丸は把握していた。それでもなお反対する理由。

アーク族は前述の通り鎌を使う。それに伴って腕力も高いという事は、戦闘能力も高いと予想される。少なくとも細剣使いのフィアと、弓使いのルウリよりは強いだろう。

しかしその種族がまとめて音信不通となるような状況なのだ。病気も考えられるが、その予兆がまったく見られなかったのはおかしい。天災の類でも、避難民が一人もいないのは考えにくい。何せ、魔法陣をくぐりエレンディアまですぐ来れるのだから。

となれば残る可能性は、何かに全滅させられた線。気付く事なく

やられたのか、はたまた応戦して残らず返り討ちにあった等が考えられる。

そしてラクリマにはいまだに犯人が潜伏している可能性があるのだ。調査隊の派遣が中止になったのもその可能性を汲んでの事だ。

そこに戦闘能力があるとはいえ、女性二人だけで行くと言うのは、射命丸にとっては到底賛成できないものであった。

「アーク族のみんなが心配なんだよー」

フィア、ルウリ両名ともにアーク族を心配するが故の行動である。最初は長老も反対していたものの、結局は折れてしまっていた。

仕方がない、天狗の力を使ってでも止めるしかない――そんな事を考えた射命丸だったが、行動に移す前、水を差す出来事が起こった。

「う……ん」

今まで寝たきりだった男が、突然目を覚まし起き上がったのである。

「のどこかよねー、この村」

「そうですね……とても武器の需要はなさそうです」

輝夜とトルネコは、見るからに田舎という農村に来ていた。どれくらい田舎かというところの村に名前が付いてないくらい田舎だ。

武器の需要もほとんどなさそうなぐらい平和な村で、住居もかなり古い造りだ。耐久性も低そうである。

しかしそれらを上回るほど目を引く要素がひとつあった。それはこの村に暮らす人達である。頭部には動物の耳が、臀部には尾が。そう、この村は純粋な人間ではなく、獣人達が暮らす村だった。

獣人とは言っても、度合いでいくつか分けられる。全身に獣のよな毛が生えた動物寄りの姿と、人間の姿に取って付けた様な耳や尻尾が生えている人間寄りの姿。この村は人間寄りの方だった。

「ちよっと探索してみましょ、こんな村、なかなかお目にかかれな

いわ」

「武器が必要そうな所を聞いてみるのもいいですね」

ここまで栄えていない村なら、住人の態度は二つある。よそ者に対して異常なまでに偏屈になる村と、誰に対しても優しい村。どうやらこの村は後者のようだ。

輝夜は村の子供達と遊び始めたし、トルネコは大人たちからこのあたりの情報を得ている。その過程で、このあたりの事が少しずつわかり始めた。

まず、この村がある国の名はトウスクル。ここ数年でできた新興の国らしい。この村は皇都からは離れているため栄えていないが、皇の住む場所には市が並び、はては遊郭まであるという。

武器の類はやはりこの村では必要ないらしい。鉄製の鍬などで十分なのだそう。売り込みをしたいなら皇都に行くといい、と地図まで渡してくれる始末である。

あらかた情報を仕入れたあと、トルネコは話を切り上げ、先に馬車へ戻っていった。

「もう少しゆっくりすればいいのに」

輝夜はというと、子供達と追いかけて遊んでいた。捕まった人が追いかける役になる、いわゆる鬼ごっこだ。

「まてー」

子供に合わせたスピードで走る輝夜。しかし子供は加減を知らず、全速力だ。案の定バランスを崩し、転んでしまった。すかさず輝夜が走り寄る。

「大丈夫？」

「いたいよー」

輝夜が子供を抱き起こしてやると、膝に血が滲んでいた。どうやら膝を擦りむいたらしい。手当てをするため、輝夜が辺りを見回すと、近付いてくる女性がいた。

その女性は患部を見ると、手持ちの道具で傷の手当てを行う。手際よく処置を行い、ものの数十秒で終わらせてしまった。

輝夜はその光景を見てしばしほうけていたが、気を取り直すと女性に話しかけた。

「あの……ありがとう。この子の手当てをしてくれて」

「いいえ、これが私の仕事ですから」

その女性はそう言って満面の笑みを浮かべる。向けられたのが男性であったなら魅了されずにはいられない魅力的な笑みであった。(……ん?)

輝夜はふと、女性の下半身に目をやる。するとそこには、笑みに反応するようにびくびく動く尻尾があるではないか。

「……どうしたんですか?」

女性からかけられた言葉も聞こえないほど尻尾を注視している輝夜。彼女の頭の中は、この尻尾を掴んでみたいという考えしかなかった。初対面の女性に対して考えることではない。

だが彼女の尻尾は、それを上回る程掴みたくなる魅力に溢れていた。毛が生えてて気持ち良さそうというのもある。

「――ねえ」

「なんですか?」

「その尻尾触っていい?」

「いいです……って、ええっ!?!」

流石に無断で触るのはよくないと思ったのか、輝夜は許可を取ろうとした。女性もそんな事をいきなり言われるとは思わなかったのだろう。弾みで許可を出してしまった。

そしてそれをいいことに、輝夜は衝動を抑えなくなってしまった。

「ま、待ってください、今のは言葉のあやで……」

今になって女性が必死に否定しても、輝夜はもはや聞く耳を持たなかった。まずは右手で、尻尾をむんずと掴む。

「やんっ!?!」

尻尾を掴まれた瞬間、彼女の表情がなんともいえないものになった。痒いようにも見えるし、気持ち良さそうにも見えるし、腑抜けたようにも見える。背筋は尻尾に与えられた衝撃でピーンと伸びて

いた。

「や、やめてくださ……あうんっ!？」

なんとか抵抗しようとするが、残った左手で尻尾を掴まれるとそれも無となってしまう。それどころか全身に力が入らず、その場に崩れ落ちてしまう。

「あら、こんな態勢で……尻尾をモフリやすくしてくれたの？」

「えっ……？」

息も絶え絶えな女性が自らの態勢を確かめる。その態勢はお尻と尻尾を輝夜に突き出す格好だった。輝夜が男であったなら、もっと違う感情を感じただろう。

しかし今の輝夜は、尻尾をいじくりまわす事しか考えていなかった。

「も、もうだめで……ふにゃあん!？」

輝夜は女性の懇願も聞かず、ひたすら尻尾を弄るのであった。辺りには、しばらく悩ましいとも知れぬ声が響いていたという。

所変わって、こちらはトウスクルのあった世界の国の一つであるオンカミヤムカイ。背中に大きな翼を持つ、オンカミヤリユ一族により治められている国だ。

オンカミヤムカイのオンカミとは御神、すなわち主神である。主神の他にも八百万の神が存在しているが、こと信仰の対象となるのは主神であるウィツアルネミテアである。

ウィツアルネミテア信仰の他に、オンヴィタイカヤン信仰もあるが、そちらは迫害されている。

信仰の中でオンカミヤムカイは他国からも特別な扱いを受けている。それも、信仰の総本山としての側面があるためだ。

そんなオンカミヤムカイだが、つい数年の間に色々な事があった。最たるものが国のリーダーのようなものであり、他国からも一目置かれる立場であるオルヤンクルが代替わりした事であろう。

当代のオルヤンクルの名はウルトリイ。おっとりとした女性であるが、内に秘める力は計り知れない。

彼女に代替わりしてからしばらく、大きな戦や異変は起こっていなかったが、今まさに未曾有の危機が訪れようとしていた。

事の始まりは、世界融合現象である。知らない国が周辺にいくつも増えたものの、それ自体は微々たるものであった。

問題は、それに呼応したかのように起こった、大地震である。家屋等に被害はなかったが、それ以上にとてつもない事が起こってしまったのである。

——大封印の消滅、である。

大封印とは、オンカミヤリユーが最終手段として用いる術である。対象物に対して戒めを与え、大地に封印するもので、先の大戦でシヤクコポル族がオンカミヤムカイに攻め入った際に用いられた。

その時は不発に終わったのだが、後に主神ウィツアルネミテアが復活した際、主神の意志に応じて大封印を用い、神が封印されるという事があったのだ。

その封印が、跡形もなく消滅していたというのだ。それはつまり、主神が再び世界に解き放たれたという事にもなる。

かつてウィツアルネミテアは二つに分かれ、世界を幾度となく戦乱に巻き込んだ。その事を知るのは少ない。

封印される際には再び一つの存在となっていた。しかし一つになったとはいえ二つの身体は別々に人格を持ち、片方は眠る事を望んだがもう片方はそれを望まず、少し眠り再び戦乱を巻き起こすつもりだった。

それを防ぐため、ウルトリイ達に大封印を施させたのである。それが消えたとなれば、また二つの存在となり世界を戦乱に巻き込むかもしれない。

ウルトリイはそれを恐れていた。だがしかし、それと同時に嬉しくもあったのだ。それはかつてウィツアルネミテアと共に暮らした時の思い出が胸を締め付けるから。

ともかくこの事はオンカミヤムカイの外にはまだ漏れていないことであった。元々大封印が行われた事自体知らない人が多いのもある。何よりいらぬ事を吹聴して混乱を招きたくなかったからだ。

彼女が対策を練る間にも、刻一刻と事態は変わっていた。

「人の尻尾にあんな事するなんて何事ですか!？」

輝夜は尻尾の女性にもすごい剣幕で怒られていた。あれから輝夜は尻尾を心行くまで弄りまわした。女性は最後の方はもはやおかしくなってしまったのか、軀をびくびくと震わせるだけになっていた。

ともあれそこまですれば怒られるのは当然の報いであるといえる。輝夜はおとなしく話を聞いていた。

「もうこんな事したらだめですよ!わかりましたか!？」

「はい!」

と、ようやく数十分に渡る説教が終わったようだ。正座させられた輝夜は足が痺れ、立てないようだ。

「何やってるんですか輝夜さん……」

と、なかなか戻ってこない輝夜を心配したのかトルネコが再び村に来ていた。トルネコは女性からこれまでの経緯を聞く。

「……申し訳ありません、身体は大丈夫ですか？」

「もう大丈夫です。やられてる時は死ぬかと思いましたが」

数回なら変な感覚で済む事も、ずっとやられ続ければ不快になっってしまうようだ。麻痺しそうなものだが、そう単純でもないらしい。

「すいません。何かお詫びをしたいのですが、何かありませんか」

トルネコが申し出ると、女性は少し考えた末に言った。

「外にあった馬車って、トルネコさんのですか？」

「はい、そうです」

「ちやうど都に行きたいと思ってたんです。乗せていってくださいませんか?」

それは非常に渡りに船な申し出であった。

「おら、逃げる逃げる」

剣を振り回す男。世間一般の認識では、彼は魔物を狩るハンターとして通っていた。しかし、その実態は。

「助け……いやああ！」

弱い魔物をいたぶり、快楽を得るハンター。それでいて強い魔物を見ると一目散に逃げ出す腰抜け。魔物ならば何をしてもいいと考える典型的な個人主義者だった。

「この世界はいいなあ、魔物が人間みたいな姿してて」

彼の魔物観は簡潔だ。即ち自分の常識での人間でないもの。少し翼が生えただけの人間も、魔物。耳が長いだけでも、魔物。

言うまでもなくその考え方は危険極まりない。彼はその考えに従い魔物を狩り続けていた。最近のトレンドは、若い娘の魔物。彼の犠牲になった魔物は百を超える。

「つまんねえなあ、簡単に死んじまいやがって……うん？」

と、男の前に何かが現れた。というのも黒い玉がふらふら飛んでいる、としか見た目からは説明出来ないからだ。よく目を凝らしてみると、黒い玉の中心に何かが見えた。

「お！また魔物じゃねーか」

黒い玉の中にいるのはどうやら少女のようだ。外見はまったく人間と変わらないが、彼は即座に魔物と判断した。黒い玉の中に見える、ただそれだけで。

「おら、こっち向けや！」

男は剣で少女に斬り掛かる。少女はそれを最低限の動きでかわし、一言。

「あなたは食べてもいい人間？」

「はぁ？何言ってるんだ、バーカ！」

その問いかけに答えず、男は再び斬り掛かる。

いや、斬り掛かろうとした、が正しいか。

「あれ？剣が落ちてやがる」

今の今まで握っていたはずの剣が下に落ちていた。それを拾おうと屈むも、なぜか掴めない。

「人間を食べるのは久しぶり、なのかー」

少女は何かを租借している。手には血が滴る何かを握っていた。

「あれ？なんで拾えねーんだ？」

その間も、男は剣を拾おうと努力していた。自分の違和感には何一つ気付かないまま。いや、気付こうとしていないのか。痛みから逃避している可能性もある。

「やっぱり右手だけじゃ足りない」

そう言うと少女はじわじわと男に近付いていく。

「あれゝ拾えねゝどーなってるんだゝ」

男は狂ったように剣を拾おうとする。そこにあるはずの右手で。

「いただきます」

そしてそれ以外を考えるとなく、彼の意識は二度と目覚めることはなかった。

二つの黒

戦乱に加え、世界融合の影響で荒廃を極める旧エレブ大陸地方。西方三島とも地続きになっていた。

サカ、イリアはベルンの進攻に加え、魔物や謎の勢力に攻め込まれ、もはや国は滅亡寸前にまで追い込まれていた。

また軍事大国であるベルンも、前述した勢力に攻め込まれ、対応に追われている。今の所は特に問題なく対応しているようだ。だが、人間同士の戦争は中断せざるをえない状況になっている。

リキアも例外ではなかった。謎の勢力は、フェレ侯のエリウッド治める城へ侵攻していたのである。三人娘が見た煙はそれが原因であった。

謎の勢力の勢いはすさまじく、一時城の中まで攻め込まれる事態となった。

だが、それは三人娘の活躍と居合わせた一人の人間によって救われた。そしてその一人の人間により、謎が紐解かれることとなった。

フェレ侯の玉座の間。ここに一人の人間が招かれていた。彼が名乗る事には、一介の軍師だと言う。しかしフェレ侯エリウッドにとっては、かつての戦いにおいて掛け替えのない友人であった。

「よく来てくれた。君の力が無ければ今ここにはいなかっただろう」「勿体ないお言葉です。それに、約束でしたからね」

かつてエレブ大陸にその名を轟かせ、雇おうとしても行方知れずだった軍師。彼は史実に残らず裏で活躍し続けていた。

「それに……ヘクトル殿は間に合わず」

軍師マーク。キアランの公女リンへの協力を皮切りに、歴史の裏で繰り広げられた戦いで腕を上げた男である。彼は、ヘクトルを助けられなかった事を悔やんでいた。

「我々も何も出来なかった。リキアにいなかったマークが何も出来なくても仕方ない。だから気に病まないでくれ」

エリウッドも友であるヘクトルを助けられなかった事を悔やむと共に、マークを慰める。エリウッドは元来身体が弱く、今も軽い病気を患い長く戦えない身体だった。

「ヘクトル殿は助けられませんでした。ですが、私はせめてヘクトル殿との約束を守るため、戻ってきたのです」

リキアにもしもの事があれば、また力を貸してくれ——という約束。それを成すため、彼は戻ってきたのである。今までマークは、ナバタ砂漠奥の理想郷で暮らしていた。

「二代に渡って迷惑をかけるな。だが、今は君ぐらいしか頼れる軍師がいない。息子を守ってやってくれ」

リキアを守るための戦に積極的なのはオスティアとフェレだ。そのうちオスティアはすでに滅ぼされ、フェレのエリウッドは病気で戦えない。となれば、息子のロイが指揮するしかなかったのだ。

リキアにおいて、オスティア以外の領や城が攻め滅ぼされた話も流れている。タニア城なども滅ぼされた城の一つだ。今はベルンの攻勢が止んでいるものの、いつ事態が動くかもわからない。

しかしマークは、ベルンの事よりも謎の勢力との対抗が先決と説く。

「見たこともない生物や魔道士が攻めてきたが、見たところベルンの軍でもないようだ。ベルンは人ではない何かを抱えていると噂で聞くが、あれは人の扱えるものではない」

エリウッドも、得体の知れない勢力が現れた事に不安を募らせているようだ。目的さえもわからず、ただひたすら城へ攻め込んできていた。何を考えているのかがわかれば、対策ぐらいは出来るかもしれないのに。

「……エリウッド殿。私の方で、彼らの素性を僅かながら掴んでいます」

マークは驚くべき事実を告げた。何もかも謎と思われていた勢力

の秘密を掴んでいると言うのだ。

「マーク……話してみてくれ」

「はい。ではまず、ここに来る前に調べた事を話しましょう」

マークはリキアに来る前、危険を承知でサカ、イリア、そしてベルンを回ってきていたという。国として衰退した地であっても、人がいないわけではない。情報を集める手段としては危険すぎるが、あえてそのリスクを犯してまで調べた事とは。

「まず私は各地で謎の兵に襲われた場所を調べました。その結果、襲われたのはどれも神将器が安置されていた場所とわかりました」
マークが暮らしていた理想郷も襲われたことがあるという。理想郷には業火の理フォルブレイズが安置されている。

「オスティアには寄っていませんが、ここが襲われた以上確実にしよう。彼らの目的は神将器を奪う事にあります」

フェレには、かつてエリウッドが用いた烈火の剣、デュランダルが封印されている。

「神将器を奪う、か。武器として力があるのは事実だが、集めて何をしようとしているのか……」

「詳しい事はわかりませんが、私は竜に関係あるのではないかと考えます。と言うのも理想郷の書物で気になる記述を見つけたのです」
マークは理想郷に隠匿した際、保管された書物を調べていた。アトスが書いていたものや、あのネルガルが書いたもの、昔から置いてあったもの。それを読んでいた時に見つけたため、まったくの偶然と言える。

「それは人竜戦役の時代。竜との戦いに勝つため、竜を滅ぼす研究を行っていた人がいたようです。それらを総称し、骸黒の民と呼んでいたそうです」

骸黒の民。それは八神将の伝説の時代に存在したと言われる者達。竜との戦いは熾烈を極め、世界は荒廃しつつあったとき、竜を滅ぼすための研究を続け、一つの竜の存在を確認する。

「竜の中にも種類があります。火竜や氷竜などですね。しかし彼ら

は始祖竜という、今までより希少性の高い竜の存在を確認しました」
始祖竜。その力は火竜や氷竜などと比べ、凄まじい力を持つとされている。その力を用いれば、竜との戦いに勝つ事が可能だと彼らは述べた。

「力を吸収する方法まで突き止めていたそうですが、それは実行されることはありませんでした。それどころか忌み嫌われ、追い出されたと聞きます」

忌み嫌われ、追い出された理由。それは始祖竜の力が発揮される条件にあった。

「まず始祖竜の力を引き出すには、絶望という感情を味わわせる必要があるのです。それがわかったと言う事は、実際に行われたという事でもあるでしょうね」

様々な竜の種類がある中で、始祖竜に言及された書物は非常に少ない。それは種族自体の絶対数が少ない、というのもあるが、その実、歴史の表舞台に出てこなかった、という事なのだ。

竜族で有名なもの、となればやはり人竜戦役で多く露出があったもの。つまり始祖竜とは戦いに参加していなかった、という背景があるのだ。

「人竜戦役の始まりも、人の侵略によるもの。そのような状況であっても抗戦せず隠れた竜族なのです。戦いを好まないのは確実でしょう。そしてそんな考えの竜を深く絶望させ、力を引き出すのは八神将にも抵抗があったと考えられます」

人も竜を憎んでいるわけではない。生き残りを賭けた戦いではあったが、平和的な考えを持つ者を利用するような考えは持っていなかった。

「そしてその後、八神将により人の里から追い出され、竜にも言い寄ったそうですが相手にされず、結局はどこかへ消えたそうですね」
人からも竜からもつまはじきにされ、その結果、人と竜を憎むようになつた、と書物は締め括られていた。

「骸黒の民、か。憎しみだけを糧に今まで生きてきたのか。神将器

を集めているのも、復讐のためなのだろうか」

「ここから先は私の予想ですが――」

骸黒の民が神将器を集めている理由とは。マークは今ある情報から、ある程度信憑性のある答えを出していた。

「思うに彼らはまだ始祖竜の力を諦めていないのでしょうか。神将器は竜に力を発揮すると言います。という事は、始祖竜の力を利用するのに、神将器が必要という訳ではないでしょうか」

始祖竜から力を引き出した後、吸収する方法は確立されていると思われる。だが、それを制御する方法については触れられていなかった。

そこで神将器だ。竜を倒すための武器として作られた神将器全てを使えば、始祖竜を制御出来るのでは、という仮説をマークは立てた。

「そして神将器を集めているという事は、始祖竜が今もこの世界にいる、という証左ではないか、と考えます」

人竜戦役で人が勝利したあと、大部分の竜は異世界へ姿を消した。そして竜は伝承だけの存在となり、人々は次第に竜を忘れていき、実際に竜を見た人間はいなくなっていた。

しかしエリウッドやマークが知るように、竜は完全に消えたわけではなかった。ナバタの理想郷では、今でも竜が人とともに暮らしていると聞く。始祖竜も、その中の一つではないのか。

竜は自らの力を石に封じ込め、人として世界に紛れ込む。そして場合に応じ、力を引き出し、竜へ化身する。マムクートと呼ばれる種族である。

人となれば外見からは見分けが付かない。歳の歩みが人とは違うため、常に人の目に晒されているのは不可能だが。

「始祖竜の力を使い、骸黒の民は復讐を企む。そのために神将器が必要、というわけか。各地の神将器がどうなっているかわかるか？」

「マルテとミュルグレは情報が掴めません。すでに敵の手に落ちたと考えるべきでしょう。アルマーズは斥候を送り、調べるところで

す」

マークの知るところではないが、ミュルグレはリンが持ち歩き、アルマーズはレナスが所持している。ただ、行方が知れないという事で最悪の想定、即ち骸黒の手に渡っていると考えるのが自然だった。

「エツケザックスはゼフィール国王が使い、アポカリプスはベルンにあります。まあしばらくは大丈夫でしょう」

アポカリプスはベルンの封印の神殿にある。ブラミモンドがいたあの神殿だ。ベルンはまだ体力があるという事で、とりあえず考慮の外へ。

そしてフォルブレイズについて言及する頃、マークは懐から一冊の魔道書を取り出す。それを見たエリウッドが驚愕する。

「フォルブレイズは理想郷にありました。理想郷から目を逸らすため、とりあえずイグレーヌ殿にお頼みして借りてまいりました」

イグレーヌとは、理想郷の護り手である。ホークアイの実の娘である。斧使いだった親とは違い、スナイパーとして弓を使っている。

「聞けばヘクトル殿の娘は理魔法を使うとか。これはリリーナ殿に預けようと思っています」

リリーナに神将器を持たせるという事は骸黒の民に狙われるという事にもなるのだが、フェレにいる以上は同じ事とマークは考える。

「アーリアルについてですが、まだエトルリアに保管されているようです。まだ骸黒の民に侵略されてもいないようです」

「そうか……ならば、この神将器を守らなければならぬな」

「デュランダルも手元に置いたほうがいいでしょう。神将器の封印の破り方も把握されているかもしれません」

千年もの間に、どんな研究がされていたかもわからない。常に最悪を想定する必要がある。それに手元があれば優秀な武器として、戦力として勘定に入れられるのだ。

「そうか……至急向かわせる」

「はい。では私はリリーナ殿の部屋に参りますので」

言い終えるとマークは一礼し、玉座の間から立ち去った。

「……ふう」

エリウッドはため息を一つ。無理もない。自らの体調が良くない上、ベルンや骸黒の民との戦いも先が見えない。目的が素性がわかっただけで、解決はいまだめどが立たないのだから。

「失礼します。エリウッド様」

と、突然城の兵士が玉座の間に入って来た。どうやら謁見を求める人がいるとの事なのだが。

「わかった、通してくれ」

了解を得ると、程なくして一人、玉座の間に入って来る者が。それはエリウッドにとって驚きの人物でもあった。

「エリウッド様。私はタニア城のティーナと申します」

マークは三人の娘が泊まっている部屋の前まで来ていた。

「失礼します。リリーナ殿はいらっしゃいますか？」

ノックをしつつ、告げると、解答はないものの足音がする。どうも扉を開けようとしているようだ。

大人しく待っていると、ほどなくして扉が開かれた。マークの目に入って来たのは、紫色の髪をした女性だった。しばし見つめ合い、沈黙する二人。最初に口を開いたのは女性――ルーテからだった。

「……ああ、この前の戦いで指揮をしていた人ですね。リリーナさんはちよつと外に出ています」

「そうですか。では、中で待たせていただいてもよろしいかな？」

マークの問い掛けに、ルーテは簡潔に答える。

「いいですよ」

「では、失礼します」

マークが中に入る。客室のため簡素だが質のよさそうなベッドが3つと、ソファアが目に入る。マークは取り敢えずソファアで待つことにした。

「……ふう」

マークは室内を見渡す。本棚や衣装棚があり、本棚の近くには木製の机があるが、それは今ルーテが書物を読むのに使っているようだ。マークには目もくれずに一心不乱に読みふけている。どうも手持ち無沙汰になったので、話し掛けてみることにした。

「ええと、君――」

「ルーテです」

「ああ、ルーテさん。見たところ君は賢者のようだけど、何処の出身だい？」

「ニノさんやリリーナさんからも聞かれました、それ。私はマギ・ヴァル大陸の出身ですよ」

「マギ・ヴァル大陸？聞いたことないね」

「でしょうね、私もエレブ大陸なんて知りませんでしたから」

「どうやらルーテはエレブ大陸の出ではないらしく、マギ・ヴァル大陸という所から来たらしい。見た目はエレブによくいる賢者そのものののだが。」

「でも、賢者なんですよね？」

「ええ。もつとも、私は光魔法も使えますよ」

「理魔法以外に、って事かい？それは凄いね」

「私、優秀ですから」

ルーテが聞きようによつては高飛車とも取れる発言をする。だが不思議と嫌味は感じない。すんなりと信じ込ませる説得力があった。その一端に、何を話しても無表情なのも影響していそうだが。

と、マークに一つの考えが浮かぶ。骸黒の民の事である。確かに素性はわかっているものの、使役していると思われる魔物には心当たりがない。

もしかすると、エレブ出身ではない異世界の人なら、あの者達を知っているかもしれない。

「ルーテさん、まだ聞きたい事が」

「――この城に攻めて来ていた魔物の事ですか？」

「……鋭いね」

「私、優秀ですから」

マークの上に行く思考速度でルーテは答えた。優秀と豪語するだけの実力は持ち合わせているようだ。

「じゃあ、聞かせてくれるかい？」

「はい。確かにあの魔物は、私の世界で見たものと同じでした。グール、ビグル、バール、スケルトンなど下級ですが」

話を聞くと、マギ・ヴァル大陸には魔王フォボスという存在がいて、それにより動きが活性化し、また発生すること。フォボスは倒されたそうだが、まだ魔物の残党は多く、ルーテはそれを退治していたそうだ。

この話を信じるとすれば、つまり骸黒の民は残党を意のままに操り、手駒として使っている事になる。人ではない以上情けをかける必要がないのはいいが、戦力の試算がしにくい。

（魔物、か）

異世界からの魔物と骸黒の民、そして始祖竜。問題は未だ解決の目途すら立たず、ただ山積みとなっていた。

リキアから少し離れたエトルリア。エトルリアは特に魔道が優れているとされ、アーリアルもこの国に封印されているのは触れた通りだ。

この国の一角、魔道軍将セシリアの屋敷に、異世界からの住人が二人、迷い込んでいた。「……ふう」

屋敷に門の前に立つ者が一人。西洋風の世界に、チャイナドレスを纏った女性だ。

彼女は紅魔館の門番、紅美鈴。ホン・メイリン 幻想郷融合後、エトルリアまで飛ばされていた。路頭に迷っているところをセシリアに助けられたというわけだ。

取り敢えず助けられた恩を返すと言う事で、門番をする事にした

のだが。

「暇ですねえ」

門番どころか、客らしい客すら来ない。それもそのはず。戦争がいつ始まるかもわからないのに歩き回りはしないだろう。

セシリアも屋敷から出ず、何かをしているようだ。たまに城に行き、情報を集めているそぶりも見えるが。

「パチュリー様もここで何か調べてるし……」

もう一人の来訪者は同じく紅魔館の動かない大図書館、パチュリー・ノーレッジである。美鈴は門の前、パチュリーは大図書館にいたのだが、揃ってエトルリアまで飛ばされていた。

（幻想郷に来る前も、この世界は見たことがない。何が起こったのか、調べる必要があるそうね）

パチュリーは美鈴にそう告げ、屋敷の蔵書を読みあさっている。

「しばらくは暇そうだなあ」

美鈴は一回、大きなあくびをした。

導かれし者達を探すマスタードラゴンは、ライアンの勤める城、

バトランドに向かって飛行を続けていた。残りはライアンとトルネコ、そして勇者であるソロである。

「このあたりにあるはずだが……」

天空城から下の世界を見渡した時に、確かにこの辺りにあったはずだと空から見下ろす。

「……む？」

と、バトランドは見つからなかったのだが、妙に目を引く城が見つかった。何か見たことがあるような、それでいて懐かしいような。しかしその感じに、何か違和感も感じるのだが。

マスタードラゴンはその違和感を調べるため、城のすぐ近くに舞い降りる。

そして、城を正面から覗き込んだ時、違和感が何だったのかすぐ

に理解した。そう、マスタードラゴンが見付けたその城は……天空城にうりふたつだったのだ。

しかし天空城は空に浮かび、別の場所にあるはず。これはいったい、どういう事なのか。

エンドレス・フロンティア。それは違う刻さえ混ざり合う世界。そう、ここにある城は、グレイス城。天空城の、過去の姿だった。

エンドレス・フロンティアとも、その他の世界とも違う世界。モノという概念がなく、魂だけが生きる世界。その色は黒そのもので、暗黒空間の様相を示している。

「フアフアフア……どうやらまた、呼ばれたようじゃな」

その空間で、二人の会話が行われていた。まず口を開いたのは、老齢のような口調だが若さが漲る女性の声。

「そのようだな。戦いの輪廻は、終わったはずではなかったのか？」
次に、渋い男性の声。今の自らの状況に、理解が追いついていないようだ。

「さあ？ 儂にはわからぬ。呼ばれた筈なのに、カオスの姿もない。それとも、呼ばれた訳ではないのか――」

混沌の神カオスと秩序の神コスモスの戦いが終末を迎えて久しい。互いに駒を使い行われた代理戦争は、二柱の消滅により幕を閉じ、呼ばれた存在は元の世界へ帰った。

先に話した女性は暗闇の雲。三番目に呼ばれた存在で、対となるのはオニオンナイト。最後はそのオニオンナイトにより打倒されている。

男の方は暗黒魔導師エクスデス。五番目と呼ばれた存在で、対となるのはバツ。これも同じくバツに打倒されている。

「ここは、虚無の世界か？」

「何も見えぬという事はそういうことじゃな。……ここから出ぬ、
というのもいいが……」

両者とも、闇や無を望む者。この世界はさぞかし居心地がよいこ
とだろう。

「そういうわけにはいくまい」

だが、この場所に留まるというのはやはり出来ないようだ。自分
の置かれた立場もわからないのだ。そのままでは据わりが悪
い。

「では、儂が穴を開けよう」

暗闇の雲が何かをする。身体があれば、手を掲げるイメージだろ
うか。すると黒一色であった空間に、真っ白な空間ができる。

「先に行っておるぞ」

そして暗闇の雲の魂がそこを抜け、外の世界へと抜けていく。そ
れを確認したエクステスもそこから抜け出ていった。

異邦の女性

(……薄暗い所ですねー)

エレンディアの射命丸は、結局魔城ラクリマに来ていた。あの時目覚めた男はエクセルと言う名前で、記憶を殆ど失っていた。今まで寝たきりだったエクセルが目覚めたという事でその場は丸くおさまったのだが、エクセルが落ち着いた時問題が再燃。色々あり、今はエクセル、フィア、ルウリ、射命丸の四人で城を探索しているところだ。

(ここもカメラに残しておきたい所ですが)

彼女がカメラを使う時は、殆どが新聞のネタにするためである。この場合も例外ではなく、エレンディア、そしてゆくゆくは他の世界にも発行するためのものだ。彼女はそんな野望を持っていた。

だが、今の状況はそれを許さない。薄暗い場所では、フラッシュを焚いて撮影をする必要があるのだが、それは非常に目立つのだ。目立つ事の問題とは、一つ。

魔物に、こちらの居場所が筒抜けになる事だ。実は城に入る前に入った後で数回、魔物に襲われているのだ。来る前の段階で、魔物がいる事はある程度予想されていたが、実際に来てみると、思ったより気配が色濃い。

というわけで、四人は周囲に細心の注意を払いつつ探索しているわけだ。そのため思うように進んでいない。救いは、魔物が弱めだという事ぐらいか。

四人が螺旋状の階段を登っていると、微かにだが金属がぶつかるような音が聞こえた。

「エクセル！今、何か聞こえなかった？」

四人の中で一番騒がしいルウリがまず反応する。先程はルウリの粗相であわや魔物に見つかるどころであった。

「金属がぶつかる音？」

「そうそう！それも、ぶつかり合ってるみたいな音だったよ！」

いままでは聞こえて来なかった類の音だ。それも、金属が壁にぶつかって偶然音が鳴った、という感じではない。金属同士がかち合っ

って鳴った、といった風だ。

「先に進んでみましょう。音の原因がわかるかもしれませんよ」

四人は魔城の奥へゆつくりと進んでいった。

「ここがトゥスクルの都です」

尻尾を生やした女性が、笑顔とともにそう告げた。トルネコや輝夜と一緒に旅をしていた人である。

前の村から出て、数日。二人はトゥスクルの都に到着していた。まず一目見た感想では、文化レベルが決して高いとは言えないものの、栄えているという印象を受ける。

前の村もそうだったが、まず人の活気が違う。だれもかれも希望に満ちた顔だ。これだけで、この国の為政者が優秀ということがわかる。

道は広く作られており、トルネコ達が馬車で入って来ているのにまだスペースに余裕がある。トルネコの他にも、馬車で中に入っている商人も多い。

「エルルウ、どこに行きたいの？」

輝夜が話し始める。乗せていく、という話が決まっていない段階では互いの名前すら知らない間柄であったが、今は輝夜、エルルウの間では呼び捨ての仲になっていた。馬車という閉鎖された空間の中で女性二人という環境もそれを後押ししていた。

「私はここまでもいいんだけど……ああ、そういえば武器を売り込みに来たんだっけ」

エルルウは少し考えて、輝夜に皇居まで行ってほしいと告げる。都に来た目的は違うが、目的地は同じなのだ。ならば、特に遠慮する必要もないだろう。

輝夜からトルネコに希望が伝わると、止まっていた馬車が動きだし、数分としないうちに皇居の手前まで来ることができた。

トウスクルという国は、つい最近まで戦が絶えない国として認識されていたが、世界全体を巻き込んだ戦の後は平和な国として周辺に認識されていた。そのため、城下町や周りの村はのびのびと暮らす人達ばかりである。

この皇居も、有事の備えとして砦のように作られているが、今は何も起こっていないのだから平穏なムードであるはずだ。

だが、見えないところで少しずつ崩壊が始まっているようにも感じられた。

しかし、それも微々たるもの。三人は知るよしもなく、門の衛兵に武器を売り込みにきたと話す。

「武器ですか……少々お待ちを」

トルネコの話に、衛兵は自分では決められないといい、皇居の中に入っていた。門の衛兵は二人いる上、上から見渡せる櫓にも衛兵がいるので、無用心というわけではない。

「エルルウ、ここには詳しいの？」

こことは、むろん皇居そのものを示している。薬師であるエルルウだから、ここにも薬を卸しているということだろうか。

「まあ、詳しい方だと思うけど……」

と、エルルウの話し始めると、特に感情の読み取れなかった衛兵達が色めき立つ。その顔から読み取れるのは、明らかに動揺だ。

その動揺を隠しきれず、衛兵がトルネコに話し掛けてきた。

「失礼ですが……馬車の中を拝見しても？」

皇と会見するのだから、遅かれ早かれ馬車の中は改められるだろう。断る理由もないので、トルネコは快く了承する。

衛兵が馬車の扉を開けると、輝夜とエルルウが何か会話している様子が目に入ってきた。

「あら、兵士さん、何かご用かしら？」

こちらを見ている兵士に輝夜が気が付き、話し掛けてみるも、反

応は返ってこない。どうもエルルウの方を見ているようなのだが。

「まあ、バレずに中に入れるとは思ってなかったけど……」

エルルウが小さく呟くと、輝夜が寄り添って耳打ちをする。

「どういう事？　なんか変な事でもした？」

「変な事って……別にそういうわけじゃなくて、実は」

いままで言う必要がなかったので、自分の素性を明かしていなかったエルルウ。だが、こんな事になればもう言ってしまうしかないだろう。エルルウは輝夜に耳打ちをして、自分の事を話す事にした。余計な事は言わず、あくまで必要な事だけを伝える。

「……前皇の……家族？」

エルルウから伝えられたのは、自分が先代の皇の家族であるという事だった。それはつまり、彼女が皇族の一人である、という事なのだが。

衛兵達の表情を見るに、どうやらハツタリではなさそうだ。……ということは、今の状況はあまりいいものではなさそうだ。

皇の家族ということはそれだけで位が高い。そんな人が、外から来た得体の知れない商人の馬車に乗っている――。疑いをかけられても仕方ない状況だ。

まあ、エルルウの様子は普通なので、事件に発展するように捉えられるような事はおそらく無いだろうが。

「ってことは、家に帰って来たようなもの？」

「そうね。あの時は少し遠出の患者さんがいたから」

エルルウは希代の薬師である祖母トウスクルに師事した一人である。その高名さは国の名前になっているほどだ。そのトウスクルも亡くなってしまった為、重い患者はエルルウが看るしかなく、しばしば遠出をすることもあるのだ。

「じゃあここで別れて、自分だけ家に帰ってもいいのよ？」

「うーん……」

エルルウが悩んでいると、先程奥に入っていた衛兵が戻ってきて、トルネコに話し掛ける。

「お待たせしました。許可が降りましたので、そのまま奥にお進みください」

「わかりました、ありがとうございます」

簡潔なやり取りを済ませると、トルネコは馬車を皇居の敷地内に進ませる。

「あ……」

そうなればもちろん、馬車の中に入っているエルルウも衛兵たちから離れていくわけで。馬車の中の仲のいい会話に呆氣にとられたのだろうか、それを止める事が出来なかった。

呆けた様子を、戻ってきた衛兵が怪訝に思い、問い掛ける。

「そんな顔してどうした？俺がいない間、何かおかしい事でもあったのか？」

「いや、それが……あの馬車の中にエルルウ様が」

その言葉を聞いても、彼はあまり驚かないようだ。

「取り押さえなかったのか？」

「いや、談笑しておられたから、その必要はないと思ったんだが」

「ならいいんじゃないか？もしかしたらついでに乗せて来てもらっただけかもしれないしな」

「俺もそんな気楽な考え方が出来るようになればいいんだが……」
大物かと思いきや、どうやらただ単に楽家なだけのようにだった。

「旅の武器商人一行が来た、とだけ聞いていましたが一」

トゥスクル国の代理の皇である侍大将、ベナウイが謁見を望んだ商人を見る。いや、正確には輝夜の横に座ったエルルウを、だ。

敷地内の適当なところに馬車を止め、歩いて中に入ってきた三人もちろん視界を遮るようなものは何もないので、来る途中にも衛兵が振り返ったりした。

エルルウのような人が何の前触れもなく、それも帰っていると情報もなく歩いているということは本来有り得ないことなのだ。

「あなたがここにいるとは……どういことですか？」

「それはその……成り行きで」

今の事態を理解できないトルネコだけが頭に？を浮かべている。

そんな様子に輝夜は笑いを堪えられないようだ。

「……また後で話を聞きましょう、エルルウ殿」

「……はい」

エルルウは視線を下に下げ、しょんぼりとしてしまった。ベナウイの説教はその人柄からして、かなり厳しいものだからだ。前皇が座していた時は小言をかなりのペースでぶつけていた。

「……さて、お待たせしました。なんでも、武器を売りにきたと兵から聞いています」

「はい。私は武器商人のトルネコと申します。寄った村で、この事を聞きました。是非にと思い参りました」

「そうですか。残念ですが、今武器は必要ありません。大きい戦も終わり、復興を優先とする時期なのです」

列島全土を巻き込んだ戦争は、いくつかの国が消滅しつつも終結したが、戦禍は未だ色濃く残っている。トウスクルは最後に攻められた国であるため、爪痕は少ないが、壊滅した国から難民が流れ着く事も少なくない。食糧面から言っても、全ての民を受け入れるのは不可能。ならば、まだ体力のあるトウスクルが独立の手助けをすることもまた、必要だ。

もちろん、武器など戦の備えが必要ないわけではない。ただ単に、トウスクルお抱えの商人であるチキナロからの仕入れで充分である、というだけだ。

「申し訳ないですが、お帰り……いえ」

「……どうしました？」

「商人と言うからには、世界を旅しているのでしょうか。世界を襲った地震の後、見たことのない世界が回りに広がっていました。私は、世界の情報が欲しいのです」

見たことのない世界がある、という事は知っているベナウイだっ

だが、ならば実際にどんな世界なのか、という事は全く知らないに等しい。それは彼が調査を怠っていたわけではない。調査に向かわせた兵が運悪く異行の者に襲われ、一人を残し壊滅した経緯があるからだ。

兵も無限にあるわけではない。戦に勝った国とはいえ、トゥスクルは根本的に小国なのだ。全体的に人手不足で、調査に人員を割けない、と言うのが本音である。

そこに外の事を良く知るであろう旅の商人が来訪したのだ。武器を買うのは遠慮するにしても、豊富に入手しているのであろう情報は惜しい。

トルネコも願ってもない話だ。武器を買ってもらえないのは残念で済ませるとして、今まで見て来た事を話すだけで金に還元出来るのだから。

「その話、お受けいたします」

「そうですか。ですがここでは聞きにくい。客間に案内しましょう」
ベナウィが袖の方に消えると、トルネコ近くの兵士が話しかけて来て、客間へ促す。トルネコと輝夜は言われるまま客間へ移動することに。

「エルルウはどうするの？」

輝夜が聞くと、エルルウは後で行く、とだけ言い残して二人とは別の道へ進んでいった。程なくして、客間に着く。最低限の家具しか置かれていないが、素材の良さはなんとなく感じられた。

「直に皇が参られますので、少々お待ちください」

兵はそう言い残し、その場から去っていった。とりあえず座って待っていると、ほんの数分ほどでベナウィが客間へ入って来た。

「お待たせしました……おや、エルルウ殿は？」

「後で行く、って言ってたけど」

「そうでしたか……では、早速」

ベナウィが座り、話を始めようとしたとき、もう一人部屋に入ってくる人が。そう、エルルウである。手にはお盆が乗っており、お

盆の上の湯飲み茶碗からは湯気は殆ど無い。丁寧にいれられた事の印だ。

「お待たせしました。ここまで乗せて頂いた、せめてものお礼です」
「これはどうも、エルルウさん。では、失礼して……おお！これは中々のお点前で」

「ふーん、エルルウって家事が得意なのね」
出された茶を二人が飲むと、期待通りに美味であった。こうして一息ついたあと、会話は再開された。

情報を提供するという名目ではあるが、特に堅苦しい雰囲気もなく、和やかなムードで会話は進んでいた。そして気が付けば、辺りが暗くなってきた。

「暗くなってきたわね」

「む、そうですね……他に、何かありますか？」

輝夜に言われ、外の様子に気がついたトルネコは、ベナウイに問い掛ける。まだ聞き足りない様子ではあったが、流石に日が傾いてきているのでは仕方ない。

「まだ聞き足りない所ですが……仕方ありません。今日はここまでとしましょう……エルルウ殿」

「はい」

ベナウイに促され、エルルウが立ち上がる。いったい何をするのかと待ち構えていると。

「トルネコさん、輝夜……お二人はもう、この国のお客様です。どうぞ泊まっていくてください」

エルルウから申し出が。お礼の一関でもあるだろうが、二人を客人と認め、皇居に泊まっていくと云うのだ。

「あらそう？じゃあ、泊まっていこうかしら。ねえ、トルネコ？」

この申し出はまさに皇の意志。すなわちこれを断るとするのは無下にするということだ。輝夜にはそれがよくわかっていた。

「え？ああ、そうですね。では、お言葉に甘えとしましょうか」

二人は立ち上がり、エルルウの案内を受ける。

「ふう……」

それを見届けたベナウイは一つため息をついた。彼といえども、少しは話し疲れたようだ。まあ、有益な情報を仕入れる事が出来たのだから、むしろ心地よいだろうが。

「それにしても……」

この世界は、思った以上に大変な世界のようにです。ベナウイはそう呟き、公務へ戻るのだった。

今より遙か昔の聖王の時代に生まれ、今でも生き続ける者がいる。人のような外見ではあるが、明らかに人とは違う存在。人の血を吸い生きる事から、吸血鬼と呼ばれるようになる。そのような生物は忌み嫌われ、退治されたりするものだが、聖王と盟友であったことから、殆どの民から慕われる存在となっていた。嫌う者ももちろん存在していたが。

人である聖王が死んだ後も、寿命の違う吸血鬼は生き続け、現在は寒い地域の中でも比較的暖かいポドールイに城を構え、日々を過ごしていた。ポドールイには吸血鬼に血を吸われると永遠の美を得る、という言い伝えから、美女が多く住んでいる。最も吸血鬼に血を吸われるということは人を捨てるという事であり、それに拒否感を覚えるものもいた。

それでも女性には永遠の美貌を求め、吸血鬼に血を吸われに城へ赴くのであった。そしてまた一人、ポドールイに女性が現れる。美貌を得るため、この町にやってきたのかと思えば、どうやら事情が違ふようだ。

「……うう」

どうやら、かなり憔悴している様子だ。また、ドレスのようなものを着ているが、酷く汚れが付着し、破れている部分もある。また

靴もボロボロの壊れかけで、非常に歩きにくそうである。事実、足を上げる方法ではなく、すり足で歩いている。

これらの要素を考えれば、彼女が何かに巻き込まれ、仕方なくポドールイに立ち寄った事がわかるだろう。容姿も磨けば美しくなることは予想できるが、今は汚れでみすばらしい。

「だれ……か……」

そして小さい口から助けを求める声をわずかに漏らした後、集中力が切れたのかそのまま倒れ伏してしまった。町の中とはいえ、入口付近だ。そのまま誰にも見つからない可能性は十分ありえた。しかし、運命というものはそこまで残酷ではないようだ。

「……あら？」

倒れてすぐに、女性を通り掛かる。カチューシャ、エプロンドレスを身につけた、いわゆるメイドと呼ばれる外見の人だ。行き倒れの女性を見付けると、ゆっくりとその近くまで歩いてくる。

「行き倒れみたいね。どうしようかしら」

どうしたものかと考える。普通の人ならここで慌てて助けを呼んだりする所だが、彼女の場合は違っていた。それどころか、このまま置き去りにしていくことまで考慮しているようだ。

しばらくそのまま考えていると、その場に第三の人物が現れた。女性と言うよりは女の子という風貌で、頭にナイトキャップのようなものを被り、背中には蝙蝠の羽が生えている。装飾の一種だろうか？

「何をしているの、咲夜」

どうやら先に居合わせた女性と知り合いのようだ。そして呼び捨てと来れば、かなり親しい仲だと伺える。さしずめ、お嬢様とその従者、といったところか。

「お嬢様ですか。いえ、これをどうしようかと思ひまして」

メイドの咲夜が行き倒れた女性を指さす。

「あら、行き倒れ？ ちょうどいいわ。そろそろタダで居候するのも、面子が許さなくなってきたころだし」

「では、あの男にくれてやる、と？」

「そうよ。さあ咲夜、運びなさい」

どうやら助けてやる事に決まったようだ。別の目的があるとはいえ、だが。何はともあれ、二人は帰路につく。が、どうも様子がおかしい。二人はポドールイを離れ、山を登っているのだ。民家からはどんどん離れていく。そして、その先にあったものは――。

化物の住家である、吸血鬼の館だった。

「レオニード、帰ったわよ」

館の前まで来ると、蝙蝠の少女が叫んだ。すると、いかにも扉が、ひとりでに動き出し……二人を招き入れるように、開け放たれた。二人にとっては日常風景なのだろう。さして気に止めるでもなく、そのまま中に入っていく。

館の中は、流石吸血鬼が棲むと評判だけあって、全体的に暗い色調になっている。そしてそれだけではなく、明かり自体も少なく、結果としてそこにいるだけで陰鬱となりそうな雰囲気醸し出している。

そして、この館を治める吸血鬼が。

「ポドールイは如何でしたか？」

門に入って真っ直ぐの玉座に鎮座する、レオニードである。その容姿はいるだけで女性を魅了する。身につけるローブは宵闇のように黒く、彼の神秘性を際立たせる。

「何もない町だったわ。これなら地下で化物狩りをしていた方が良かったわね」

レオニードからの問いに、蝙蝠の少女はふてぶてしく答える。口調も吸血鬼を相手にしているとは思えないほど横柄だ。そしてその態度には、当然ながら理由がある。

この蝙蝠の少女、名をレミリア・スカーレットと言うのだが、彼女自身もその実、吸血鬼なのである。彼女は今この場にいる従者、十六夜咲夜を始めとした複数の種族で紅魔館という館で暮らしていたのだが、融合の影響で館の近くへ飛ばされてきた。

「あまり暴れられると地下の魔物がいなくなってしまうのでやめてほしい所ですが……まあ、それは置いておきましょう。ところで、そのメイドが背負っているのは何です？」

レオニードが咲夜の背中 of 女性に気が付き、問い掛けてくる。

「町の入口に倒れてたのよ。結構な美人みたいだから、あなたにくれてやろうと思って」

レミリアが答えると、咲夜がレオニードの前にその女性を置く。

「行き倒れですか。取り敢えず手当をさせましょう」

レオニードが目配せをすると、どこからともなく蝙蝠が飛来し、女性の体を包んでいく。完全に覆い隠されると、蝙蝠ごと消え失せてしまった。

「そういえば、フランはどうしてるのかしら？」

紅魔館に住んでいて、かつ今この館に来ているのはレミリア、咲夜、そして今話に上がったフランドール・スカーレット。レミリアの妹で、少々気がふれている。

「どうもこうも。地下のポイズンギアンとじゃれています」

フランにとってじゃれるとは、手加減の出来ないフランでは殺し合いと同義である。地下のアンデッドと、ずっと闘っている、ということだ。

「そう。じゃあ私も行こうかしら」

レミリアはそれを聞くと自分も暇潰しをするため、地下へ降りていった。

「まったく、血気盛んなお嬢様方だ」

レオニードは二人の様子に少々呆れ顔のようだ。

「……では、私も自分の職務を果たします」

咲夜が言い終わると、一瞬で姿が掻き消える。

「……時を操る能力、か」

十六夜咲夜は、時を操る能力を持つ。時を停止し自分だけ動くだけに飽き足らず、対象物の時を加速させることもできるらしい。

二人の女性が消え、静かになった館のロビー。やがて、レオニード

ドも静かに姿を消していた。

「誰が私を呼んだかと思えば……貴様！何の用だ！」

「おやおや、随分とお怒りのようだ、ヴァルキュリア様」

レナスⅡヴァルキュリアは、自らを呼ぶ強力な思念を感じ、近く
の小屋へ降り立った。すでに人は住んでおらず、打ち捨てられた小
屋だ。そこで誰が呼んだか探っていたところ、一人の男が現れた。

レザード。ヴァルキュリアに執着する男である。彼はレナスの身
体を複製し、魂を抜き取ろうとし、レナスを自分のものにしようと
していた。まあ身体の複製自体は後々役には立ったのだが。

「貴様には恩がある。だが、こうして出会ってしまえば別だ！今す
ぐに、冥府へと送って——」

「ふふ。今それをして、無駄なことだとあなたは知っているはず
だ」

「なにっ!？」

「今この世界をにぎわせている話があります。死んだものが、生き
返っている」と

死んだものが生き返っている。それは紛れもない事実。だが、そ
れがあるからといってその意味を理解していなければ、殺しても無
駄だとは言い切れないはずだ。

「殺したものが生き返る。それは、冥府とこの世界の境界が開いた
ままになっているということですね？」

「……」

「沈黙しても無駄です。賢者の石の知識が、私にそれを教えてくれ
ています。そして、その原因も」

「……何だと？原因を掴んでいるというのか」

レナスの態度が多少和らぐ。情報があるのなら、なんとかして聞
き出さなければ。気に食わない奴ではあるが、感情は後回しにする。
そんな結論がレナスの中でされたのだが。

「では、私の物になっていただけますね？」

「……」

レナスはうなだれてしまった。いや、呆れたと言うべきか。こんな事が飲めるわけはないではないか。

「仕方あるまい。今ここで冥府に送ってやろう」

交渉は決裂した。まあ、交渉の段階にすら至っていないが。

「強情なお方だ。では私はこれで失礼します」

レナスが剣を構えると同時に、レザードが移送方陣を作りだし、その中へ消えていく。

「……とんだ無駄足だったな」

レナスは剣を納めると、そのまま空へ飛び立つ。

（では、ヒントをお教えしましょう）

が、突然レナスの頭の中にレザードの声が響く。どうやら何か教えてくれるらしい。

「下らぬ事なら、今度こそ滅する」

（ははは。そんなにいきり立っても無駄ですよ。しかるべき処置をするまではね）

「能書きはいいい」

（せっかちですね。では簡潔にお教えしましょう。この世界のどこかに巣くう、アインストについて）

白皇

数多くある異世界の中で、アビスと呼ばれる空間がある。深淵という名を持つその世界は、アビスゲートを経由する事でしか行き来する事ができない。この世界には、かつて世界が魔王に統治された時代、側に控えていた魔族である四魔貴族が棲んでいる。

そして今、アビスは危ういバランスで空間としての存在を維持している。いや、維持させている。そのバランスを崩した原因とは、いったい何なのか。

まず一つが、他ならぬ世界融合現象。次々と違う世界がくっついていく事は、たやすくバランスを崩してしまう。

そして、四魔貴族の住家であるはずの空間に、七英雄の本体が転移してきたこと。冥府との境界が崩れ、消えたはずの本体がアビスにまで来ていたのだ。その上七英雄は、自前でアビスゲートを作り出す事ができる。

さらに、博麗大結界の崩壊に巻き込まれたこと。幻想郷を包む大きな結界が破れ、崩れていく中でアビスが隣り合わせていたわけだ。巨大な力が散っていくのにつられ、さらにバランスが崩れたわけだ。そして最後に、スキマ妖怪の八雲紫がアビスに来てしまったことだ。彼女は境界を操る能力を持ち、強力な力を身に宿す。さらに境界を維持しようとした影響で力がだだ漏れになり、アビスに干渉してしまったわけだ。

そして紫が来たことにより、アビスで何かに囚われていた運命の子が束縛から逃れ、力が放出される。それがダメ押しとなり、境界が崩れていくのみとなる。

しかしそのような状況にあっても、アビスは現状を保っていた。それは何故か。

そう、八雲紫が力を使い、境界を維持しているのだ。

「この女、中々しぶといわね」

四魔貴族のひとり、ビューネイが呟く。四魔貴族は本来アビスの中のそれぞれ違う空間の奥に控えているのだが、今はビューネイだけがアビスの入口とも言えるべき場所に来ていた。ただ単に奥から出て来ていない、と言うのもあるが四魔貴族それぞれの力が強すぎるため、反発しあうのであまり同じ場所にいることはない。

「……この虫ケラ」

ビューネイが紫に向かってカマイタチを引き起こす。

「紫様に手を出すな！」

しかしそのカマイタチは殆どが消滅させられる。紫とともにアビスへ来た、八雲藍によるものだ。消滅しきらない風の刃は紫の肌を切り裂き、血が滲む。

「……フン、素直に死んでおけばいいものを」

その様子に、面白くなさそうなビューネイだが、再び行動はしない。所詮は暇潰し、本気になることもないと思っただろうか。

「無駄なことをするのね。どうせ世界なんて、滅んでしまうのに」
今の言葉は運命の子の片割れである、サラのものだ。その表情は暗く、希望のひとかけらも見いだせない。

その言葉に反応したのは紫だった。

「世界を護ろうなどと思わない。幻想郷が崩れた今、護りたい世界などありはしない。ただ、私は——幻想郷の証を護りたいだけ」

いつも見せていた余裕はなりを潜め、真剣な表情で言い放つ。彼女が護りたい幻想郷の証とは、いったい何なのか。それは、アビスと幻想郷が隣り合い、結界の崩壊の影響を受けるほど近い位置にあったことから予想はつけられる。

そう。アビスの隣には、博麗神社があるのだ。それも、アビスのバランスが崩れれば一瞬で飲み込まれるほどの。巫女はどこかに消えてしまったようだが、神社は幻想郷の象徴と言ってもいい存在だ。それが無くなる、すなわち幻想郷が幻想となってしまう。すべてを受け入れるとしても、紫はそれだけは受け入れるわけにはいかなかったのだ。

しかし紫の力も無限ではない。藍のサポートがあれど、永遠に維持する事は敵わないだろう。だが、ここにいる三人では事態を開き出すことも出来ない。

つまり、外からの助けを待つしかないのだ。絶望的とも言える条件。だが、それを待つ事のできる時間は刻一刻と少なくなっていく。終わりの見えない絶望だけがそこには存在していた。

（インフェルノス、ねえ）

魔城から帰ってきた射命丸は、そこで起こった事を思い返していた。結局アーク族は一人を残し全員が魂を奪われてしまっていた。死んだわけではない、という点では収穫ではあるが、奪った奴がまた問題で。

結局倒す事も出来ず、魂はまんまと持ち去られてしまった。その際、アーク族の生き残りであるセレネが一行に加わっている。

そして奥に進んだ一行を待っていたのは、魔族とウルスラと名乗る存在。そしてエクセルの素性が判明し、さらにはリヴィエラを襲おうとしている災厄をも耳にした。

ゴートの七賢であるヘクターが神罰というものを用い、リヴィエラを浄化しようというのだ。浄化とはすなわち、破壊。更地にしてしまおうというのだ。その理由が、活性化した魔物から神界を守るためだという。

（正直、仮にも神と並び証される存在といざこざは起こしたくないんですよね）

鴉天狗である射命丸は、長いものには巻かれ、自分より下の立場にはなめてかかる体質がある。ただし、取材関係のものには上辺だけでも丁寧に接していた。今回の丁寧さも泊めてもらっているからというのもあるが、取材のためのはずだ。

（しかし……なんでしょうか、この焦燥感は）

が、射命丸を悩ませるのは間違いなく良心の呵責や、彼女たちへ

の親愛だった。このまま逃げて、私は納得出来るのか……そんな事は
ばかりが、胸中に浮かぶ。

「ふう……この際、うだうだ考えるのもやめにしましょう」
悩んでいるようなそぶりは見せたが、その実射命丸の考えは決ま
っていた。一度突っ込んでしまったのなら、最後まで行つてやろう
と。

それに、恰好の取材対象である事に変わりはないのだ。そう結論
付け、射命丸はエクセル達の元へ歩を進めるのだった。

王が座るはずの玉座。そこは今、おびただしい血だまりが存在す
るのみとなっていた。

「グランⅡセンチュリオ……ここまで強くなるとは」

口を開くのは、ローブで全身を包む者。とはいえ、顔の部分は確
認できるほどしっかり空いている。左手には血の付着したグランⅡ
センチュリオを携え、散乱する血を嫌うかのように宙に浮いている。
「あ、うう……」

そして血が流れ出す中心は、玉座のすぐ下に倒れるユグドラだっ
た。どうやら、鎮座している時に斬られたと思われる。

「人の身でありながら、ここまで剣の力を高めるとは、流石は《覇
王》だな」

「全て……貴方が……」

倒れ伏すユグドラは知る。剣が部屋に降臨したのは、目の前の男
が仕組んだ罠であった事を。自らの手を汚さず、時間も無駄にしな
いための策だったことを。

「しかしこの人間が生きていたのは今の時代より昔だった筈だが……
力が手に入ったのだから、よしとしよう」

そしてその策を仕組んだ男は、天界の権威である事を知る。

「ヘクター様……済みましたか」

その男の名はヘクター。ゴートの七賢でありながら、頑なに力を

求める者。そして声をかけた金髪の女性が、マリス。ヘクターの命令に従う、告死天使である。告死天使とは、神に代わって死を告げるもの。そのため、忠実でなければならない。

「ああ、済んだ。全く、告死天使を一度に二人失った時は驚いたが、この剣で元は取れる」

神のいない今、ヘクターは神と同然の権力を持つ。彼は告死天使を三人用いてリヴィエラに眠る物を求めていた。しかし尖兵となる告死天使の中で、エクセルとレダが行方知れずとなってしまうた。今使えるのはマリスのみである。

「魂は集めました。次はどうされますか？」

「ユグドラル領域に至る道を探せ。そこに目的がある」

「……はっ」

ヘクターが命を与えると、マリスはすぐにその場を立ち去った。

「もうすぐだ。もうすぐ、破壊神の力が我が物になる」

ヘクターは邪悪な笑みを浮かべながら、掻き消える。残されたのは、血を流して余命いくばくも無いように見えるユグドラのみ。

（くやしい）

薄れていく意識の中、思うのは王国のこと。帝国を打倒し、復興も成って来た所で乱心による、完全なる荒廃。王国以外はほぼ焦土と化し、王国も人心は荒みきっている。剣に惑わされた自分が憎く、悔しい気持ちばかりが沸いて来る。

そして同時に、その原因を作ったヘクターに、堪えようもない怒りが沸いて来る。結局のところ、剣を握らなければこのような事態にはならなかったのだ。怒りは次第に、憎しみへと姿を変え。

——悪魔のような微笑みが、空間に浮かんで消えた。そしてユグドラは、完全に意識を手放す。

そして、それから数分。城の中に入り込んでくる者達がいた。

「ミラノ！こっちだよ！」

先頭を走るのは、グリフ（グリフォン）ライダーのキリエ。先の戦いの犠牲者だが、境界線の歪みにより甦った女性だ。キリエに導

かれ、中に入り込んでくるのはミラノ、デュラン、ラッセルなど、王国軍で活躍した者達だ。

もちろん、無策で城へ侵入したわけではない。グリフライダーであるキリエが城を偵察していたところ、ある時を境に兵士達がいなくなってしまうのだ。掻き消えるようになってしまったため、罠とも考えにくかった。勿論罠の可能性もあったが。

そして攻め入ってみると、城にも誰もいない。気配を探ってみても、微塵も察知できない。それならばと一気に玉座まで来たのだが、この場合それが幸いだった。

かくしてユグドラは、どうにか命を拾うことが出来たのである。

トウスクルは、まだ人も起ききらない朝だと言うのに俄かに慌ただしい雰囲気に包まれていた。そこら中でバタバタと音が立っている。その雰囲気に、眠っていた輝夜が目覚めます。

「うるさいわねー、何なの一体」

寝ぼけ眼をこすりながら戸を開け辺りを見回すと、廊下を慌ただしく走る兵士の姿をいくつも見かける。他国が侵略してきたのかとも思ったが、どうも違うようだ。

「ここで予想してても仕方ないか」

輝夜は騒ぎの原因を見に行く事にした。ちなみにトルネコは、この騒ぎの中でも熟睡していた。

輝夜は少し歩き、自分達が昨日入って来た門の側まで来た。そこには、見渡す限りの人。殆どトウスクルの兵士のようだが。注目を集めているのは一人の男というのを見た感じでは伺える。服装は、似たような服をトウスクルの村で見た。つまりこのあたりの人間だろう。容姿は端麗。誰に聞いてもかっこいい、ハンサムなどの感想が出るに違いない。

その男性の目の前に、輝夜のよく知る女性が立っていた。見た限りでは瞳に涙が浮かんでいるように見える女性は、エルルウだった。（これは……感動の再会って奴かしら。それとも痴情の纏れとか？）輝夜が勝手な想像をしながら固唾を吞んで見守っていると、エルルウがゆつくりと確かめるように話し始めた。

「まさかこんなに早く、また会えるなんて思ってたんですけど」
（ふーん、どうやら知り合いみたいね）

エルルウは再会を喜んでいるような口ぶりだった。しかし輝夜から見て、彼女の表情は素直に喜んでいるようには見えず、むしろ複雑な感情に苛まれているように見えた。

「おかしいですね。せっかくまた会えたのに、なんていうか理解が追い付いてないというか」

この再会は間違いなく望んでいたこと。それは変えようもない。だが同時に、ありえないとも感じられた。あまりにも早過ぎる。そして何よりも違和感があるのは、始めて素顔を見たこと。今まではもの一枚挟んでの顔しか見たことがなかった。

「もちろん嬉しいんですよ？でも、あまりに突然で……」

もはやエルルウ自身にも、何を言っているのかわかっていないだろう。それぐらい彼女は周りから見て混乱していた。

——だがしかし。その混乱も、帰って来たらしい男が一言発しただけで、おさまってしまった。

「ただいま、エルルウ」

エルルウはその言葉に驚くほど敏感に反応し、数瞬ののち、笑顔を浮かべ応えた。

「おかえりなさい、ハクオロさん」

その言葉で緊張の糸が切れたのか、弾かれたようにハクオロの胸に飛び込み、抱き合う。

彼の名はハクオロ。かつて死の淵の願いがウィツアルネミテアに聞き届けられ、以後その依代として生き続けてきた。ウィツアルネミテアに憑かれていた時には顔に仮面を付けていたが、今は見当た

らない。ということは、ついに依代としての任を終えたというわけだ。

二人が抱き合ってからしばらくして、どたどたと建物を走り回る音が聞こえる。こちらに向かってきているようだ。やがて見えて来たのは、エルルウの身につける服に似た服を着る、エルルウよりも一回りは小さい女の子。悪戯好きの子供と言った感じが。

「……おとーさん！」

そう、エルルウの妹であるアルルウだ。二人とも、ハクオロにとって大事な存在。そしてそれ以上にハクオロは二人にとって大事な存在なのだ。

「おとーさん、おとーさん、おとーさん！」

すでに涙声となりながらも、ハクオロを呼び続け、人の波を書き分けハクオロの元へ。そしてエルルウと同じようにハクオロに抱き着くと、涙をこすりつけるかのように顔を擦り付けた。

「うーん、何か騒がしいですね」

そんな感動的な光景の中まったく空気を読まず、ようやく起きて来たトルネコが寝ぼけながらそんな事を口走る。

「トルネコ、起きるの遅すぎよ」

そんなトルネコに輝夜は文句をぶつけるのだった。

怪物

ハクオロ帰還後しばらくして、自然と周りの騒ぎもおさまり始めていた。城下町等はいまだに熱を持っているものの、少しずついつもの日常に戻りつつあった。兵士の面前でハクオロに抱き着いた姉妹も、片方は気恥ずかしさを取り戻し離れ、片方は落ち着いたところをやりわりと引きはがされ今は普通の状態だ。

皇が帰ってきた喜びの現れとはいえ、ここは外である。いつまでも外で話しているというわけにもいかないので、中に入り落ち着いて話を始める事にした。向かったのは、トルネコ達とベナウイが話し合ったあの部屋。この部屋にハクオロとエルルウ、アルルウ、ベナウイに騎馬部隊の長クロウト、トウスクルを支え続けた人物が集い、そして何故かトルネコと輝夜までもが集められた。

「今トウスクルにいる人は全員揃いました」

エルルウがハクオロに告げる。

「オボロの奴も、こんな事になるのが判ってたら旅に出なかったんでしょうがね」

ケナシコウルペ（トウスクルの前身）を共に打倒し、かつ正当後継者としての血を継ぐハクオロの義兄弟オボロは、妹であるユズハの死後、ユズハの忘れ形見である子連れ、オボロに仕え続けたドリイとグラアと共に旅に出ている。

「いないのなら、仕方がないさ。私の方からも、ここに来るまでに見て来た世界の事をその商人の方に聞きたくもあるのだが……まず、私がここにいる事からだな」

ウィツアルネミテアを封印していた力はとても強力であり、数百年おきに再封印を施せば問題もない筈だった。しかしその前提は崩れさる。

異世界同士の融合はそのたびに大きな力を発生させる。今現在はある程度安定している力だが、不安定な頃に繋がれたこの世界は幾

度となく地震に襲われた。地震は封印の力を大きくぶれさせていたが、その段階ではまだ封印がとける事はなかった。

だが、異世界の住人により、その封印を解く試みがあったのだ。薄れていても強力な力に変わりはないが、その封印は無理矢理解かれ、ウィツアルネミテアは現世に降臨する事になる。

「封印されていた身だったが、私の意識はまだ覚醒していた。何か良くない事が世界に起こっている事も判っていた。そんな中で、私に呼び掛ける者がいた」

「ウルトリイ殿が施した封印は強力無比……。それを乗り越え、破った者がいるというわけですか」

空蟬と呼ばれる人格を宿すハクオロは、戦いを望んでいない。しかし封印を解いたものがウィツアルネミテアに望んでいたのは、戦いを望むディーの人格だった。ウィツアルネミテアは契約を結んだ人に対しては絶大な力を及ぼすが、それ以外の者に対しては力相応の効果しか及ぼさない。力自体が強力なため、中々負ける事はないのだが。

「私を呼び出したのは、十を越えたかどうかという少年だった。しかし、その表情は笑みが張り付き、悪魔のようだった」 絶大な力を持つウィツアルネミテアに対し、その少年は従属を求めた。あまりにも不遜な物言いに、きっぱりと拒絶を表すと、何故かその少年は嬉しそうに笑う。

「そして次の瞬間には少年の姿は無く、見たこともない生物が私を取り囲んでいた」

取り囲んでいたのは少年が使役すると思われる怪物だったが、どれも強大な魔力を持っているようだった。合計で九匹の魔物がウィツアルネミテアに対し攻撃を仕掛ける。単一の力ではウィツアルネミテアに部があるようなのだが、近い能力を持つ魔物に一斉に攻撃を仕掛けられては流石に厳しい。たちまち組み伏せられてしまった。

「組み伏せられると、件の少年が空気から滲み出るように現れ、漆黒の玉を取り出し、私に掲げた。全身に走る痛みの中の、私は――」

「ウィツアルネミテアと分かれてしまった、というわけですか」

「ああ。それを認識した後、私は意識を失ってしまったのだが、まさかこうやって生きてここまで戻って来れるとは思っていなかった」
「つまり、今聖上はウィツアルネミテアとしての記憶はあれど、力を使うことは出来ないわけですか」

「ああ、今頃は半身の人格でウィツアルネミテアは動いているだろう。その力も少年の手に渡っていると考えていい。僥倖と言えるのは、仮面から引き出された力がそのまま、鉄扇で戦うことは出来そう、というぐらいだな」

ウィツアルネミテアによって繁栄する事となった亜人類は、元々は人類の英知によって創られた生命である。生命を創っていた時代、人間は抵抗力が弱っており、施設の外へ出れずにいた。ハクオロはそうなる前に生まれた人間だが、それでも亜人類と比べれば肉体は弱かった。仮面は、ハクオロの力を引き出し亜人類と互角に戦う身体能力を実現させていたのだ。だが今は、仮面がなくても身体能力が持続的に強化されているようだった。

「ここまで帰ってくるのに十日ほど費やしたが、少年の噂は聞いていない。いつかは追わなくてはならないと思っているが――今はこの世界の異変について、詳しい事を聞かなければな」

ハクオロが今ここにいる理由と当座の問題を聞いた後で、トルネコ達に話が回って来たようだ。

「見たところ、旅の商人と良家のお嬢さんの組み合わせとお見受けするが、私はここトウスクルで皇をつとめていたハクオロと言う。名前を聞かせてもらえないか？」

一国の王たるハクオロだが、その言葉からは親しみやすさが滲み出ている。元々成り行きで皇となったためあまり堅苦しいのも好きではないのだろう。公務をほっぽりだす事もままあった。

「これはご丁寧に……私は旅をしながら武器を売り歩く商売をしておりますトルネコと申します。こちらの女性とは行き倒れていた所を私が助けたのが縁で共に旅しております」

「蓬莱山輝夜です」

良家のお嬢さんと言われたのが嬉しかったのか、気持ちしとやかに挨拶をする。しかしハクオロはそれ以外の部分に興味を持っているようだ。

「艶やかな黒髪にその佇まい、そして輝夜と言う名前……まるで昔話の『かぐや姫』のようだな」

「あら……まさか幻想郷の外でその話を聞くななんて思わなかったわ。まあ昔の話ね。それより、周りの事を聞きたいんでしょ？」

予期せぬ返しに多少戸惑う輝夜だったが、すぐに振り払ってトルネコに話を始めるよう促す。

「私のほうはいつでも話を始められますが、そちらはどうですか？」

トルネコはあまり深く突っ込まず、話を始めてもいいかハクオロ達に聞く。ハクオロもそれに頷き、新しい人物を交えて二日目の情報交換が始まるのだった。

それから七日間ほどは、トルネコが世界について説明したり、ハクオロが国の状況を細部まで確認したり、アルルゥと遊んだりなど国内での動きが活発となった。とはいえ、所々に配置している兵士からウィツアルネミテアの目撃情報なども地道に集めていたのだが、そしてさらに数日が経った頃、トゥスクルの北の方にある関から、首都に早馬が到着する。目立った外傷は無いようで、落ち着きからも他国の侵略ではないようだ。

「遅くなった。何があったか話してくれ」

謁見の間にハクオロがやってくると、兵士はひざまずきながら報告を始めた。

話によれば、トゥスクル最北端の村落の村人から情報が入ったという。遠くからでも異形とわかるほどの大きさの怪物が、さらに北の方へ消えていくのを見たという。ハクオロは各地に巨大な怪物を

見たら近くの兵士に報告するようおふれを出していたため、迅速に伝わったわけだ。

しかし馬を使ってここまで来てから報告している事を考えると、目撃されたのはかなり前の事になる。

「トルネコ殿から聞いた話では……北には遥かな氷原が広がっているのだったな」

トウスクル最北端の村はごく普通の平原が広がっている。それより北が氷に包まれているわけだ。つまりウィツアルネミテアはすでに氷原に入っていると考えていいだろう。こうなると、準備をしないわけにはいかない。トウスクル周辺は比較的温暖な気候で、寒さへの備えは殆ど無い。氷原があると聞いてから、そこに赴く可能性もあると用意させていたのだが、やはり進軍させられるような蓄えにはまだ至っていない。

「とにかく、準備を急がせるとしよう」

ハクオロは報告した兵士を労うと、奥に戻っていった。

ウィツアルネミテアの行き先がおぼろげながらわかったという事で、緊張した雰囲気支配する事になる。その日は結局、兵士用の防寒具を用意する作業だけで一日を費やしてしまった。

大きな問題が起ることになるのは、その日の夜。皆が寝静まり、起きているのは夜番の兵士ぐらいとなった頃、城下町の外れで動く者がいた。急造させた馬車を見上げるのは、他でもないハクオロだった。

「このまま準備を続けていては、軽く一月は経ってしまう——それでは遅い」

実を言えば、防寒具準備の進捗は芳しくない。温暖な地域から出たことがないのだから、それも頷ける。どのようにすれば寒さを防げるか、その意識が浸透していたのはハクオロやベナウィ、トルネコ等の外来人しかいない為だ。防寒具に使う素材も、一から調達しなければならなかった。今でこそ軌道に乗り始めているのだが。

「済まない、皆」

「謝るならこんな事、しないでください」

しかしそんなハクオロの行動も、連れ添いにはお見通しだったようだ。

「……エルルウに、アルルウか」

「私もいるわよ」

一人で発とうとしたハクオロを諫めるのはエルルウ、ムツクルに跨がったアルルウ。そして何故か輝夜もいるようだ。

「エルルウがハクオロを追い掛けようとしてたのは薄々感づいてたし」

「ハクオロさんの事ですから、止めても無駄なんだろうって思います。私なら傷を癒すこともできます」

「アルルウもたたかう。ムツクルがいるからだいじょーぶ」

「と、そういう事よ。連れていってくれないのなら……」

「城に知らせる、ということか」

選択肢はあれど、選択できる答は限られていた。連れて行かないという選択をしても、城にまで報告が行き結果、戻る事になってしまふ。ハクオロの希望が通っても強行軍、という可能性もあり、その場合は兵が何人も死にかねない。素直に連れていくしか丸く納める方法は無いのだ。

「輝夜殿、トルネコ殿と別れてしまおうが？」

「縁っていうものは中々切れないもの。旅をしていれば、また会う事もあるでしょ。それにエルルウは外で始めてできた友達だから、付いていきたいの」

「そうか。エルルウ、アルルウ。これから向かうのはここでは考えられないほどの寒い土地だ」

「大丈夫です。ハクオロさんの分も含めて三人分、作る暇はありましたから」

「ムツクルもあったかい」

「準備万端、といったところだな、まったく」

こうなる事を予測していたかのような行動に、ハクオロは自分の

わかりやすさを認めるとともに、万全な準備をしていた二人に感心する。決して歓迎出来るものではなかったが。

「じゃあ行きましょう。まごまごしてたら誰かに見付かるかもしれないし」

夜だとはいえ、ふと人が通るかもしれない。話がまとまると、ハクオロはすぐに馬を操り北へと馬車を進める。

「トルネコ殿からの情報によれば、関を通らずとも北へ抜けられる道があるらしい。遠回りになるから、急がなければならないな」

関を通れば流石に足が付いてしまうので、監視の目が届かない場所から氷原へと向かう。その分行程は長く、追いつかれる危険性も高まるため、一刻をあらそう状況であった。

（まあいざとなれば私が見えなくするまでだけど）

輝夜は最終手段として能力を使う事も視野に入れながら、馬車に揺られるのだった。

そして夜が明ける。夜を徹して走らせた馬車は、既に城からは捕捉できないほどの距離を走っていた。そして事態を把握した城では「輝夜さんかもしれませんでした。どうやら共に行ってしまったみたいです」

トルネコは表向き落ち着いているものの、内心驚いていた。まさか一緒に行ってしまうとは微塵も思っていなかったのだから。

だがそれと反比例するように、ベナウイは落ち着いて指示を出す。二回目だという事もあるが、騒いでも事態は収束しないからだ。

だが、ハクオロに監視を付けていなかった事は、最大の失策だと感じていた。このような事になるのは容易に予想できたからだ。

（あの忙しさの中で、移動手段を用意する時間を作れるとは……迂闊でした。聖上、決して無茶はされませんよう）

ベナウイはすぐに追っ手を差し向けるようにしながらも、お抱えの商人であるチキナロにも話を通すことにする。

そんな事を考えていたのだが、二人の訪問者にいったんその考えを中断することになった。

「……主様はどこにおりますの？」

「聖上がお戻りになったと聞き、馳せ参じました！」

「……ちょうど、旅だってしまったところですよ」

二人の訪問者とは、ハクオロ帰還の報を聞き、戻ってきた二人の剣士。ギリヤギナ族のカルラと、エヴェンクルガ族のトウカだった。

いくつもの世界が混じり合う世界、便宜上世界を呼称をするならば、エンドレス・フロンティアと言われている事は以前述べた。元々エンドレス・フロンティアとは、いくつかの世界が融合し出来ていた。ロストエレンシア、神楽天原などが一例である。

元々この世界は、ゲートと呼ばれるものを介して違いの世界が繋がっているものだった。そのため行き来は出来るものの、まったく同じ世界というわけではなかった。しかし各世界の住人によりアイヌストと呼ばれる存在が打倒されると、世界は分離することなく、各地が混ざりあった状態で融合したというわけだ。

しかしその融合からしばらくして、見たこともない世界がいくつも融合する現象が発生する。原因はようとして知れないが、異邦人は拒まないという考えが広まり、共存の道が見える事となる。

だが今になって、原因の一端が明らかとなっていた。

それを知ったのは、錬金術師であるとともにネクロマンサーであるレザード・ヴァレス。彼の持つ賢者の石は全ての情報を内包していた。それには多元世界の情報も眠り、世界を超越したものとして語っていた。

レザードが知った情報は、レナスに伝わり天空城全体に伝わっていく。そして倒されたはずのアイヌストが、生き残っているというのも囁かれている。

そしてついに、エンドレス・フロンティアへ手が差し向けられる事になった。話し合いの結果、太陽神エロール管轄の人間を三人選び送る事になった。

冒険家のグレイ、聖戦士ガラハド、そして火を操る術を得意とするミリアムであった。三人はロストエレンシアの都市、トレイデル・シュタットにて、アインストの情報を集めているが、情報どころか知っている人すらいらない。しかし最後に大きい当たりを引く事になる。

それは、実際にアインストを打倒した人だった。

精霊の森の側の小さな村エレンディア。ここを取り巻く状況は、ほんの一ヶ月で驚くほど変貌していた。

インフェルノスとの戦いは終わりを告げ、終わったと思われる戦いだったが、それは単なる始まりに過ぎなかったのだ。始まりは、告死天使レダによる裏切りから始まる。

ヘクターが神罰を行う、というのは力を得るための口実に過ぎない、というのが明らかになったためだ。ヘクターはユグドラから得た聖剣を使い、リヴィエラに眠る破壊の化身、セトを取り込む。ヘクター元々の力とセトの力、そして聖剣の力でエクセル達は全滅の危機に曝される。

しかしそれは、闖入者によって妨害されることになる。邪魔をしたのはユグドラ率いる、かつて王国軍として戦った将たちだった。死の淵に立たされていたエクセル達は生を拾ったのである。が、ヘクターはそのまま消え去り、まんまと逃げうせてしまった。

それから数日、エレンディアの魔術ギルドにユグドラ達とエクセル達、あと射命丸が揃う。

「……集まってもらったのは他でもない、ヘクターの行き先についてなんだ」

最初に口を開いたのはエクセルだ。リヴィエラで過ごした日々は、彼を逞しくさせ、立派な告死天使へと成長していた。そんなエクセルがまず出した話は、ヘクターの行き先についてだった。

「ヘクターがどこへ向かったか知っているのですか？」

これはユグドラだ。聖剣を無くした彼女の今の得物は白銀のレイ

ピアで、腰にぶら下がっている。ユグドラが話すのは、純粋な疑問だった。

「うん。レダがヘクターの話を聞いてくれたんだ」

レダはエクセルと同じ告死天使である。神罰のため、共にヘヴンズゲートを通ってきた。ただ、エクセルは新米も同然だったのに対し、レダは歴戦の天使だった。彼は裏切った事により、エクセル達の仲間となっていた。

「世界が融合してからの事だ。最初の変化に気付いたのは、テティスに流れる水だ」

一見関係なさそうな話をするレダだったが、話が進むうちに驚愕の事実が明らかになる。水の変化は、それをあらわすことだったのだ。

「流れる水に、微弱な力が溢れていた。それを飲み水にすれば身体は生き生きするだろうし、精神にも余裕が出るだろう」

ただの水だったはずなのに、それを継続して飲み水にするだけで身体には活力が溢れ、豊かにさえなるという。

「そしてそれはリヴィエラだけではない。ヘクターはここに来るまでに世界を行き来していたが、水の性質は良く似たものだった」

その不思議な水に、ヘクターは興味を示し、地表から湧き出る全ての水がそのようなことになっている原因を調べ、またその力の解析も行っていた。研究の末、その力は生命力そのものであり、また大きな力も持つ事がわかった。そしてその水が、たったひとつの樹によってもたらされていることも、明らかになった。

「その樹の名を、マナの樹と言う」

深淵の門

「なんだが寒くなってきましたね……」

馬車の中で揺られているエルルウが、ふと肌寒さに身震いする。城を発ってから、一週間ほど経過していた。

「情報によればあと数時間で氷原だそうだ。氷原と言うからには、それなりの温度になるだろう」

何度か危ない場面に遭遇したものの、咄嗟の機転等で巻き、大神ウィツアルネミテアが目撃された地点までたどり着いた。遠回りしただけであり余計な時間がかかっているものの、見つかって連れ戻されるよりは遥かに早い。そして氷原に入ることができれば追っ手の兵にとって不慣れな地域なため、スピードは大きく落ちる。逃げ切ったと言ってもいいだろう。

「そういえば……自分より強い生物相手を追いかけて、どうするつもりなの？」

輝夜から問い掛けられたのは、まともな思考が出来る人なら当然浮かぶだろう疑問だった。

「なに、私だって正面から戦いを挑もうと思っていたわけではないさ」

今いるメンバーで肉弾戦が出来るのはハクオロとムツクル。治癒はエルルウ。アルルウはムツクルに指揮をするし、輝夜は遠距離から援護。役割分担は出来ているが相手は数十倍はある怪物だ。たった四人では戦いにもならないだろう。

「私がこうして馬車を操ってここまで来たのは戦いを挑むためではない。私は千里眼を持っているわけではないから、少年の目的や行き先などわからない。だが消息を絶つ前に追いかけて、あわよくば拠点、目的が掴めればと思っただけだ。そしてそれは、みすみす力を奪われた私が負うべき責任でもある」

トウスクルはこの世界においてはちっぽけな小国でしかない。監

視できる範囲もたかが知れている。封印があったのはオンカミヤムカイなのだから、二度と消息が掴めない可能性もあったのだ。その僥倖をみすみす逃すわけにはいかなかった。間に合わないかもしれない、という試算が立てられるうちは行動あるのみである。

「つて事はゆくゆく国に戻るつもりがある訳ね……まあ、トルネコはもう旅に出てるだろうけど」

「やっぱり未練があったんじゃない？」

「まさか。ちよつと言ってみただけよ」

輝夜はエルルウの突っ込みに少しムキになって否定する。その様子にハクオロが見つめて言う。

「しかし、エルルウが同年代に見える女性と敬語を使わず話しているのは、見たことがなかったな」

ハクオロがエルルウに出会ってから今まで、普通では考えられないほど密度の濃い年月だった。そもそもヤマユラを離れてから城で生活する中で、かろうじて同年代と呼べる女性はオボロの妹、ユズハぐらいだ。あとは立場的に下の者ばかりで、友達という気安い間柄にはならないだろう。

「長い間馬車の中で一緒でしたから。でも、輝夜のほうから話し掛けてきたんですよ？」

「暇だったしね。それにその時はトルネコとしか会話してなかったから女の人とおしゃべりがしたかったのよ」

輝夜は言うまでもなく女性である。永遠亭にいる時は気心の知れた話し相手が三人いたから、退屈する事もなかった。落ち着いて一カ所に留まっていたため趣味の盆栽いじりもする暇があった。しかし今は三人とはぐれ、エルルウに会うまでトルネコとずっと二人きりだったのだ。その状況が嫌だったわけではないが、やはり同性と話していたほうがお互い気が楽だろう。

「次はその子と話したいんだけど――」

輝夜がアルルウに目を向けると、アルルウはムツクルの影に隠れてしまった。

「こんなもんよ」

「アルルウは人見知りだからな。私も打ち解けるまで苦労したぞ」
押しが強い輝夜でもアルルウとはまだ会話も出来ていない。これはアルルウの気質からくる問題なので、時が解決するのを待つか奥の手で攻めるかのどちらかしが解決する方法はない。

だが輝夜はどうしても構いたいようだ。

「これはまた、尻尾を引っ張るしかないかも」

「ちよっと、輝夜！」

「ほう、またとは何だ？」

「ハクオロさんは知らなくてもいいんです！」

尻尾と聞いてふにゃふにゃになってしまったのを思い出したのか、必死に隠そうとするエルルウ。だが輝夜は残酷にも話を続ける。

「エルルウの尻尾をいじくり回したらエルルウをへ口へ口にしちゃって、それが原因で叱られた事があったのよ」

初対面の女性にすることではない。自由奔放な幻想郷の住人らしい所業といえるだろう。まあ、エルルウを乗せて城まで来る事になったのもそのお詫びであるわけだし、その旅の中で（もちろん最初の数日は一歩引かれていたわけだが）仲良くなったため、結果オーライとも言えるかもしれない。

「恥ずかしいんだから、やめてよ……」

「ほう、そんなことがあったのか。そういえば私も尻尾を勝手に触ったときエルルウに叱られたな」

かくいうハクオロも尻尾を触った一人である。軽くだったことや、同じ家で一夜を過ごした（怪我の治療で）ため、輝夜とはずいぶん違うが。

「歩いた人間から尻尾が生えてるんだもの。触りたくなるのは当たり前じゃない？」

「触りたくなっても触らないの！」

誘惑に打ち勝ってこそその理性だ。だがその誘惑に勝つことは、かなり難しいらしかった。

「……なんか見えてきた」

と、ここで外を見ていたアルルウがつぶやいた。ハクオロがそれを確かめてみるとなるほど、家屋が見えてきていた。トウスクル最北端の村である。

「ようやくここまで来たか……」

ハクオロは地図を広げ、位置関係を調べる。ここを越えればトウスクルの外だ。そしてそれは四人にとって見知らぬ土地に入る事を意味していた。

「何事もなければいいけど、やっぱりそういう訳にはいかないわよね」

「それよりまず、あの子に追いつかなければな」

四人はあらためて気を引き締め、氷原に向かい馬車を走らせるのだった。

「同じだ、なにもかも」

人へ化身したマスタードラゴン、レイドックと呼ばれる町の宿屋にいた。導かれし者を集める作業を中断してまでこのような場所にいるのには理由がある。

それこそマスタードラゴンや、彼より古くから存在する精霊ルビスなど超越存在しか知らない事であるが、天空城がその名で呼ばれるようになったのは、かの城が空に浮かんでから大分後になってからの事だ。以前はマスタードラゴンが治めていないばかりか、城の名前も王の名前を取りゼニス城、もしくはクラウド城と呼ばれていた。

そのゼニス城が、地に根をつけたままの状態で存在していた。つまりこの世界には過去と未来が同時に存在しているわけだ。このレイドックも、天空城よりも遙か前にあった町である。

時が混じり合う世界——違う時の世界同士が混じり合って、何か影響はないのか。問題はそれだけではない。

（精霊ルビスが治世したとされる世界さえも、存在していた）

ルビスと幼年のマスタードラゴンは知り合いであったが、世界を繋ぐ大穴が閉じ、それ以降は連絡が取れなくなっていた。アレフガルド。魔王ゾーマの恐怖に怯えていた世界である。

（大穴の閉じる前、大きな力の消滅を感じた……だから、ゾーマは滅されたのだろうか）

そしてもっともマスタードラゴンを悩ませているのは、地に定着しているゼニス城のことだった。天空城の歴史書を紐解いたとき、魔王を打倒したとき、ゼニス城は天に昇った、とある。それが事実ならば――。

（魔王デスタムーアは、いまだ生きている。それも、隠れるようにして）

夢の世界、現実の世界、そしてデスタムーアの作り出した狭間の世界。その全てが混ざりあっているとすると、見付けるのは難しい。

（となれば……一刻も早く事を進めなければ）

マスタードラゴンはレイドックを後にすると、人目の付かぬ場所で竜へ戻り、事を解決するべく空を飛び回るのだった。

ところ変わってポドルイ、レオニード伯爵の館入って右側の寝室。そこには客人という扱いのレミリア、フランドール、咲夜の三人と、以前咲夜が拾って来た女性が住んでいる。

あの後手当をしたのだが、何かに襲われたなどの怪我ではなく、おそらく歩き続けた事による足が擦り切れただけだったので、そこまで酷いものではなかった。失神してしまうものでもなく、町が見えた事による安堵で緊張の糸が切れてしまったのが顛末のようだ。治療後ベッドに寝かせているとすぐに気が付き、温かいものを採らせると今度は眠ってしまう。これよりしばらくは、調子を取り戻させる事に終始することになった。

そして今現在、ようやく完全と言えるまでに体調が回復した女性

に、レオニードが話し掛ける。

「もう身体は大丈夫ですか？」

「はい、今までありがとうございます」

まずは体調を気遣う台詞から。腐っても貴公子である。吸血鬼だが。

「……では、まずあなたのお名前をお聞かせ願えますか？」

「……私はロザリーといいます」

今まで名前すら聞いていなかったというのはお粗末な事だが、それをまったく必要としていなかったというのもある。

「ふむ、ロザリーと言うんですね。ではロザリーさん、単刀直入に聞きますが……あなた、人ではありませんね？」

レオニードの言葉に、ロザリーは怯えたような表情をした。

「別に弾劾しようなどというわけではありません。あなたの耳がアールヴ等の妖精とよく似ていたもので」

その表情に、レオニードは和らげるような口調で応える。ロザリーの耳は鋭く尖っており、おおよそ人の形をしていなかった。見る人が見れば石を投げるぐらいはするかもしれない。

「……はい。私は人間ではありません。エルフです」

「エルフ……森に住む妖精ですか。それにしても頭が賢そうですが」ポドールイから遠いアケ村の側にあるジャングルには妖精がいるが、外見の儚さから反比例して腕力が異常に強い民族である。その半面、頭は悪い。しかしその考えはこの辺りだけの常識だ。

普通、エルフと言えば森の識者とも呼ばれ、賢く魔術に長ける者を言う。得物も剣や弓で、腕力をあまり必要としないものばかりだ。ロザリーはこのタイプだったが、争い事に関してはまったくの素人である。

「まあいいでしょう。責めるつもりで質問したわけではないのです。貴女はここポドールイの入口で倒れていたそうですが、どんな目的があってここに？」

「目的……ですか。レオニードさん、少し話を聞いていただけます

か？」

「なんですか？」

「実は……私はすでに死んでいるはずなんです」

「……死んでいる、ですか？」

レオニードは微かに驚く。ロザリーが話した内容からすれば、もっと驚いてもよさそうなものだが。

「はい。私はピサロ様に看取られ、死んだ筈なのです」

ロザリーのいた世界では、エルフの流す涙はルビーの涙と言われ、高く売れるものとしてあらゆる手段で涙を流させようとしていた。しかし涙であるため、いくら出させてもすぐに散ってしまう。それでもエルフは人間が狩り、何人ものエルフが死に絶えていった。

ロザリーもピサロという魔族に助けられ一時的に保護されていたものの、魔族内部から人間に情報が流されたことが原因であえなく捕らえられ、息絶える手前まで殴る蹴るの暴行を受けていた。

「では、この町に来たのも」

「はい。気が付けば見知らぬ土地にいて、あてもなく歩いていたらここに」

「それは幸運でしたね」

草原に身一つで投げ出され、武術も魔法も心得がないときている。暴漢や魔物に襲われればひとたまりもないだろう。まあ行き着いた先が吸血鬼に支配されているような町なのは幸運なのかはわからないが。

「はい、助けていただきありがとうございます」

「治療をしたのはたしかに私ですが、貴女を拾ったのはレミリア嬢の侍従です。後で戻ってくると思うので、礼ならそちらに」

今日も今日とてレミリアとフランは地下で魔物達と戯れたりしていた。そのためこの部屋にはレオニードとロザリーの二人しかない。

「では、私はこれで。今日は来客がありますので」

「あ……お待ちください」

とりあえず最低限聞き終わり、この後の来客を招きいれる準備をするため戻ろうとしたレオニードを、ロザリーが控え目に引き留めた。

「おや、まだ何か？」

「はい。貴方はピサロという名前を聞いたことはありませんか？ 普段はデスピサロと呼ばれているのですが」

「いえ、聞いたことはありませんね」

「そうですか……」

芳しくない答えに、ロザリーは残念そうに俯く。俯いた表情は、悲嘆と焦りがないまぜになったようだ。

「耳にすることがあればお聞かせしましょう。では」

そんなロザリーを見兼ねたのか、レオニードは部屋を出る直前に小さく呟いた。だが、ロザリーの耳にしっかり届いたようだ。

「――ありがとうございます」

ロザリーは同じく小さな声で感謝をするのだった。

玉座へと戻ったレオニードは、何やら考えているようだ。

（甦りし者……か）

その内容は、やはりロザリーに言われたこと。自分は死んでいたのに甦ってきたという話についてだ。普通ならば、そんなものはほら話だと切り捨ててしまうのが普通だ。不死者というモンスターとして復活するのはよくあることだが、生前と一切変わりなく、知性も完全に保ったまま生き返るというのはほぼない。

だがレオニードは、ついこの前に似たような話を聞いたばかりだった。

（アバロンから来たキャット、という女性の話だったな）

正確には、キャットから直接聞いたわけではない。情報を集めさせた結果の推論として浮かび上がった説である。

始まりはキャットがポドルイへ訪れ、レオニードの館へ来たことからだった。アバロンより来たと語る女は、七英雄という者の情

報を集めていると語った。むろん、聞いたことがないレオニードは手早く対応し、帰ってもらったのだが。

キャットが館から出ていく際、一瞬だけ見せた素人ではない足捌きを見る。それも一朝一夕では身につかない動きだった。それまではどこにでもいるような歩きだったのに。それは、扉という向こう側が見えないが故に起こした防衛反応だったのだろう。しかしその一瞬はレオニードに興味を抱かせるのには充分だった。

まず調べたのはアバロンについて。皇帝による政治から、ある時を持って共和制となったこと。それ以前は隣国一の軍事力を誇っていたこと。皇帝自身が最強の兵であり、その力で帝国領を広げていったこと。そしてたどり着いたのが、国に伝わる昔話、七英雄の伝説についてである。

要約すれば魔物を七英雄が倒したが、それと同時に七英雄も消えた。ありふれた英雄譚ではあったが、アバロンのレオン皇帝の時代、魔物が闊歩するようになった時、七英雄の再来を望んだあたり、伝説というよりは事実として扱われていたようだ。

そして七英雄は再来する。誰もが魔物を倒し、世を平定してくれろと思っていたのだが、そんな事は知らないと言わんばかりの行動を取ったばかりか、魔物に手を貸す始末。

アバロン後期に記された歴史書によれば、七英雄は古代人の策略により異世界へ飛ばされたが、アビスゲートを用いて世界へ戻り、古代人へ復讐するために動いていたそうだ。アバロンは七英雄と戦っていたが、命を奪う術を破る為に用いた伝承法と呼ばれる術は、古代人より伝えられたとされている。

さらに読み進めると、アバロン帝国の終わりと同時期に、七英雄を滅ぼしたという記述が入っていた。なんのことはない、七英雄はすでに滅びていたのだ。

が、そこに無視できない情報が入る。滅びたはずの七英雄の一人、クジンシーが生前と変わらぬ姿でアバロンに出現したというのだ。そしてそれは、キャットが館を訪ねる少し前の事であった。これら

の情報から、七英雄は甦ったという推論が立てられる。死んだ者が生き返る、まさにロザリーの件と同じではないか。

そして七英雄がこちらの世界へ戻る手段として使ったアビスゲート。それはレオニードにとっても非常に馴染み深いものだった。四魔貴族が守っていたのもアビスゲートなのだから。

（アビスゲートの向こうには四魔貴族の本体だけではなく、七英雄もいるのか？）

推測は尽きない。しかしどんなに考えても今は可能性が増えるというだけで、事実となるわけではない。しかしアビスゲートを越え、サラを助けると言っていた彼らが戦う相手が増えるかもしれない考えると、いくら考えても止める気は起きなかった。

と、そこで思考に割り込んでくる気配を察知する。どうやら用を済ませる時が来たようだ。気配の主は、既に館の扉の前に立っていた。それを確認するとレオニードは扉を開く。

扉が開かれると、気配の主も動く。扉をくぐり、あっという間にレオニードの前まで歩いて来ていた。

「いらっしやいませ。どのような件でしょう？」

レオニードが紳士的に問うと。

「アビスゲートを越えるため、鍵となる少年が欲しい」

天空城に集う神のうちの一人、八坂神奈子はそう要求した。

邪配合

氷原に行くこと数日。あまりにもあっけなく、目的が達せられる事になる。少年とウィツアルネミテアが並んで歩いているところを見つけてしまったのだ。

「ハクオロ、どう思う？」

「少年に合わせて歩いている……という可能性もあるにはあるが、十中八九、罠だろうな」

追ってくるからにはそれなりに見付けられる可能性はあったわけだが、まさかただ直進してきただけで見付かるとは想定外だ。むしろ、追わせるためわかりやすい道を通ったと考えるのが妥当だろう。

「罠ですか……目的は何でしょうか」

「私を誘い出そうとしているのかもしれないな」

「ハクオロを？ 殺さず放置しておいたのに？」

ハクオロを連れていきたいなら放置せず持つてくればよい。巻きたいのなら早く逃げてしまえばいい。つまり、少年には追い掛けさせたいという考えがある事になる。

「……見た感じほんとに子供って感じだし、意外と単純な考えなのかもしれないわね」

「だが、従える魔物は強大だ。油断はできない」

複雑な思考を常に抱えて生きている人間などそうはいない。目の前を歩いているはずの少年も単純な考えで動いているのかもしれない。だが、彼が使役する怪物には最大限注意しなければならぬ。

思考は尽きないのだが――それは、強制的に中断させられることとなった。

「せっかく待っててあげたのに――」

馬車のずっと前を歩いていたはずなのに。

「ウウウ……」

気が付けば、少年は馬車の目の前に立っていた。あまりに突然の事態に、ムックルも警戒を強める。

「ずっとこんなところで話してるなんて、僕を馬鹿にしてるの？」

「久しぶりだな、空蟬よ」

それも少年だけではない。ウィツアルネミテアも馬車の目の前で覆うように立っていた。腕を振るえば、馬車など簡単に薙ぎ倒されてしまうほど、致命的な近距離に。

「くっ、抜かったか」

「まず出てきなよ。でないと潰させるよ？」

少年は四人に馬車から出るよう告げる。それが成されなければ、彼は容赦なく馬車を潰すだろう。

「……わかった。少し待て」

四人は言われた通り馬車から出て、少年から少し離れた馬車に立つ。

「そんなに警戒しなくたって、君達には何もしないよ……やれ」

「わかった」

すると出た途端に、少年がウィツアルネミテアへ指示をする。その指示に、ウィツアルネミテアは大きく腕を振り上げ――馬車を馬ごと粉々にした。潰れた馬から血がはじけ飛ぶ。

「これで退路はない。さて、何で追って来たの？」

「何故……だと？ 貴様はウィツアルネミテアの力を奪い、何をしようとしている」

「なんだ、そんなことか。僕はただ、強いモンスターが欲しかっただけだよ。だって僕は、モンスターマスターだからね」

少年はけろっとした顔で語る。その表情はハクオロが語った邪悪さはなく、ただ子供らしい無邪気さに溢れていた。

「モンスターマスター？ 何よそれは」

「モンスターを操って戦う人のことさ。そこの女の子だって魔物を操って戦ってるように見えるけど？」

少年が指差すのはもちろん、ムックルに跨がったアルルウである。

モンスターマスターの素質とは魔物を仲間に出来ること。森の母であるアルルウも、ある意味そう言えるのかもしれない。

「強いモンスターを捕まえて、配合する。そうすればもっと強いモンスターができるんだ」

「あの時に出した魔物も作ったものなのか!？」

「当然だよ。僕が作っているのはどれも名だたる魔王——でも、魔王の魂が入ってないからクズみたいなものなんだけどね」

あれほどの魔物を従えながら、それをクズと言ってしまえる精神。それは子供の純粹ゆえの弁なのか。

「このウィツアルネミテアは、僕がここに来てから収集した情報で1番近くにあった。だから従えようと思って」

「封印から解いた……というわけか。だが、事の重大さがわかっているのか!？」

「重大さ? という事だい?」

ハクオロからの問いかけに、少年は不思議そうに聞き返す。

「まさか強大な力は身を滅ぼすとか、神や魔王を従えていてはよくない事が起こるとか、そんな理論を振り回すつもり?」

無邪気だった少年の表情は、徐々に形を変えていく。裏に底知れない闇を感じさせる、どこまでも暗い表情だ。

「神も魔王も、僕にとってはモンスターなんだ。自分が理解出来ないから、害をなすからって彼らを否定したくせに、僕に説教するつもり?」

「……」

少年の言葉に、ハクオロは黙ってしまふ。少年が言う言葉もまた、真理を突いていたからだ。だがその言葉は、万人に理解が得られるものではないだろう。事実ハクオロも黙ってはいるが、主張に納得できたわけではない。

「僕はそんな神や魔物を力で従えて、誰よりもモンスターマスターとして強くなる。だからこうして旅をしているんだ。力を求め続けるのはいけない事かい?」

モンスターマスターとはなんと業の深い職であろうか。この少年は、あのような魔王に加えてウィツアルネミテアを従えているのに、まだ足りないと言っている。ここまで吹っ切れていたのでは、説得も難しいだろう。

「――その魔物を使って、人を襲おうと考えてはいないのだな？」

説得できないのは確かだが、少年の行動原理は単純だ。話をした限り、人に危害を加えるつもりもないらしい。その少年の成す事を、四人のいずれも阻む正当な理由はなかった。

「もちろん。僕の目的は純粋な力だけだからね」

ならば、野放しにしても少年側から何かをする、という事はないだろう。ハクオロにも人間から攻められて倒すなど言えるほどの資格は無い。ならば、見逃すしか手はないと言えそうだった。

見逃そうとしている事に気が付いた輝夜は、ハクオロに小声で話し掛ける。

（ねえ、もしかして見逃すつもり？ あの子は何のためらいもなく馬車を潰したのよ？ 生きた馬が引いていた馬車を）

たしかに少年は指示をして、ハクオロ達が乗ってきた馬車を潰した。生きた馬も一緒に、である。

ハクオロ同じように小声で輝夜に告げる。

（だが、彼にこちらと敵対する意志はないようだ。それに見逃さなければ私が囹になったとしても全員殺されるかもしれない）

見逃すという結論にいたる最も大きな事柄、それは見逃さなければここにいる全員が間違はなく殺される、という事実である。ウィツアルネミテアの力が奪われていなければまだ可能性はあっただろうが、今の状態では戦えない者を庇いながらなどの戦いができるわけもない。

（今は見逃すしか方法がないんだ）

（――私が囹に）

（エルルウの友達を捨駒になんて、できるわけがないだろう）

輝夜の申し出もハクオロに却下される。輝夜はいくらでも生き返

る事が出来るが、三人にはそれを教えていない。まあ知っていたとしても囷にして戦うなんて真似はしないだろうが。

「……わかった。私はもう――」

会話を打ち切り、ハクオロが返答を返そうとすると、突然少年が笑い出した。

「君達、考えてることがわかりやすすぎだよ」

少年の突然の言葉に、場の空気が凍てついたような感覚を覚える。「まあいいや。どうせ追って来ても返り打ちにするだけだから。じゃあね」

少年は懷から鳥の翼を取り出し、放り投げた。すると少年は天高く舞い上がり、ものの一瞬で四人から見えない場所まで飛んでいってしまった。ウィツアルネミアも気が付けば、いなくなっている。「おとーさん……」

「アルルウ、心配してくれたのか。ありがとう。私は大丈夫だ」

アルルウも少年のただならぬ気配に警戒していたのだろう。その矢面に立たされていたハクオロを心配した。

「遊ばれてたってわけね」

鳥の翼はおそらく、使っただけでどこかに移動が出来るものなのだろう。つまりあれがあればいつでも撤退ができるし、最初から使っていれば足跡すら残さずに逃げうせられたはずだ。それをしなかったということは少年にとってこれが戯れだったということだろう。「でもあの子、なんだか寂しそうだっただ」

「寂しい？あの子供が？……そんなのとは無縁に見えたけど」

エルルウだけはあの少年から邪気の類ではなく、何かを感じ取っていたようだった。

ともあれこれでひとまずの危険は去った。馬車が無くなり食料もぐちゃぐちゃで先行きがまったく不透明だが、あの場でそのまま殺されるよりは遥かにマシと言えるだろう。

「それにしても、あの時は確かに馬車の遙か前を歩いていたはずだ。それを意に解さず突然目の前に現れるとは、予想より強大な力のよ

うだ」

それはスピードとかの尺度で計れるものではなく、文字通り瞬間移動だった。少年を注視していればその瞬間を見れたかもしれない。おそらく、鳥の翼を使った時と似たようなものであることは考えられるのだが。

「こうなつては追跡も危ない。それにあの少年を信用するなど出来ない。どうにかしてトウスクルまで戻らなくては」

少年にとって距離は障害にならない。悟らせず尾行するのは可能かもしれないが危険すぎる。ならば力を蓄える必要があるとハクオロは考えた。それと同時に独断で尾行したのは失策だった、と強く悔いた。

「真っ直ぐ北に向かったから、その道を戻れば帰ることはできるはずだけど」

馬車でさえ数日かかった行程を徒歩で、しかも食料なしで踏破するなど不可能に近い。それに歩くのは平原ではなく氷に包まれた大地である。効率も大幅に下がる事は間違いない。

「とりあえず歩きましょう。考えてる時間が惜しいし」

このままでは埒があかないと、輝夜が促し来た道に戻る。しかし歩き始めて数時間、非常にまずい事態が起こってしまった。

「ハクオロさん、空から白いものが降ってきてます」

エルルウに促されるまま上を見ると、空から大量の白い粉が降り始めていた。氷原の出来るような環境下で、空から降る白い粉。それは触れると冷たく、人肌の温度で水に溶けるもの。

そう、雪である。ただでさえ歩きづらいというのに、氷原全域に雪が降り始めたのだ。

「ウウ……」

ムツクルも雪に拒絶反応を起こしている。ムツクルの種族はムテイカパといい、水に濡れる事を嫌い、それにより毛が柔らかくなる。雪も水であるわけだから、ムツクルはそれに反応しているわけだ。

そして雪は、次第に勢いを増す。さらに吹き付けるような風も起

こり出していた。

「あいつ、これを知ってて馬車壊したんじゃないの!？」

輝夜の怒号が響く。事実それを信じてしまうぐらいに、天候が著しく悪化していた。もはや降雪ではなく、風と組み合わさり吹雪の様相となっていた。

「はあ、はあ……」

歩くたびに奪われていく体力。白一色となる視界。そして下がっていく体温。このような氷原では、何よりも体温が下がり、行動力が落ちていく事を問題視しなければならない。低体温症による凍死は、この状況で起こりうる最悪の結末だ。

「アルルウ、大丈夫か」

「……だいじょーぶ」

アルルウの返事にも元気はないし、ハクオロの声にも覇気は見当たらない。

(このままじゃ……私以外全滅する)

このまま四人が死に至ることがあっても輝夜は生き返る。だが身体が冷え切っては死に冷え切っては死にと、まさに地獄のような苦しみを味わう事になるだろう。

「きゃあっ!」

「エルルウ大丈夫!？」

足をとられ躓いてしまったエルルウを助け起こす輝夜。その際触れた肌は冷たい。指の先も赤くなり始めている。低体温症による凍傷の前兆だ。

(こう雪が深くちゃ、空を飛んでも意味がない……誰か……助けて)

もはや誰かが助けしてくれることを期待しなければどうにもならない状況となってしまった。ただ絶望がその場を支配していくのだった。

「こりゃ、ふぶいてきたね」

戦車の中で火乃香は呟いた。戦車は、火乃香がなんでも屋をするための移動手段として使っているもので、仕事上欠かせないものとなっている。

「そりゃそうさ。ここはもうロンダルキアの近くなんだから」

今戦車の中にいるのは四人。火乃香と、火乃香に依頼を取り付けた三人だ。火乃香の呟きの後に喋ったのはサトリという男で、サマルトリアという城の王子である。破壊の力を有り余る隼の力で制御し、力を得た疾風の魔法戦士だ。

他の二人は、ロランとルーナという名前だ。ロランはローレシア城の王子で、魔法が一切使用できない肉体派だ。ルーナはムーンプルク城の王女で、ロランとは逆に魔法のスペシャリストだ。半面肉弾戦には向かない。今は別の部屋に控えている。

「ロンダルキアは吹雪が舞い、野原は雪が降り積もり、氷で覆われるようになった。ここを馬車もなく三人身のまま歩いたのは、今考えれば無謀だったかもな」

「凄い事するね……ボギー、何か問題ある？」

『この程度なら支障はない』

戦車を管理して全てを把握し、意のままに操るボギー。その正体はあるマザーコンピューターから根分けされた人工知能であった。人工知能はそれ自体に意識があり、判断能力すら備える。人と同じように動く事ができるわけだ。人と違う点は、あくまで機械に宿る人工知能であるため、人のように手足を持っていないぐらいだ。むしろ後天的に与えれば人とはほとんど変わらない。人と暮らすことで、人に近付くような兆しささえ見せる。

「はいよ」

火乃香は報告を聞くと、壁に寄り掛かり俯く。何か考えごとがあるようだ。

（このあたりに手掛かりがあるって話だけど……）

火乃香が考えていたのは、浄眼機に依頼されていた進化の秘法についてだった。

進化の秘法は、元々一つの世界で完成したものだった。だがその理念自体は多くの世界で存在しており、錬金術において最高峰の技として伝えられていた。多くの世界で実現することが出来なかった力だが、その方法が存在すると広まったことを境に、その方法を探るために動くものたちが劇的に増えていた。

そのため火乃香にも、情報を集めなくても勝手に噂として流れてきていた。殆どがガセだったが。

進化の秘法は、黄金の腕輪を用いて初めて完全なものとなる。その話も噂として流れているため、黄金の腕輪と進化の秘法を同時に求める人が多い。火乃香は何人も錬金術師が挫折するのを見て来た。それぐらい求める者は多かった。

（もし、あれが本当なら）

しかしそんな中、進化の秘法とよく似た方法で、黄金の腕輪を必要としない方法があるという噂が流れる。魔物限定の話であるらしいのだが。

魔物同士を交配させて新しい魔物を作る配合、魔物を特殊な装置で合体させる魔物合体など、魔物を強くするための方法はあるのだが、その方法は邪配合と呼ばれ、無理矢理合体させた上できるはずのない魔物を作り出してしまうという。なんでも、魔王と呼ばれる存在からもたらされたそうだ。

そしてその方法を使うのは謎の少年、その名をテリー。彼自信、強力な魔物を連れた上、日々強力な魔物を作るため邪配合を繰り返しているという。

正当な進化を振曲げる邪配合。それはまさしく進化の秘法と本質的に同じであった。

テリーは、魔物のため外を出歩く事が多いらしい。ロンダルキアに入る前、近くの村で謎の少年と魔物が連れ立って歩いていたとの情報を耳にしてから、もしか、と思っているわけだ。

『――香、火乃香！』

「うわっ」

と、考え事に夢中でボギーからの呼び掛けに気付かなかったように、ボギーの大きな声をまともに聞いてしまった。

「なんか、人がいるらしいぜ」

『考え事をするのもいいが、人の話はちゃんと聞け』

「うるさいな！ 気付かなかったんだよ！」

ここぞとばかりに責めてくるボギーといつも通りに反論する火乃香。いつもならもう少し軽口が交わされるところだが。

「こんな吹雪の中、人が？」

天候の状況と報告のギャップに驚いた火乃香は、さっさと打ち切る。

『それもゆっくりだが、動いている。この速度なら、おそらく徒歩だろう』

「徒歩？ ますますおかしい……ちよつとそこまで行ってみようか」

吹雪の中、歩く人間。よほどの酔狂でもなければ、思い当たる要因は一つである。そして側まで行き、その予感的中した。

『男性が一人、女性が三人、動物が一匹。こちらを見ているようだぞ。どうする？』

ボギーのまるで急かすような言葉に、火乃香は迷わず答えた。

「助ける。エアロック開けて！」

遭難者を助ける選択肢しか、火乃香には存在していなかった。

邪配合（後書き）

口調の再現は難しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9211j/>

東方異世界

2010年10月20日00時35分発行